天空の刻印師

ミミズ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
天空の刻印師

【Ｎコード】
Ｎ８４８０Ｔ

【作者名】
ミミズ

【あらすじ】
学力は普通。運動神経はクラスの平均よりも悪い程度。妄想癖が強いだけしかとり得のない悠真だが、ある日の放課後の図書室で異世界の扉を開いてしまった。
怪しい妖精（？）のアリエルに導かれて、辿りついたのはどこかの王宮（？）。と思えば王女（？）のセラフィを狙う暗殺者と間違えられて、命を狙われる羽目に。
――ここは俺の妄想の中なんだろ？　どうして俺は追われなければならないんだ！

愕然とする悠真に長剣がきらめく――そのとき、もうひとりの悠真があらわれて神の力が降臨し――！

舞台は刻印が支配する天空の世界です。文庫一冊分、３０～４０話で完結させる予定です。　９／５：キャラの人気投票をはじめました。どしどし投票していただけたらと思います。（、・ω・´）

1

異世界なんてものは存在しない。

そんなものは所詮、だれかがつくりだした幻想にすぎない。

中世ヨーロッパみたいな舞台で、魔法が世界を支配していて、正義感の強い主人公がパーティを組んで旅をする。

個性的な仲間キャラの中でも主人公の存在は絶対で、世界を変える運命の力だの伝説の魔法などを持っている。お姫様や貴族の娘といった可愛いヒロインと恋人になり、世界に混沌（こんとん）をもたらす魔王を倒す。

ライトノベルを読んでいて、あるいはＲＰＧをプレイしていて、そんな世界に行けたらいいなと何度思ったかわからない。

小学生のときは、けっこう本気で考えていた。

自分たちが暮らす現代社会と表裏一体の世界があって、そこの住人――神官やら召喚士に突然呼び出されて異世界にトリップする。赤いマントを羽織って長剣を腰に差し、回復役の女の子と傭兵の男を連れて旅をする。

そんな、ありもしない幻想を思い浮かべていたのは、もう五年以上も前のことだ。

現代社会は、つまらない。

朝起きてご飯を食べて学校に行って、眠い授業を受けて友達と他愛のない会話をして、家に帰ってご飯を食べて寝る。

そのくり返し。

魔法がつかえなければ、お姫様みたいな女の子と突然出会うようなイベントもない。当然ながら。ゲームの世界ではないのだから。

異世界なんてものは存在しない。

存在するとしたら、本の中とかネット小説の中とかゲームの中とか――非現実の中でしかありえない。

存在するはずがない。

そう、思っていた。

「つまんねえ」

六時間目の英語の授業と帰りのホームルームが終わり、安藤悠真（あんどうゆうま）は椅子の背もたれにもたれる。

「何がつまんねえんだ？」

そこへ突然声がかかって、悠真はあわてて飛び起きた。

悠真の前の机から椅子を引いて腰かけるクラスメイト。日焼けし

た顔を惜しげもなくさらす陸上部の小林奏太（こばやしそうた）は、顔を赤くする悠真を見て首をかしげた。

「たるい授業が終わってこれから帰宅するっつーのに、何言ってんだ？　五月病か？」

「何でもねえよ。つーか、五月病だったらそもそも学校なんて来ないだろ」

「おお、なるほど。悠真君ってば、あったまいー！」

手の平をぽんと叩く奏太を無視して、悠真は頬杖をつく。教室の窓から空を見上げると、細長い筋雲が横に伸びていた。

つれない悠真を見て、奏太が目をきらりと光らせた。

「ははーん。悠真お前、さてはまた妄想してやがったな」

「し……！」悠真の顔がまっ赤に染まる。「してねえよ！」

「まったくぅ。ワープゲートが突然出現して、異世界に連れてかれて、って。そんなん、本当におきるわけないだろ？」

「う……わ、わかってるよ。んなこと」

「まーでもよお。異世界にトリップして、王国のお姫様と恋に落ちてみてえもんだよなあ！　なあ悠真！」

奏太はげらげらと笑いながら悠真の肩をばしばしと叩く。前方から、どん引きしている女子たちの視線が突き刺さる。

――こいつに話すんじゃなかった。

悠真は襟（えり）をばたばたさせて火照った身体を冷ました。

「んなことより奏太、お前部活行かなくていいのか」

「ああ。顧問が食中毒になっちまったみてえでさ。今日はいねえんだ。ええと、何て言ったっけ？　生肉の……ほら。ユッカだっけ。ユッコだったっけ」

奏太は顎に手をあてて、「ええと」と言葉をつまらせる。悠真はたまらずにため息をついた。

「それを言うならユッケだろ。ユッコって何だよ。おばあちゃんの名前かよ」

「おお！　それだ。ユッコだ。ユッコジャン！」

奏太はがばっと立ち上がって目をきらきらと光らせる。

――だめだこいつ。

椅子からずり落ちる悠真を見下ろして、奏太が首をかしげた。

「どした、悠真」

「別に」

悠真はむくりと起き上がり、机の脇にかけてある鞄をとり出す。机の中にしまってある筆記用具だけをとり出して鞄の中にいれる。教科書を入れると重くなるから、置き勉にしておく。

筆記用具を入れる悠真の目にひとつの本が映った。それは、『カバラ魔術大全』と表紙に書かれた白い本だった。

――そういえば返却日は今日だったな。めんどくさいけど、返しに行くか。

のそのそと帰り支度をする悠真の肩に、奏太が腕をまわす。茶褐色の顔を悠真に近づける。

「てわけでよ、悠真」

「何が、てわけで、だよ」

「まーまー、そう堅いこと言いなさんな。俺は今日部活がないからヒマなんだが、ちょっとゲーセンにでも付き合ってくれよ～」

「悪い。今日はパス」

表情を変えずに答える悠真に、奏太が「どぎょー」と叫びながら後ずさりした。

「な、な、なしてよー。つれないじゃーん。もしかして反抗期？」

「反抗期ってな……きょ、今日はちょっと、用事があるんだよ」

悠真の気を察したのか、察していないのか、奏太はがっくりと肩を落とした。

「そうか。まあ、それじゃあ仕方ないよな。お前もまあ、帰宅部でいろいろと忙しいんだし」

「ああ、そうだよ。だから隼（はやと）とか樹（いつき）を適当に誘って――てか、帰宅部って別に忙しくないし」

悠真が呆れ果てている手前で、奏太は目をぱちくりさせた。

悠真は鞄を肩にかけて階段を降りる。図書室は階段を降りた先の

二階にある。

「ねえねえ。読むと身体が吸いこまれる本があるんだって」

「何それ。呪いの本？　こわーい」

きゃははと笑う女子には目も暮れず、悠真はのそのそと階段を降りる。放課後の階段は窓から夕日が差しこみ、オレンジ色の寂しい色合いをしている。

「異世界、か」

高校に入学してひと月が経ち、学校にはずいぶん慣れた。

運動神経の悪い悠真にとっては恐怖の対象である運動測定が終わり、ほっとひと息ついているところだった。

だが、何かが足りない。

朝起きて学校に行って、眠い授業を受けて夕方に帰宅する。

特別に不満があるわけではないが、どこか面白味に欠けていると、悠真は思う。先ほどは奏太に揶揄（やゆ）されてしまったが、もし異世界に迷いこんだりしたら、この日常はどう変わるのだろうかと、あらぬ期待をしてしまう。

――て、何考えてるんだ、俺は。

悠真はがりがりと頭を掻き、鞄から本をとりだした。『カバラ魔術大全』と書かれた表紙には、セフィロトの樹が描かれている。

オカルトに興味があったわけではない。一週間前に読んだライトノベルにカバラが出てきたから、何となく興味が沸いて借りてみただけだ。

いざ借りてみたのはいいものの、予想をはるかに上まわるハードカバーで読む気が失せてしまい、結局二、三ページをめくっただけだった。

何やってるんだかと思いながら、悠真は図書室のドアを開けた。

図書室の中はひっそりとしていた。紙臭い部屋の中に生徒の姿はない。受付のカウンターをのぞいてみたが、図書委員の姿はなかった。

「だれもいないのか。困ったな」

本の返却は受付を通して行うため、受付に人がいないと本を返却することができない。仕方なく、悠真は机に座って待つことにした。

図書室はドアを開けてすぐとなりにカウンターがあり、カウンターの前に八つの机が二列に並べられている。悠真は椅子を引いて座ろうとしたが、

「ん？　何だ、この本」

カウンターから一番遠い机の端に、一冊の本が置かれていることに気づいた。黒い表紙のハードカバーで、法律の本のようにぶ厚い本だった。

表紙や背表紙には何も書かれていない。白いページを黒の表紙で

挟んだだけの、簡素すぎる本。こんな本をだれが読むのだろうかと思いながら、悠真はページをぱらぱらとめくってみた。

ページには英文のような横文字がびっしりと書かれていた。だが、よく見ると『∧』や『ξ』など、アルファベットではない記号も入っている。何の本なのか、まったく検討がつかない。

――何なんだ。この気味悪い本は。

そう思ったときだった。黒い本から青白い光があふれ始めた。

「な、な、何……！？」

光は八方に放たれ、うす暗い室内をまぶしく照らす。白光は窓を抜けて外へと放たれる。

「お、おい！　やめろって――」

予想外のできごとに悠真は戸惑い、ＬＥＤライトのように白光する光を抑えようと手を押しつける。

だが、手は――本をすり抜けて中へと入ってしまった。

――な、何だこれ。

本がすさまじい引力で悠真を引きこむ。悠真は逃れようと必死に身体を引くが、本の力が強すぎて抗うことができない。

――引き、こまれる……！

膝の力が抜けた拍子に、悠真の身体は本に引かれて宙に浮いた。綱引きで相手チームに引かれるような感覚で、身体はずるずると本の中に引きこまれていく。

「た、助け――」

悠真を完全に呑みこんだ本は、黒い表紙をぱたりと閉じた。眩しい光とともに。

1

「ぁぁァァァァァァ！」

悠真の絶叫がこだまする。目の前にあるのは――闇、闇、闇！

悠真は闇の底に向かって絶賛落下中である。

――俺は、俺は……このまま死ぬ、のか。

本に引きこまれて、今はどうして落下しているのかわからないが、重要なのはそんなことではない。

二十階建ての高層ビルの屋上から飛び降りる勢いで落下していれば、ほぼ間違いなく助からないだろう。

頭の中を高速で駆け巡る、小学生や中学生のときの思い出。それらをキャッチしながら悠真は覚悟した。苦節十五年、決して長い人生ではなかったが、それなりに充実した人生だった。

――いや、充実してなかったから妄想してたんじゃなかったっけ？

落下しながら自分に突っこみを入れていたが、

「パンパカパーン」

幼子（おさなご）の弾かれるような声がひびいて、悠真の身体がびくっと反応した。

まっ逆さまに落下する悠真の足もとに光が灯る。点のような光は

螺旋状の弧を描きながら悠真の身体をとり巻き、顔の前で停止する。通ったルートは光の線となり、落下の速度を徐々にゆるめる。数秒も経たないうちに悠真の身体は宙で停止した。

「おめでとうございま〜す。地球の日本からいらした人間サン」

目の前の光が強く発光し、悠真は右腕で目元を隠す。おそるおそる右腕を下げ――まっ逆さまの体勢であるから正確には腕を上げているわけだが――腕をどかして悠真は絶句した。

光からあらわれたのは、まぎれもなく天使だった。背中に四枚の翼を生やした、拳ほどの大きさしかない少女。大きさからすると妖精といった方が正しいのかもしれない。

――何だよ、こいつ。

妖精のようにミニマムな天使が、こほんと咳払いした。

「ええっと、創造主に仕えるアリエルといいます。よろしくデス、人間サン」

透き通るブロンドの髪を左右で留める彼女は、えへんと腰に手をあてて、ぺちゃんこの胸を張っている。――てか、しゃべれんのかよ、こいつ。

唖然と言葉をなくす悠真を見て、アリエルと名乗った彼女がおどおどした。

「あれ？　おかしいな。地球の公用語のひとつである日本語に翻訳できてるはずなんだけどナ」アリエルは小さな手を広げて左右にふ

る。「あの、あのー、伝わってマスか？　人間サン」

その態度に何となくイラッときて、悠真はアリエルを右手でつかんだ。

「キャ！　な、何をするデスか」

「何をするですかじゃねえ。この電波ヤローが」

「で……？　ア、アリエルは電子の塊ではありませーん」

天使の分際で電子はわかるのかよ、と心の中で突っこみを入れながら、悠真はアリエルを凝視する。アリエルは小さな身体をじたばたさせて、悠真の指を離そうともがいている。

悠真はぎろりとにらんだ。

「よくわかんねーけど、お前は何もんだよ」

「えっ？　ですから、創造主に仕えるアリエルですってば」

「創造主って、神様のことかよ。んなこと言われて、はいそうですかって首肯（しゅこう）できるか」

「でも、ただちに首肯していただかないと話が先に進まないデスけど」

アリエルはもがく手を止めて悠真を見つめる。上目遣いで見つめる表情はとても可愛いが、彼女の存在をうのみにしてよいものなのか。

――俺は確実に病んでる。

悠真の背筋に冷たい汗が伝う。

現実世界がつまらないから、妄想に浸ることはしばしばあった。正直ベースで考えると、現実逃避したかったといえば、うそではないだろう。

だが、だが――幻覚が見えてしまうほど追いつめられていたのか。悠真はショックを隠し切れなかった。

しかも、あらわれた幻覚が天使を装った女の子とは。二次元には興味がないと、奏太に公言したはずなのに。――はずなのに！

「あ、あの。……だいぶ落ちこまれてるみたいデスけど、だいじょうぶですか？」

「あ、ごめん。後もうちょっとで覚悟が決まるから、少し待ってて」

困り果てるアリエルを手離して、悠真は「はあ」と息を吐いた。

ライトノベルやＲＰＧが好きで、異世界に対する願望がある。プラスして妄想癖があり、さらに現実逃避したいと思っていた。よく考えると、そっち系に走る材料はそろっていたということだ。

だが、認めてしまっていいのか。ここで「俺は三次元も好きだ」と宣言すれば、交流は確実に狭まってしまう。そうすれば、奏太らと遊ぶことはおろか、クラスの恵ちゃんに告白することだって――。

「あーもう！　だからお前は何なんだよ」

「えっ？　えっ？　ですから、さきほどから申しあげてマスが創造主に仕え――」

「そうじゃなくて、俺をこんなところに引きずりこんで、お前は何をするつもりなんだよ」

悠真が嫌々話を進めると、アリエルの表情がぱあっと明るくなった。

「デワお話します。……と、その前にお名前はアンドウユウマサンでお間違えないデスね？」

「そうだよ」

何で名前知ってるんだよとか、細かい突っこみはとりあえず無視する。話が止まると面倒だ。

それを知ってか知らないでか、アリエルは満面の笑みでうなずいた。

「はい！　では次にユウマサンが現在置かれている状況ですが、このまま落下すると『イリス』という異次元に落ちてしまいます」

「い、異次元……？」

――あやしい。

神様の次は異次元か。どれだけなめくさってるんだこいつは、という突っこみを悠真は必死で呑みこむ。

アリエルは人差し指を出して小生意気に解説を始める。

「ユウマサンが先ほど広げられた本――あれが『次元の扉』を開くスイッチだったのです。よかったですね～。異次元に行ける確率って、一千万分の一しかないんですよ～」

「あっそ」

「あれ？　嬉しくないんですかあ？」

アリエルは不思議そうに首をかしげる。

――次元の扉？　異次元に行ける確率？　何を言ってるんだこいつは。とりあえず我慢して聞いていようと思ったが、話が突飛すぎてついていけない。

大体、科学が発展した現代社会において、神様とは何か。キリストか？　それともブッダか？　神の存在はダ〇ィンチ・〇ードで否定されたんじゃなかったのか。

わからない。まったくもって理解できない。

「てことで、今すぐ現実世界に帰してくれ」

「強情な方デスねえ」

アリエルはくるりと背を向ける。翼を広げて宙を舞い、悠真と数歩離れた位置で停止した。

「あの、誠に残念デスケド、次元の扉を開けてしまったユウマサンは、元の世界――ええと、地球でしたね。――には、もう帰れないデス」

「……は？」

「だれも神様――おっと間違えました。創造主の意志には逆らえないのデス。……ということで、もう説明するのがメンドウくさいので、はい。説明オワリ」

「へっ、ちょ！　ちょっと待て、電――」

アリエルが指で輪を描くと、がたんと床から穴が開いたように悠真の身体が急落下する。悠真は「ああアア」と情けない声をあげて落ちていく。

「イリスは刻印が支配する天空の世界デスから、きっと楽しいストーリーが待ってますよ、ユウマサン♪」

アリエルは暗闇を見下ろしてくすくすと笑った。

「あいっ！」

どのくらい落ちてきたのだろうか。落下地点は硬い床の上だった。

「てー。まったく、何なんだよ」

はげしく激突した尻をおさえて悠真は呻いた。学校の図書室から目まぐるしく状況が変化して、わけがわからない。

奈落の底は暗闇ではなかった。あたりを見わたすと、白い壁に赤い絨毯（じゅうたん）が敷かれ、部屋の隅には天蓋のついたベッドと金縁の高そうなテーブルが置かれている。

「ここ、どこ？」

悠真は尻をさすりながら足もとを見下ろす。絨毯の上に風呂敷きのように大きな紙が敷かれ、その上に模様が描かれている。丸い円の中に、AやBのような記号がびっしりと、だがどこか整然とならべられている。

「何だこれ」悠真は生唾を呑みこんだ。「ま、魔法陣……？」

「йЯ……？」

正面から呻きに似た声が聞こえて、悠真ははっとした。顔をあげると、魔法陣の外で腰を抜かす女の子がいた。

うすい紫色の髪をなびかせる女の子だった。ラベンダーという色だろうか。灰色に少し青紫色が混ざった、不思議な髪の色をしている。腰まで届く長い髪の先端は鮮やかな紫色。毛先と根元で髪の色が違っていた。

歳は、十四、十五歳くらいだろうか。袖のないピンクのワンピースから、白く細い腕がしなやかに伸びている。瞳の色は毛先と同じく紫色。背は――座っているからわからないが、あまり高そうではない。

――可愛い。

悠真の心は一瞬にして釘づけになった。

「йЯ……？」

ラベンダー髪の女の子は起き上がり、下からのぞきこむように悠真の顔を見上げる。――うわっ、めっちゃ可愛い。

だが、

「○∀×∂ΑωθЬМ～！」

両手をあげて歓喜する彼女。何をしゃべっているのか、まったくわからない。

「な、何っ！？」
「ËΓ◎°C×〜！？」
わずかに後ずさりする悠真に、彼女は首をかしげる。彼女が発する言葉は外来語のようだが、英語とは違う。韓国語や中国語でもなさそうだ。
悠真は頬を掻いた。
「え、っと」
「ЪXζ？」
可愛い。人形のように可愛い。
だけど。
悠真の背中に大量の汗が流れ落ちる。
――神様。やっぱり今すぐ現実世界に帰してくれ。

2

悠真は紙の上に描かれた魔法陣の上で凍りついた。目の前にはラベンダー髪の女の子が上目遣いで悠真を見つめている。頬が少し赤くなっているのは、気のせいだろうか。

――やばい。そんな目で見ないでくれ。

悠真は生唾を呑みこむ。女の子の上目遣い攻撃は、想像以上の破壊力があるのだ。

――どうする。

パニックになりそうな頭で悠真は考える。言葉が通じないのなら、どうやってコミュニケーションをとればいいのか。

――え、英会話するのと同じじゃないか。

「ハ、ハロォ」
「ぇC……？」
「ディ、ディスイズ、ア、ユウマ、アンドウ。……ファ、ファット、イズ？」
「йЯ……？」

悠真の英語の成績は五段階評価で二。というより、彼女が話しているのはそもそも英語ではない。

――な、なら、手話とかボディランゲージをつかえば。

悠真は両手をせかせか動かして彼女に語りかける。とりあえず手を広げて四角を描いたり交差させたりしてみたが、彼女はきょとんとしているだけだった。

――百パーセント伝わってないな。

王宮のような部屋の中、ふたりの間に沈黙が流れる。彼女も何かを伝えようとしているのか、両手を動かしたり、首をきょろきょろさせたりしている。一生懸命なのはとても嬉しいが、悠真には何も伝わらない。

万策尽きたと思ったとき、彼女の身動きが止まった。ボディランゲージをしている最中に、ぴたりと。

「えっ、何……？」

その止まり方はあまりに不自然だった。突然に身動きを止めたのではなく、空間、いや時間が急停止してしまったような、そんな止まり方だった。

色づいていた室内がセピア色に変わっていく。身動きを止めた彼女とバックの景色が色あせた写真のように古ぼけていく。

「大事なこと忘れてマシタ～！」

耳もとから声が発せられたと思うのと同時に、頭上の空間が白く発光した。ＬＥＤライトのような光の中から、電波妖精（本当はおそらく天使）のアリエルがあらわれた。

「お前」

「ユウマサン！　ああ、よかった。まだ生きてたんですネ」
悠真はぽかんと口を開けていたが、はっとわれに返って右手を伸ばした。
「あっ、こら！」
「おっと！」アリエルは驚いて後ろに下がった。「何でいきなりつかもうとスルんですか！」
「お前がこんなところに連れてくるから、早速ピンチになっちゃったんだぞ！　どうしてくれんだ」
「ピンチ、ですか？」アリエルはあたりをきょろきょろと見わたす。後ろにいるラベンダー髪の少女を見てぽんと手をたたいた。「あ、言葉が伝わらなくて早速ピンチになってたんデスネ」
「そうだよ。……悪いけどな、俺は英語とか、あんまり得意じゃないんだよ」
「そうですか。でもだいじょうぶデス！　そのためにアリエルは戻ってきたんですから」
そう言うとアリエルは人差し指を出して、宙に輪を描いた。「創造主よ。ユウマサンにイリスの公用語をしゃべる力を授けたまえ～」
「そんなんでしゃべれるようになるのかよ」
「ああ！　その顔は、またアリエルのこと疑ってマスネ！」
――そりゃそうだろ。
拳ほどの大きさの、翼を生やした天使が宙を舞っているというのだから。アリエルのようなキャラクターはゲームやアニメでよく登場するが、実際に目のあたりにするとかなりシュールな生物だった。
アリエルは胸の前に手をあてて、呪文のようなものを唱えている。

「創造主よ」とか「御力を」という言葉が彼女の口から聞こえてくる。

「そういえば、お前とは普通にしゃべれるんだな」

「集中してマスので、話しかけないでください！」

アリエルが天井にかかげた両手を左右に広げる。足を閉じて背中を伸ばすと、アリエルの身体が十字架を形成した。

右手の人差し指に熱いものを感じて、悠真は人差し指を見つめた。指の第一関節と第二関節の間に銀色の指輪がはめられてあった。

「これ」

「その指輪は『創造主の指輪』デス」

「まんまだな」

「そうなんですよ～。もうちょっと凝ったネーミングに――て！話を茶化さないでクダサイ！」

「はいはい。で、この指輪をはめてると何かいいことでもあんの？」

「うー」アリエルは頬をぶすっとふくらませる。「その指輪をはめていると、創造主の御力によりイリスの公用語がしゃべれるようになるんデスヨ」

「ふーん。でも、どうしてこんな中途半端な位置に」悠真は指輪を持って指の奥にはめこもうとした。「指輪ってこう、指の奥にはめるんじゃないのか」

「それは」アリエルは言葉を続けようとしたが、天井を見上げてどぎまぎした。「あ、後でわかります。その、アリエルの担当じゃないし」

「はあ？　何だよそれ」

「とにかく！　これでもう言葉には苦労シマセンので、ではアリエルはこれで～」

「あっ、待て！」

悠真が手を伸ばすのより早く、アリエルは身体を発光させて姿を消してしまった。

「くそっ。何なんだよ、一体。意味わかんねー」

知らない場所にワープさせられて、今度は妙な指輪をはめさせられている。起きることがいちいち非現実的すぎて腹が立つ。

――しかもそれを信じろと。

アリエルの言う創造主というのは、かなり妄想癖の強い神なのだろう。いや、そもそも彼女らの存在自体が、悠真のつくり出した妄想なのではないのか。

「あの」

そうだ。これは自分でつくり出した妄想なのだ。だから、常軌を逸するできごとが目まぐるしく起きるのだ。なら、別にまじめに考えなくても――。

「あ、あのっ！」

強い言葉に、悠真ははっと顔をあげた。

悠真の前にいるのは、ラベンダー髪の女の子。緊張しているのか、顔を少し赤くしている。恥ずかしそうにしているのが、また可愛い。

――て、そうじゃなくて、色が……もとに戻ってる？

古ぼけた写真のようなセピア色の景色は、もとの鮮やかな色に戻っていた。止まっていた時間も動き出しているようだった。

悠真は左手で頭を掻いた。

「あ、ごめん。その、よ、妖精さんが悪さをしてたもんで」

「妖精さん？」

「あ、いやっ、えっと……何て説明すれば――」

そう言いながら、悠真は女の子と顔を見合わせた。

「そういえば」

「言葉、通じてる？」

悠真がこくこくとうなずくと、女の子が「やっと言葉が通じた～！」と言って万歳した。

女の子は身体をくるりとまわして、にこりとほほえんだ。

「あたしはセラフィーナ。イサベル・セラフィーナ。セラフィって呼んでね」

「セラフィ、さん」

「うん！　……でも、ほんとびっくりした」セラフィは人差し指を下唇にあてて天井をながめた。「天妖（てんよう）を召喚しようと思ってたのに、男の子が召喚されちゃうんだもん」

「天妖？」

「あ！」セラフィは飛び上がるように身体を反応させた。「ううん、何でもない。気にしないで」

イサベル・セラフィーナ。

何ていうか、またしてもＲＰＧ的な名前だ。

――やはり俺は病んでるのか。

セラフィを幻覚だと思おうとしたが、けげんそうに見つめるセラフィの視線を感じて、悠真は慌てて首をふった。

当然であるが、人の名前は名・姓と続くのが通例だ。ということは、彼女の名前はイサベルが名で、セラフィーナが姓にあたるのか。

セラフィと呼べということはつまり、『高橋』を『タカハッシー』と呼ばせているのと同じか。

「あなたのお名前は？」

「えっ、俺？」

「うん」

セラフィが満面の笑みで頷く。悠真は「えっと」と言葉をつまらせる。

「俺の名前は安藤悠真。……おっと、間違い。ユウマ・アンドウ」

「ユーマ・アンドゥ？　変わった名前だね」

「いや、アンドゥじゃなくてアンドーだよ。ユウマ――」

「アンドゥ？　ふふっ。面白い名前！」

「だ、だから！」悠真はイライラしてセラフィにつめよる。「アンドゥじゃなくて！」

「ひゃっ！　ご、ごめんなさい」

セラフィは驚いて半歩下がる。右拳をふりあげていることに気づいて、悠真は慌てて手を下ろした。

「アンドゥ？」

「だから、アンドゥじゃないって。ていうか、それじゃあ昔のボクサーみたいじゃないか」

「ボクサー？　って何？」

「もういい」

悠真は魔法陣の上にどかっと胡坐をかく。セラフィは胸に手をあてて、悠真に何て声をかければよいのかわからないようだった。

それは悠真も同じで、もともと女の子と会話したことがない悠真の頭では、次の話題なんてとても思いつかなかった。

――気まずい。

本当は色々な会話をして話をはずませたいのに、思考が言葉にならない。妖精（天使？）のアリエルが相手なら言葉なんて考えなくても出てくるのに、どうしてだろうか。

「あ、あの、アンドゥ」

「……何？」

「あたしと、お友達になってほしいの」

突然の言葉に悠真はセラフィの顔を見上げる。セラフィは意を決した表情で、じっと悠真の目を見つめている。

悠真はぼりぼりと頭を掻いた。

「えっと、あの……言葉の意味がよくわかんないんだけど」
「だめ、なの？」
「だめとか、そういう問題じゃなくて」

何と答えたらいいのかわからず、次にかけるべき言葉が喉につまってしまう。

――友達になってほしいって。

友達になるのにわざわざ宣言する必要があるのだろうか？　会話して、いっしょに遊べば友達なのではないのか。

学力は普通。運動神経はクラスの平均よりも悪い程度。これといってとり得のない悠真だが（わりと気にしている）、クラスでいじめを受けることはなく、友達づくりに苦労することはなかった。

だからなのか、セラフィの言葉の真意を悠真は読みとることができなかった。

気まずい沈黙が流れる部屋の外から、どたどたと乱暴な足音が聞こえてきた。

3

金の麗しい装飾の施された白い扉がばたんと押し開けられた。びくっと反応する悠真とセラフィの前に、白の神官服のようなものを着た男たちがあらわれた。

「な、何っ！？」

エプロンのような服の表面には、セフィロトの樹のような模様が描かれている。男たちは戸口の前にたむろし、腰に差している剣の柄に手をあてる。

「セラフィーナ様！　ご無事ですか！」

男たちを掻き分けて、細身の女が入室してきた。オレンジ色に近いブロンドの髪を後ろで束ね、やはり神官服のようなものを着ている。スカートは丈が長いが、両端から腰に向かってスリットが入っており、彼女の長い足がすらっと伸びていた。

神官服の女は、おろおろするセラフィの身体をつかんで後ろに引く。彼女の前に颯爽と身体をすべらせて悠真と対峙する。

「セラフィーナ様のお命をつけ狙う暗殺者め！　貴様の思い通りにはさせんぞ！」

「はあ？」

「夜陰に乗じて王宮に侵入するとは。貴様、どこの手の者だ！」

「どこの……？　意味わかんねーよ。何なんだよ、お前ら」

悠真の身体がひとりでにふるえる。

悠真はどうやら刺客だと思われているらしい。唐突すぎて状況の把握はできないが。すると、セラフィを囲む神官服の人間たちは王宮に仕える騎士なのか。

セラフィが神官服の女の肩をゆする。

「シャロ！　待って。違うの！　この人は――」
「セラフィーナ様、こちらにいては危険です。どうかお下がりください」
「だから、違うの！　シャロ」
「セオドラ」
「は」

シャロという女の声に野太い男の声が反応する。神官服の騎士たちの後ろから金髪を短くカットしたスポーツ狩りの男があらわれた。

「セラフィーナ様は少し錯乱しておられるようだ。悪い影響をお受けになられる前に、セラフィーナ様を安全なところへ」
「了解した」

セオドラと呼ばれた偉丈夫は、小柄なセラフィの両肩をがしっとつかむ。セラフィは困り果てた表情で「アンドゥ」と言葉をもらしたが、そのまま部屋の外へ連れていかれてしまった。

セラフィが退室するのを見届けて、シャロと呼ばれた女が悠真にふりかえった。

「待たせたな、暗殺者。貴様はわれわれといっしょに来てもらおう」
「来てもらおうって、何だよ。つーか、お前ら何もんなんだよ」

「何っ！？　貴様、私をからかっているのか」シャロは腰を落としてみがまえる。「王宮を守護するのは禁衛師団以外にあるまい」
「禁衛、師団……？」

悠真は生唾を呑みこむ。

初めて聞く言葉だった。名称から察すると近衛兵のような存在なのだろうが――この単語は悠真の頭にはない。

――ここは俺の妄想の中なんじゃないのか。

シャロはもみあげの長い髪をかきわける。

「われわれはエレオノーラ王国に仕える禁衛師団。そして私は師士のひとり、シャーロット・セレスティアという」
「シャーロット……？」
「名前を教えてもらって満足か？　暗殺者。すまないがわれわれも暇ではないのでな。このあたりで降参していただきたいのだが」

シャーロットと名乗った女は面倒くさそうに肩を落とす。戸口でたむろしていた男たちが一斉に動き出し、悠真を包囲しようと動き出した。

悠真は急いで部屋の後ろに下がった。

「ちょ、ちょっと、待ってくれ！」
「まだ何かあるのか。面倒な暗殺者だな」
「面倒……つーか、俺は暗殺者じゃねえ。勝手に決めつけんじゃねーよ」
「なら、どうして王宮に忍びこんだのだ。われわれの警備をかいく

ぐり、音も立てずにセラフィーナ様に近づくなど、暗殺者以外の何者でもあるまい」
「それは」
悠真は口を噤む。自分がここにいる経緯をどう説明づければいいのか。本に吸収されて、創造主という謎の存在に連れてこられたと言うのか。それともセラフィに召喚（？）されたと言えばよいのか。
――ええい。ままよ！
「俺は！　お、俺は、創造主とかいうやつに、召喚されて――」
「その髪」シャーロットは強い口調で悠真の言葉を遮る。「クライアントに命令されて染めたのか」
「は？　何でそうなるんだよ」
「暗殺家業に身を置く者は、夜に紛れるために髪を黒く染め、全身を黒い格好で覆い隠す。だが、黒は奈落――悪の象徴。普通の人間は髪を黒く染めたりはしない」
「んなこと言われても、この髪は自前なんだけど」
「ふざけるな！」シャーロットは左足をだん！　と踏みしめる。「イリスに黒髪の人間などいない。いるとすれば妖（あやかし）でしかありえない！」
「あや……？　何だよそれ。モンスターってことかよ」
「その目もそうだ。イリスで黒い瞳を持つ人間なんて絶対に存在しない！　……ええい、セラフィーナ様をたぶらかす妖め。貴様の化けの皮を剥いでくれよう！」
「はあ？　何だよそれ。ぜんっぜん意味わかんねーよ！　目が黒いからモンスターだって、そんなむちゃくちゃな理ろ――」
悠真の言葉を無視して、シャーロットは剣を抜き放つ。悠真の瞳に白刃が煌いた。

「お、おい。まじかよ」
「妖の中には人に化ける者もいるという。セラフィーナ様を守護するためならば、致し方あるまい」

しんと静まり返る部屋の外から、がしゃんがしゃんと金属のこすれる音が聞こえてくる。セラフィを連れていったスポーツ狩りの男セオドラが戸口にあらわれて、剣をかまえるシャーロットに叫んだ。

「待て！　シャーロット。セラフィーナ様のお部屋で剣を抜くな！」
「しかし！」シャーロットは狼狽してセオドラにふり返る。「この黒髪の男はセラフィーナ様をたぶらかす妖なのだ。早く討伐しなければ――」
「落ち着け！　シャーロット。どうしたんだ。お前らしくない」

セオドラは手の平を出して制止を呼びかける。シャーロットは悠真から目を離して「だが」とか「しかし」という言葉で声を荒げている。

シャーロットたち師士の注意が悠真から離れた。

――このままじっとしてても捕まるだけだ。なら……！

悠真は膝に力をこめて踵（かかと）で床を蹴り出す。

「あ、待て！」

悠真は後ろの窓に飛びこむ。がしゃんと大きな音を立てて、ガラスの破片が絨毯の上に飛び散った。

悠真は走った。

レンガでできたバルコニーを走り、宮廷の外壁を伝って外に降り、青々と茂る草むらをひた走る。

――ちくしょう。何も悪いことしてないのに、何で追われなきゃいけないんだ。

後ろをふり返りながら、悠真は拳をにぎりしめる。

相手の得物が長剣しかなかったのが幸いした。シャーロットらは血相を変えて悠真を追跡してくるが、矢で背中を射られることはない。

だが、

――ここは俺の妄想の中なんだろ？　なら、どうして俺は追われなければならないんだ！

妖とは何だ。髪が黒いと悪者と断定されるというルールは何なのだ。そんなものは見たことも聞いたこともない。

こんな理不尽なことを自分は望んでいたのだろうか。

――そんな……そんなはずはない。

息が切れて胸が苦しい。だが足を止めることはできない。シャー

ロットら禁衛師団の怒声がすぐ後ろから聞こえてくるからだ。

話し合えば解決できるだろうという言葉を、悠真は一気に呑みこむ。捕まったら終わりなのだと、悠真の直感が告げていた。

王宮の庭は予想よりも広大だった。学校のグラウンドくらいの広さはあるのだろうか。

漆黒の空に紅の月が浮かぶ。悠真は月明かりを頼りに王宮の庭を走る。目標はなく走っている方向が正しいのかもわからないが、悠真は一目散に走った。

――このまま逃げれば、きっと。

そこで悠真の足が止まった。

王宮の庭は突然に終焉(しゅうえん)を迎えた。平坦な地面は二歩先の場所からなくなり、漆黒の闇が向こうまで続いている。足もとを見下ろしてみると、そこはどうやら切り立った断崖(だんがい)のようだった。

「そこまでだ」

シャーロットの無機質な声が背中に突き刺さり、悠真はおそるおそるふり返る。断崖を背にする悠真を禁衛師団の人間たちが三方からとり囲んでいた。

身がまえる師士たちの中央からシャーロットがあらわれる。

「もう逃げ道はないぞ。妖。あきらめてわれわれに服するか。それとも――」

言いながらシャーロットは長剣を静かに抜き放つ。黄金の柄に赤い宝石があしらわれた、装飾品のような両刃の剣だった。

「ここで朽ち果てるか。お前の好きな方を選べ」

4

悠真を囲む禁衛師団の人間たちが、足を擦りながらじわりじわりと近づいてくる。腰に差した剣の柄に手をあてて慎重に距離を縮める姿は、まるで人質をとった犯人に近づく警察のようだった。

――どうする。

悠真は頭がまっ白になりながらも必死で考える。この絶望的な状況下でも、どこかに逃げ道はないのか。

後ずさりする悠真の踵（かかと）が地面の小石を蹴飛ばす。小石はころころと転がり、崖の下――奈落に落ちていく。それを見下ろして悠真は固唾を呑んだ。

「でやああアアア！」

悠真の隙を突いて左側の師士が斬りかかってきた。月明かりに煌く白刃を悠真は慌ててかわす。

「ちょ！　ちょっと、待ってくれ！」

悠真のかけ声が夜空にひびきわたる。師士たちは血相を変えて剣を上段にかまえ、悠真に襲いかかってくる。もはや交渉は意味を成さない。

ひとり目の剣をかわし、ふたり目の横薙ぎをしゃがんでよけて悠真は恐怖した。このまま逃げまわっていたら、間違いなく斬り殺される。

師士たちが突撃したことによって包囲が緩くなり、悠真はかろうじて包囲網を突破する。

「往生際の悪いやつめ。そこへ直れ……！」

悠真の後ろからシャーロットが長剣をかかげる。髪が天を突くほど憤激し、おそろしい速さで距離を縮めてくる。

「た、頼む！　から、待って――」走りながら後ろをふり向いた瞬間、悠真の足が地面をすべった。「うわあああ！」

仰向けに倒れる悠真にシャーロットが飛びかかる。悠真の腹の上に乗りかかり、黄金の宝剣がふり上げられる。

「妖め！　覚悟……！」

「やめ――」

妖しく煌く長剣が、ふり下ろされる――。

そう思われた。

長剣の切っ先は悠真の眉間の上でぴたりと制止した。

驚愕する悠真の前の景色がセピア色に変わる。悠真の腰の上に乗りマウントポジションの体勢をとるシャーロットが、剣先を下に向けたまま身体を制止させていた。

――また、時間が……止まった。

悠真ははっとわれに返る。この光景は、先ほど妖精のアリエルがあらわれたときとまったく同じ。ということは――。

「やあ」

後ろから聞こえてきたのは、男の声。声色は少し高め。変声期を終えてまだ間もない、悠真と同じ年頃の男の声だった。

アリエルではない別の人間の声であることに驚きを隠しつつ、悠真は首を曲げて後ろに視線を移した。

「お、お前は――！」

「はじめましてだね。君――いや、俺と言った方が正しいか」

後ろに立っていたのは、まぎれもなく悠真本人だった。目にかかる程度の前髪に、高校の制服である白のカッターシャツを着て黒のスラックスを穿いている。靴は側面に青い線が入った上履き――今の悠真とまったく同じ服装。

まるで鏡の向こうに映るもうひとりの自分。

もうひとりの悠真は右手を出して、にやりと笑った。

「危ないところだったね。時間を止めるのが少し遅かったら、君の命はばっさり斬り落とされるところだった」

「お前は、だれだ」

嫌な予感がする。

このタイミングであらわれるということは、また創造主という如

何わしい存在から託(ことづけ)を頼まれたのだろう。

もうひとりの悠真は、仰向けのまま見上げるオリジナルの悠真を見てあざ笑った。

「嫌だなあ。だから、俺は君だって、さっき言ったばっかじゃないか」

「……だから、それが意味わからねーって言ってんだよ」

「わからないかね」もうひとりの悠真は口もとをゆるめる。「君の深層心理に存在するもうひとつの人格さ。創造主に呼ばれてね、オリジナルの君を助けるために具現化したのさ」

「俺の深層心理……？　じゃあお前は、俺の心が生み出した精神体なのか？」

「まあ、そんなとこ」

もうひとりの悠真は「くく」と声を漏らした。

「人間の心は、君が思っている以上に複雑なんだよ。主人格である君は、人格がひとつしかないと思いがちだけど、実際は俺みたいな影(シャドー)がいて、主人格である君を支えているのさ。言葉通り影となってね」

「……悪いけど、俺は心理学とかあんまりくわしくないんだ。お前の目的は何なんだ」

「つれないね」

もうひとりの悠真はため息をついた。

「目的はさっき言ったけど、君を助けることだよ。何の力も有していない君では、イリスという世界を生き抜くことはできない。今の君はあまりに弱い」

「……ほっといてくれ」
「主はお嘆きだよ。こんなところで命を落とされたら、君をここに連れてきた意味がなくなってしまう。だから、君に力を授けたいのだそうだ」
「俺を、連れてきた意味……？」

もうひとりの悠真が、ぱちんと指を鳴らす。セピア色の景色が一変し、あたりは白い空間に変化する。

地平線のない、虚無の世界だった。白の画用紙を目の前で突きつけられているような、平坦でまっさらな世界。

「ちょっときついかもしれないよ」

もうひとりの悠真が雪白の床を見下ろす。四方から黒い壁があらわれ、悠真たちをとり囲む。

――これは、壁じゃない。

悠真は目を凝らして壁を見つめる。壁と思われた黒い物質は、細かい文字と記号が羅列しているものだった。記号は『A』などの日常的なアルファベットがあったが、『Φ』や『Ɵ』など、まったく見慣れないものもたくさんあった。

記号の壁が下から上に向かって津波にように昇りあがっていく。

「何だよこれ――」

記号の壁が悠真の網膜（もうまく）に焼きつく。映像が視覚を伝い、悠真の脳裏に侵入してくる。堤防を破る激流のように、怒涛の勢いとなって。

「うわあああアアア！」

記号の洪水が悠真を襲う。悠真の脳に大量の記号が入りこみ、内側から脳細胞を破壊する。幼少の記憶があった場所は強制的に消去され、見たことのない記号で上書きされる。数千、数万という記号が瞬時に、次々と記憶されていく。

激痛に苦しむ悠真を見下ろして、もうひとりの悠真が「くく」とあざ笑う。

「だいじょうぶ。洗礼はもうちょっとで終わるから。そうすれば、君はだれも寄せつけない最強の刻印師（こくいんし）になれるんだ。よかったね。主の力をいただけて」

他人ごとのようにもうひとりの悠真は言い放つ。棒読みで告げるその表情は、まるで感情がこもっていない。野良犬を平然と見捨てるような表情だった。

――頼むから、もう……やめてくれ。

次々と入りこむ記号の激流に呑まれながら、悠真は確信した。これは、自分が都合よく思い描いていた妄想ではないということを。

「覚悟……！」

紅い月が浮かぶ夜空にシャーロットの声がひびく。突然イリスの

世界に呼び戻されて、悠真は目を見開いた。シャーロットの持つ長剣の切っ先が、悠真の眉間を貫こうとしていた。

――コロサレル。

死の衝動が目前に迫り、悠真の心に異変が起こった。どくんと心臓が脈打ち、身体中を流れる血液が逆流する。

見開いた悠真の黒い瞳が真紅に染まる。まっすぐに突き降ろされる剣を悠真は首をひねってかわす。同時に身体を時計周りに大きく旋回させた。

「何っ！？」

思いがけない勢いにシャーロットが転がり落ちる。悠真は瞬時に起き上がりシャーロットと距離をとる。シャーロットは「ち」と舌打ちし、正眼のかまえをとった。

「ついに本性をあらわしたな。妖め。人に害をおよぼす前に私が成敗してくれる！」

シャーロットが長剣を引っさげて突撃する。間合いを詰めて剣を横薙ぎに払う。

悠真は上体をのけ反って剣をかわす。後ろに高く跳躍して宙をくるりとまわり、両手を地面について着地する。視界が縦にはげしくロールする。

――何が起こってるんだ。

シャーロットの攻撃をかわしながら、悠真は心中で叫ぶ。

身体が勝手に反応している、というのが正しい表現になるのだろうか。悠真の意志とは無関係に、身体が独りでに攻撃を回避しているのだ。

「小癪な……！」

悠真の驚異的な動きに度肝を抜きながらも、シャーロットは攻撃を続ける。左足を踏みこみ、後ろに引いた剣をまっすぐに突き出す。刃は夜空を斬り裂いた。

悠真は素早く後退し、右手の人差し指を前に出す。創造主の指輪が淡い光を放ち、指を動かすと宙に光の線を発生させる。弧と直線が複雑にからみ、光の刻印が描画（びょうが）される。

「それは、刻印術――」

光の刻印が消失する。空気中のソピアが悠真の前に集まり、突風のような衝撃を発生させる。衝撃波はシャーロットの左のわき腹にヒットし、彼女の身体を後ろに吹き飛ばす。

「シャーロットお！」

崖の方向から走ってきたセオドラが目を丸くする。シャーロットの、まるでトラックに追突されたようなはげしい飛ばされ方に恐怖を感じたのだろう。

悠真は真紅の瞳でセオドラを凝視する。人差し指を光らせて夜の闇に真紅の双眸（そうぼう）を光らせるその姿は、本当の妖のようだった。

セオドラの後ろから師士たちが駆けつける。

「セオドラ殿！　何を戸惑っておられるのですか」

「早くやつを捕縛しなければ、セラフィーナ様に害を成しますぞ！」

師士たちは長剣をかまえて悠真に襲いかかる。

――やめろオ！

悠真は心の中で悲鳴をあげる。身体は勝手に回避運動を始め、師士たちの剣を器用にかわす。続けて宙に刻印を描き、衝撃波で師士たちを吹き飛ばしていく。

師士たちが倒れていく様子を、悠真はただ見ていることしかできなかった。どうして身体が勝手に反応するのか。それを見て全身が高揚するのはなぜなのか。

――どうしてだ。どうして、こんなことが……。

悠真はがく然としながらセオドラの袈裟斬りをかわす。そう身体が反応する。ひとりでに。悠真の意思とは無関係に。

セオドラを倒し、最後の師士を刻印の力で吹き飛ばし――悠真を包囲する人間は、だれもいなくなった。

5

創造主の指輪が輝きを失う。火照った身体は徐々に熱を失い、高揚する気分が落ち着きをとり戻していく。

悠真は肘を曲げ、右手を顔に向ける。白い手の平はじわりと汗ばんでいる。

「今のは、何だったんだ」

腕がひとりでにふるえる。あの力のせいではない。恐怖で、悠真の意思に共鳴してふるえているのだ。

シャーロットに剣を向けられ、死を確信したときだった。限界まで引き伸ばされたゴムが弾かれたように身体が動き、禁衛師団の攻撃を全てかわした。

創造主の指輪が輝き、悠真の身体は宙に光の刻印を描いた。刻印が消失した瞬間に衝撃波が生まれ、シャーロットたちを次々と吹き飛ばしていった。

――これが、あいつの言う力ってやつなのか。

悠真の脳裏に浮かんだのは、楕円形の鏡面に映る自分自身の姿。もうひとりの悠真は、創造主が力を授けたいと言い、記号の壁を出現させた。記号の津波が押し寄せてくる光景は、今考えただけでも怖気が走ってしまう。

足もとから「うう」と悲鳴が聞こえて、悠真はわれに返った。ま

わりに転がっているのは、力によって蹂躙(じゅうりん)された者たち。シャーロットら師士たちはうつ伏せに倒れ、また苦痛でうずくまり呻き声をあげている。

その数――十二人。喧嘩(けんか)をろくにしたことのない悠真が倒せる数ではない。

「あ、あ……そんな」

全身にぞっと鳥肌が立つ。王宮を守護する人間たちということは、彼らは国の選りすぐりの精鋭たちなのだろう。それを自分ひとりで倒してしまうなんて。

ありえない。絶対にありえない。

もしかしたら自分は、とんでもない闇の扉を開いてしまったのではないか。

「俺は、知らない」悠真は踵(かかと)を擦って後ろに下がる。膝ががくがくとふるえる。「こんなことをしたのは、俺じゃない」

悠真はあわてて草むらを駆け出す。後ろをふり返ることはできなかった。

悠真は王宮を離れ、崖沿いの草むらを歩いた。崖を離れてもよかったが、明かりのない草むらを無闇に歩いたら迷子になるのではないかと思った。

「ここまで来ればもう平気か」

軽自動車ほどの大きさの岩があたりに見え始めたころ、悠真は後ろをふり返った。視界に広がるのは人気(ひとけ)のない草むらと、星がきらめく夜空しかない。王宮と禁衛師士たちの姿は見えなかった。

「疲れた。もうだめ。少し休憩」

膝の力が抜けて、悠真は岩のとなりでへたりこむ。シャーロットたちから逃げたい一心で走り続けたため、足はすでに限界を超えていた。

後ろの岩に背中をあずけて悠真は考える。シャーロットたち禁衛師士を見事に撃退してしまったが、彼らはだいじょうぶだろうか。怪我(けが)はしなかっただろうか。

「何考えてるんだ。もとはと言えば、あいつらが俺のことを暗殺者だとか騒ぎ立てたから悪いんじゃないか。俺は自分の身を守るために正当防衛しただけだ。俺は、何も悪くない」

言いながら首をぶんぶんと横にふる。強くふったため、頭が少しぼうっとした。

悠真は膝を抱えて夜空を見上げた。星が鏤められた空には、血のように紅い色をした月が浮かんでいる。

この月の色を、どう説明づければよいのだろうか。念のために悠真は頬をつねってみたが、普段通りに痛みは感じられる。

今はじき出される最良の答えは、

――俺は、別の世界に連れてこられた、のか。

悠真はまた首を横にふる。そんな、ライトノベルのようなことが、ＲＰＧのようなことが起き得るのか。そんな、妄想じみたことが、本当に……。

しかし、今まで起きたできごとがただの妄想だとは、とても思えない。

妖精のアリエルがあらわれて、暗殺者と断定されて王宮を追われ、もうひとりの自分から力を授かった。どれもとても日常的だとは言えないが、自分の身体が妄想ではないと訴えている。

「あー、くそっ！　やっぱ意味わからねーよ」

悠真は両手で黒髪をぐしゃぐしゃに掻き乱す。目の前に広がる事実を現実と認めてもいいのか。悠真にはわからない。

これから、どうすればよいのだろうか。

右も左もわからない世界に放り出されて、どこに向かって行けばよいのだろうか。宿は？　水は？　食事は？　ＲＰＧの場合、宿は街に行けば必ず一軒はあり、最初の街ならば１０Ｇくらい払えば一泊できるはずだが。

――ていうか、１０Ｇってそもそもどこの通貨だよ。

悠真は尻のポケットに手を突っこみ、黒の長財布をとり出す。札

を入れるポケットには、千円札が四枚入っている。昨日の夜にゲームをクリアしてしまったから、学校帰りに中古のゲームでも漁ろうかと思っていたのだ。

悠真は千円札を一枚とり出し、紙面に描かれた野口英世（のぐちひでよ）を見つめる。日本銀行券は、１０Ｇほどの価値があるのだろうか。

「ラノベで異世界にトリップする話の場合だと、あちら側の通貨って大抵つかえないんだよな。ここも、やっぱり……同じなのか」

悠真はげんなりしてため息を洩らす。今後のことを考えると、心配ごとしか頭に浮かばなかった。

千円札と財布をポケットにしまい、悠真は夜空の月を見上げる。この世界で初めて出会った少女、セラフィの笑顔が星空に映し出される。

変わった髪の色をした少女だった。髪の根元と中間はラベンダーの色で、毛先は濃い紫色なのだ。毛先だけわざわざ染色しているのだろうか。

あんな可愛い女の子と会話なんてしたことがないから、今想像しただけでも心臓がばくばくと脈打ってくる。また会話できる日がくるだろうか。

「――て、何考えてるんだ、俺は。好き、とか、そんなんじゃねえぞ」

顔が火照っていることに気づいて、悠真はあわてて否定する。こんな姿をだれかに見られたら、恥ずかしくてたまったものではない。

しかし、と悠真は思う。セラフィと初めて出会って、ろくに会話もできなかったのに、彼女の笑顔が脳裏に焼きついて離れない。「アンドゥ」と呼んでいた彼女と、もう一度話がしたい。

「あの子、禁衛師団に守られてたってことは、やっぱ王女か何かなのか――」

言いながら、悠真ははっとする。異世界に転送されて、初めて出会った女の子が国の王女――何ともありきたりで自分都合の設定なのだろうか。

「この世界はやっぱ、俺がつくりだした妄想の世界……？」

悠真の額から一筋の汗が流れ落ちる。二次元の女の子と会話がしたいという。正気なのか？　安藤悠真。

「あー！」悠真は堪えきれずに足をじたばたさせる「ほんっとに意味がわからねー！」

もうだめだ。判断材料がなければ、いくら考えても憶測の域を出ない。現実と妄想を行ったり来たりして、だんだんとわけがわからなくなってくる。

――でも、可愛かったな。

草むらの上に寝っ転がりながら悠真は思う。妄想の存在かもしれないけれども、やはりもう一度話がしたい。

悠真の脳裏にまたセラフィの姿が映し出される。珍しいラベンダ

ー色の髪を肩にかけて、微笑みながら首を少しかしげている。

――妄想じゃない方が、いいのかな。

悠真は頬を赤らめる。草の葉先が鼻の頭にあたり、少しくすぐったかった。

6

ちゅんちゅんと鳥の囀(さえず)る声が聞こえて、悠真は目を覚ました。

「あ……朝、か」

天上から眩しい日の光が差しこむ。悠真は右手を両目の前にかざした。

ぼうっとする頭を抑えて悠真は身体を起こす。草むらの上にいることに違和感を覚えたが、悠真はすぐに今の状況を理解した。

――そうだ。俺は異世界に連れてこられたんだ。

あたりは雑草が生え、大きい岩がごろごろと転がっている。崖から吹くそよ風が、茎から生える葉をゆらしている。一帯に建物は見えない。

頭上には、ひつじのような形をした雲がぷかぷかと浮いている。右から左へと、風の流れに従って上空をゆっくりと漂っている。太陽が燦々と照りつける晴天だった。

「ふわあ。今日もいい天気ですこと」

悠真は立ち上がり、その場でぐっと背伸びをする。崖下(がいか)の海でも見ようと、岩の後ろにある断崖のそばに歩み寄った。

「さて、これからどうすっかな――」

そっと断崖を見下ろして、悠真の言葉が止まった。

悠真の視界に映ったのは、雲だった。白い、綿飴(わたあめ)のような形状の物質。上昇気流によって空気中の水蒸気が集められてつくられる水滴の集合体が、崖下を覆い隠している。

――ど、どういうことだ。

悠真はわけがわからなくなり、また上空を仰いだ。青い空には、太陽といっしょに雲たちがぷかぷかと浮いている。あちらの世界と同じ、よく晴れた日の青空だった。

悠真は生唾を呑みこみながら、あらためて崖下を見下ろした。切り立った断崖の下に広がっているのは海ではなく――雲。崖の下一面を覆い隠している白い海は、風のゆるやかな流れに従って、右から左へと流れていた。

「な、な、んだ、これ」悠真の足ががくがくとふるえる。「どうなってるんだよ、これ」

悠真は切り立った崖のそばにへたりこむ。

まるで飛行機の窓から空を見下ろしているようだった。または富士山の山頂から見れる光景。富士山なんて一度も登ったことはないが。

ここは、間違いなく悠真の知る世界ではない。

――やっぱり俺は、連れてこられたんだ。日本とは違う、別の世界に。

地球上の別の国だとは、考えられなかった。そんなことはもう、どうでもよかった。

――俺はこれからどうすればいい。

悠真は呆然と雲海を見下ろす。

異世界に行くことは何度も憧れたが、行った後のことなど考えたことはない。妄想の世界では、金のことや地理のことなど、面倒なことはいちいち考える必要はないのだ。

「人だ。とりあえず人を探そう。この国には宮殿があって、セラフィやシャーロットがいたんだ。きっと近くに街があるはずだ」

強く自分に言い聞かし、悠真は膝に力をこめて立ち上がる。崖下から吹きつける風が悠真の顔をなでた。

崖を離れて草むらをしばらく歩くと、瀬戸大橋（せとおおはし）のような大きな橋が見えてきた。屈強な鉄筋と白い石でつくられていて、横幅は十メートルくらいあるのだろうか。自動車が二台並んで走れるくらいの幅があった。

橋をわたりながら、悠真は手すりから下を見下ろす。橋の下には雲海が広がっている。

雲海から宮殿のあった岸に視線を移してみる。崖の下はどうなっ

ているのかと思っていたが、雲海に接地せずに終端を迎えていた。どうやら陸地は宙に浮いているようだった。

――これが、浮遊大陸ってやつなのか。

驚きはなかった。この世界を異世界だと受け入れてしまったのだから、陸が宙に浮いていたって別段おかしいことではない。

――しかし、念願の異世界にこれたはずなのに、どうしてこんなにテンション低いんだ、俺。

興味をなくした悠真は、止めた歩を再開させた。

橋をわたりゆるやかな坂を下っていくと、無骨な石を積み上げてつくられた壁が左右にあらわれた。壁の上部には苔(こけ)が生えている。

コンクリートで舗装された坂道の向こうには、白い石でつくられた家が軒を連ねていた。

「ほんとにあった。……ていうか、ずいぶんとまた、中世ヨーロッパっぽい感じだなあ」

予想よりも早く街に着いたことに安心しつつ、悠真は右の壁に手の平をつけて街を見つめる。

オンラインゲームの中にでもいるような光景だった。建物の高さは二、三階と低く、電柱がない。日本と比べてずいぶんと原始的な街並みだが、馴染みのある風景のように思えた。

壁に挟まれた坂を下っていくと、赤い髪の女性がこちらに向かっ

て歩いてきた。青の縦縞(たてじま)模様のシャツを着て、紺色の無地のスカートを穿いている三十代くらいの女性。髪は、燃えるような赤だった。

――すごい髪の色だな。

すれ違い様に悠真は女性の髪を注視する。赤い髪の女性なんてRPGでは珍しくないが、生身の女性として目のあたりにするとかなり異質だった。何しろ、どこぞのミュージシャンが染めているようなまっ赤な頭なのだ。

赤い髪の女性も悠真の頭を見上げて、目を大きく見開いていた。

坂をずんずん下っていくと、人がごった返す商店街にたどりついた。タンクトップからごつごつとした肩を出す男に、母親に手を引かれている幼女。杖をついている老人に、白とオレンジ色の毛並みの野良猫。

髪の色は赤や青とカラフルだが、向こうの世界のヨーロッパ人のような人たち――が、悠真の頭を見て度肝を抜かしている。

――やけにじろじろ見られるな。

嫌な予感がしながらも、悠真は商店街をぶらつく。スラックスのポケットに手を突っこみ、平静を装いながら歩いていたが、通り過ぎる人たちが慌てて道を開けるため、不安を感じずにはいられなかった。

「あ！　ママ見て。あのお兄ちゃんの頭」

「だ、だめよ！　見ちゃ」

こちらを指差す少女の左手を母親が引いていく。

『黒は奈落――悪の象徴。イリスに黒髪の人間などいない』

悠真ははっとした。

――やべえ！　あの男女（シャーロットのこと）の言ってたことは本当だったんだ。帽子か何かで頭隠さねえと、また怪しまれちまう……！

悠真は両手で頭を隠しながら、商店街を小走りで駆け抜ける。走りながら首をきょろきょろと動かして洋服屋を探す。

――どこでもいいから、とりあえず洋服売ってる店は……。

怪しむ人たちをかき分けて、悠真は一角にある古着屋に駆けこんだ。ハンガーにかけられたシャツの陰に隠れて、外の様子をうかがう。だれかが追ってくる気配はない。

「ふう」悠真は右腕で額の汗を拭った。「あぶねえあぶねえ。また追われるところだった」

悠真は息を整えて、ぐっと背を伸ばす。首を動かして改めて店内を見まわした。ハンガーラックに無地やチェック柄のシャツがずらりとかけられている。ハンガーラックは木製のようだが、あちらの古着屋と大した違いは見受けられない。

「えっと、帽子はっと」

シャツとパンツがかけられているハンガーラックの間を通り、店の奥へと足を運ぶ。部屋の角にカウンターがあり、帽子はそのとな

りのテーブルに置かれていた。

「おや、いらっしゃ――」

服の陰から店主があらわれたが、悠真を見て唖然と言葉を止めた。悠真は慌ててふり返り、前に出した両手をぶんぶんとふった。

「ち！　違うんだ。俺、は、あ、怪しいもんじゃない！」

お化けに初めて出くわしたような表情で店主は身体をかたまらせる。髪の色は白髪を混じらせた青だが、頭頂部がかなりうすくなっている。首からエプロンをかけて、腰に帯をしっかりと締めていた。

「君は――」

「こ、この髪は、その、じ、自前で、あの」

「わ、わかった。わかったから、ちょっと落ち着いて」

髪のうすい店主もあたふたする。悠真はわれに返り、申しわけなさそうにうつむいた。

「すいません」

「いや、いいんだけど。……それにしても、変わった髪の色だねえ」

「やっぱり珍しいんですか。この髪の色は」

「うーん」店主は腕を組んで唸った。「髪の色は人によって違うけど、黒い髪の人は見たことないねえ」

シャーロットが言っていたことは本当だったらしい。悠真は顎に手をあてて、シャーロットの言葉を頭の片隅から引っ張り出す。

「黒い髪を生やすのは妖しかありえないと、聞いたことがあるんで

すが」
「妖？　うーん。そうなのかな。まあ、妖なら黒髪を生やすものもいるかもしれないけど。どうなんだろうねえ」
「なあおじさん」悠真は言葉を続けようか迷った。「妖ってその、何なんすか？」
店主は目を丸くした。「えっ？　妖は妖だよ。奈落から這い出て人間を襲う……ほら。獣みたいな外見の」
――奈落から這い出て、人間を襲う？
身体を硬直させる悠真を見て、店主は「あれ？」と変な声を出した。
「妖、知らないの？　この前、街のはずれに幻妖（げんよう）が出没して騒ぎになってたじゃないか。それに、ほら。神話にもよく出てくるし」
「神話？」
「あれ？　何か、話かみ合ってない……？」
店主は悠真を見下ろしたまま、次の言葉をつまらせる。悠真も言葉を続けようとしたが、店主の話が理解できないため、何を言えばいいのかわからない。
しんと静まり返る店の奥から、慌てふためく女性の声がひびいた。

7

「ちょっと、あんた！　来ておくれよ」

カウンターと帽子が置かれたテーブルの間から伸びる廊下の向こうから、店主の奥さんらしき女性の声が聞こえてきた。

「やれやれ、また火がつかないのか」店主はのそのそと向こうへ歩いていったが、途中で悠真にふり返った。「すまないね。ちょっとそこで待っててくれ」

「何かあったんすか？」

「うん、ちょっとね。最近コンロの調子が悪いんだよ」

「コンロ……？　火がつかないって、壊れたんすか？」

「多分ね」店主は廊下の奥を指差した。「だから、ちょっと向こうに行ってるから、悪いけどそこで待っててね」

店主は丸まった背中を向けて廊下の奥へと消えていく。その様子を悠真は腕組みしながら見送る。

「ふーん。この世界にもコンロなんてあるんだなあ」

悠真はあちらの世界のコンロをぼんやりと想像する。こちらの世界にもガスや電気はあるのだろうか。

――にしても、妖（あやかし）っていうのは何なんだ？

妖は、奈落から這い出て人間を襲う、獣のような存在らしい。すると、外見は虎や狼のようなイメージなのだろうか。

それと『奈落』というのは何を指しているのだろうか。言葉から察すると谷底や地底をあらわすのだろうが、妖はモグラのように地中からひょっこりとあらわれる生き物なのだろうか。

「まあ、きっとモンスターみたいなやつのことを差すんだよな。うん。……てことはつまり、あの禁衛師団の男女(おとこおんな)は、俺を化け物扱いしたってことか。髪が黒いから」

髪が黒い、つまり異質の存在だからモンスター扱いされたのか。何だそれ、と悠真は思った。シャーロットがヒステリックに騒いでいた理由がやっとわかったが、今度は腹の底から苛立ちがこみ上げてきた。

モンスターだと勝手に誤解された上に殺されかけたのだ。たまったものではない。

「まあ、身体が勝手に動いて（おそらくもうひとりの悠真の仕業）何とかなったから、結果オーライだったけど。……にしても、師士？　騎士？　の人たちは平気だったのかなあ」

シャーロットたちを全滅させてしまった光景が脳裏によみがえり、悠真はぎくりとした。罪悪感が心に残り、嫌な気分になってしまう。

悠真は頭をぶんぶんと横にふった。「あれは正当防衛だったんだから、仕方なかったんだ。俺が悪いわけじゃない」

悠真は後ろの壁に背をあずける。シャーロットたちと宮殿の様子とともにセラフィの笑顔が映し出される。彼女は胸に手をあてて、宝石のような大きな瞳で悠真を見上げている。

少ししか会話してないのにな、と悠真は思う。いっしょにいた時間なんてほんの数分だったのに、どうしてこんなに印象に残っているのだろうか。

――まあ、俺はお尋ね者になっちまったから、あの子に会えることはもうないんだろうけどな。

悠真はふっと息を吐き、右手で頭をぽりぽりと掻いた。

「にしても、店長遅いな。まだコンロ直らないのかなあ」

悠真はきょろきょろと店内を見回す。閑散とした店内に客の姿はない。悠真はどうしようか戸惑ったが、忍び足で店の奥に歩み寄ってみた。

木製の扉をそっと開けて中をのぞくとリビングにつながっていた。円形のキッチンテーブルと椅子が置かれた部屋の向こうにダイニングルームらしき部屋があり、店主と奥さんが何やらやりとりをしていた。

「コンロ直りました？」

扉を開けながら悠真が顔をのぞかせると、店主と奥さんが同時にふり向いた。店主がこちらを向いて申しわけなさそうにした。

「ああ、ごめんね。すっかり待たせてしまって。もう少しで終わるから、そこで座って待っててくれるかい？」

悠真は言葉通りにリビングの椅子に腰かけると、奥さんがこちらに来て声をあげた。

「おや！　あんた、すごい髪の色してるねえ」
「あ、はい。すいません」
「別に謝んなくてもいいんだよ。それにしても、黒い髪って、まるで妖みたいだねえ」

悠真の胸に一本の矢が突き刺さる。店主は「こらっ！」と奥さんを叱りつけた。

店主の奥さんは百五十センチくらいの小柄な人で、髪は店主と同じく青い色をしていた。ストレートの細い髪を後ろで束ね、格好はシャツとパンツというラフなスタイルである。にこにことしていて人がよさそうな感じだった。

――この二人だったら、俺を王宮に突き出したりしないな。

悠真はほっと安心し、ダイニングの様子をうかがう。

ダイニングの床は白いタイルで覆われていた。現在の日本の家屋ではあまり見られない土間の壁際に、コンロと思わしきものがとりつけられている。赤茶色のレンガを積み上げてつくられた、石炭コンロのような古めかしいものだった。となりには竈（かまど）と思わしきものが設置されている。

――こっちの世界のコンロは、ガスコンロじゃないんだなあ。

コンロの前で四苦八苦する店主をぼんやりとながめながら、悠真は口を開けて欠伸（あ）する。昔ながらのコンロや土間を見ていると、安堵感（あんどかん）からか、つい眠くなってしまう。

店主は細い棒でコンロの上をつつきながら、「どうして火がつかないんだ」と声をもらしている。奥さんも店主のとなりで「やっぱり刻印師さんを呼ばないとだめかねえ」とぼやいていた。

悠真は待ち焦がれて店主の後ろに歩み寄った。

「直らなそうですか？」

「うーん。だめだね。困ったなあ。国の刻印師に修理頼むと、修理費が高いんだよな」

店主のぼやきを軽く聞き流し、悠真は脇からそっとコンロをのぞきこむ――そこでまたわが目を疑った。

日本のキッチンのような大きさのコンロの上に、肌色の石板が設置されている。石板の表面は砂がまぶしてあるのか、ざらざらとしている。その表面に、魔法陣のような印が描かれていた。

魔法陣の円のまわりには細かい記号が書き連ねている。円の中央には正三角形が描かれ、さらにその中心に正円が描かれている。三角形と円の中には細かい線がびっしりと描かれていた。

――こ、これが、コンロ？

悠真の頭を、ＲＰＧの世界に迷いこんだような錯覚がふたたび襲う。ガスでも薪でも石炭でもない、魔法陣式のコンロ。ＲＰＧの世界でしかありえないような設備が、悠真の目の前に堂々と設置されている。

コンロのわきには五徳（ごとく）と思わしき金具が置かれており、多少の生活感は感じられるが――あまりのありえなさに、悠真は呆れ果てて

しまった。

店主は細い棒の先端で魔法陣の模様を描いたり消したりしている。「ここかな？」とか「この線が間違っているのか？」とつぶやきながら、コンロの修理をしているようだった。

悠真は、店主が持つ細い棒を凝視する。棒は一本の菜箸（さいばし）のような細いもので、先端に銀色の金属がつけられている。見方によっては、指揮者が持つ指揮棒のようにも見えなくない。

――これは、どういう仕組みで火をつけてるんだ？

悠真は店主の後ろで首をひねった。

「おじさん。このコンロって、どうやって火を起こすの？」

「えっ？　ちょっと、今忙しいんだけどな。……よく知らないけど、表面に火の刻印を正しく描いて、空気中のソピアを反応させて火を起こしてるんじゃなかったかな」

「火の刻印を描いて、空気中の、ソ、ソピ……？」

「ソピアだよ。そのくらいはさすがに知ってるでしょ。刻印術を発動させる、空気中の微粒子じゃないか」

コンロが直らずに苛立っているのか、温和な店主が早口でまくし立てる。悠真の頭に浮かんでいた疑問符が三個増えたが、石板の表面に描かれた火の刻印にどこか見覚えがあった。

――火の刻印、か。魔法陣じゃなくて、刻印なのか。

頭に浮かんでいた疑問符が、シャボン玉のように弾けて消える。思考が急に回転を始め、脳の奥から記憶の断片を引っ張り出す。

脳裏に浮かんだのは、シャーロットたち禁衛師団を蹴散らした夜の光景だった。あのとき悠真の身体はひとりでに動き、右手の人差し指で光り輝く刻印を描画していた。

創造主から授かったという、新しい力。刻印術。

シャーロットたちを倒す前、悠真は刻印の洗礼を受けた。悠真の精神体であるという、もうひとりの悠真の手によって受けさせられた、記号の洪水が押し寄せる洗礼。あのときに刷りこまれた膨大な量の刻印が思考の奥から引っ張り出されて、たくさんの映像となって頭の中を過ぎっていく。

――コンロのこの刻印、見たことある。

頭の中に浮かんだ刻印のひとつが、石板の上に描かれた火の刻印と酷似している。悠真はふたつの刻印をならべて、差異――コンロの故障している部分を探す。刻印の左上、中央やや下、右上の円の外の記号、差異は印のあちこちに見つかった。

「おじさん、この棒ちょっと貸して」

「あっ！　ちょっと！」

声を立てる店主にかまわず悠真は棒をひったくる。先端の銀色の部分で、差異が出た箇所をかまわず描きなおしてみる。

「ここの左上の線と、下の円を描きなおせば――」

最後の線を描きなおした瞬間、コンロの中央から突然ぼっと音を立てて火がついた。

「あれれ？」
「もしかして、直った、の？」
悠真の後ろで店主と奥さんが目をしばたいている。二人はコンロの炎をしばらくながめていたが、はっとわれに返って悠真の肩をつかんだ。
「き、君！」
「あんた！　もしかして、王宮の刻印師様だったのかい！？」
店主と奥さんは血相を変えて悠真に詰め寄る。目をぎょろりと開けて、予想外の事故が起きた後のような、すごく驚いた表情をしていた。
悠真はコンロに背を向けた状態で、左手で頭の後ろを掻いた。
「あ、え、えっと、ですね。……これ、どうやって説明したらいいんだろ」

7（後書き）

刻印術について

刻印術は、大気中に含まれる「ソピア」を操作して発動させる術になります。

イリスの世界では、ソピア（Ｓｏｐｈｉａ）という無味無色の微粒子が空気中をただよっています。ソピアは特定の印（刻印）に近づくと反応を起こすという性質をもっているため、刻印術はその性質を利用した術になります。

火の刻印はソピアを摩擦させる効果があるため、刻印を描く→発火という流れになります。

刻印術の発動まで

?刻印を描く。

刻印はスレート（ｓｌａｔｅ）と呼ばれる石板に描くことが推奨されていますが、紙や土に描いても問題ありません。

ペンはロッド（ｒｏｄ）と呼ばれる黒い棒を使用します。ロッドには空気中のソピアを引き寄せる効果があります。

?ソピアが刻印に反応し、科学反応を起こす

効果は描かれた刻印によります。水を出したり風を起こしたりすることもできます。

※刻印術については二章四話でも言及されます。

悠真の場合

悠真は創造主の指輪をつかって空気中に刻印を描いていますが、彼の場合は例外です。スレートとロッドをつかって発動させる（アレックスがやっているやり方）のが本来のやり方になります。

刻印師について

刻印術はイリスの生活基盤になっているため、家庭のさまざまな場所でつかわれています。それらの修理や開発を行うのが刻印師になります。また王宮でもつかわれているため、王宮専属の刻印師も存在します。

さらに刻印術は戦争でもつかわれるため、バトル専門の刻印師も存在します。

8

コンロの火を消すと、悠真はリビングに案内された。キッチンテーブルから椅子を引いて腰かけると、店主と奥さんが向かいの椅子に座り、目をきらきらと輝かせた。

「いやあ。あんたすごいねえ！」と奥さん。

「ほんとだよ。あのコンロを直すのにいつも一時間以上かかるんだから、ほんと助かったよ」と店主――もとい旦那さんが言葉を続ける。奥さんが「この前なんか店ほったらかしてコンロ修理してたもんねえ」と調子を合わせると、旦那さんは声を出して笑った。

――のんきな人たちだなあ。

悠真が二人に合わせて苦笑いするのを見て、奥さんが「お茶でもいれるね」と言って席を立った。

旦那さんはテーブルに両手をついて、深々と頭を下げた。

「今日は本当に助かった。……っと、乱暴な言葉遣いで失礼しました。あなたはお国の刻印師様であらせられたのですか」

「いえ、違います」悠真は慌ててかぶりをふった。少し返答に窮して「えっと、旅のものです」と言った。

旦那さんは眼鏡の縁を指で押し上げた。

「旅行者だったのか。どうりで変わった格好をしてるわけだ」

「あ、はい。すいません」

「いや、いいんだけど。そういえば自己紹介がまだだったね。私の

名はアレックス。ここグラスデンで妻のグレイシアと古着屋を経営しているんだ。君の名は？」
「えっと、俺は安ど――」言いかけて悠真は慌てて言葉を止めた。
「ユウマです。ユウマ・アンドウ」
「ユウマ・アンドウ？　変わった名前だねえ。ユウマはどこの国から来たんだい？」

旦那さんのアレックスは別段疑うことなく悠真を見つめる。そのまっすぐな視線が悠真の胸のどまんなかに突き刺さる。

――ここは何て答えればいいんだ。

異世界から召喚されました、と正直に話すのか。そんなことをしゃべったら、また妖だの何だのと騒がれたりしないだろうか。

しかし、他国からの旅行者を装ったとしても、エレオノーラ以外の国など、悠真は知らない。そもそもこの世界のことは何もわからないのだ。

悠真はごくりと固唾を呑み、対面に座るアレックスを見つめた。アレックスはこちらの返答を待ちながら、首を少しかしげている。

――だめだ！　この人をだますことはできない。

「あのっ！　す、すいません！」悠真は叫びながら平手をついて頭を下げた。アレックスは驚いて後ずさりした。「えっ！？　ど、どうしたの？」
「実は、あの……お、俺。別の世界から召喚されてきたんです」
「別の世界から、しょ、召喚？」
「はい。その、何て説明すればいいかわかんないんですけど。……

何かの手違いで、突然、こちらの世界に来てしまったんです」

悠真は両手をにぎりしめて、おそるおそる頭を上げる。アレックスはぽかんと口を開けたまま茫然としている。「えっと、てことは、つまり」と声にならない何かをつぶやいていた。

土間から奥さんのグレイシアがゆっくりと歩いてきて、悠真の前に湯呑みを置いた。

「別の世界って、別の国の間違いじゃないのかい？　ほら、帝国とか。となりの国から来たとかさ」

「いえ、違うんです。俺は、このエレオノーラとは別の世界の、日本という国からワープして来てしまったんです」

「ニホン？」

「……知らないですよね、そんな国」

悠真は右手で湯呑みを触ってみる。入れたてのお茶は予想以上に熱く、「あつっ！」と声を出してしまった。

グレイシアはアレックスの前にも湯呑みを置いて、彼のとなりに腰を降ろす。アレックスと顔を見合わせて、困惑の色を深めた。

アレックスが突然「あっ！」と声をあげた。

「そうか。だから君は、妖のことを知らなかったんだね」

「はい。あちらの世界に妖は存在しないので」

「そうだったのか。なるほど」

「それで、あの、話を戻してしまうんですけど、妖っていうのは何なのですか」

悠真がそう問うと、アレックスは腕を組んで「うーん」とうなった。

「妖を説明するのは難しいな。見た目は動物と大差ないしなあ」

「さっきは、奈落から這い出て人間を襲う獣のような存在だと言ってましたけど、もしかしてモグラみたいな生き物なんですか？」

「モグラ……？　うーん、多分違うと思うなあ。妖は犬や鳥みたいなものもいるし、人間とほぼ同じ見た目のやつまでいるからね」

「じゃあ、奈落というのは土の中ではないんですか？」

「土の中……？」アレックスは声を出して笑い、右手でテーブルの下を指差した。「君は本当に何も知らないんだねえ。奈落はこの国の下にある暗黒の世界のことだよ」

「この国の下にある……？」

「ええと、もっとちゃんと説明した方がいいか。われわれが住むこのイリスという世界は、空に浮くたくさんの大陸で構成された世界なんだけど、大陸の下――正確にいうと大陸の下を覆うぶ厚い雲海の下は、底のない永遠の闇になっているそうなんだ。それをわれわれは『奈落』と呼んでいるんだよ」

「そうですか。底がないから、奈落なのか」

悠真はテーブルの上で拳をにぎりしめる。このイリスという世界は、現代日本と言語や文化水準が異なるだけなのだと思っていたけれども、世界そのものが大きく異なっているようだ。

アレックスが「それでね」と言葉を続ける。

「妖に話を戻すけど、妖というのは奈落に棲息する存在で、『核』という心臓を持つ生命体のことなんだ」

「奈落に棲息する……？　でもおじさん、奈落は底のない闇だってさっき言ってたよね。底がないのに、どうやって棲息できるんすか

？」
「うーん。その辺はよくわかってないんだよね。実は奈落に底があって、そこに妖が棲んでいるんじゃないかと言われているんだけど。……奈落に落ちてから無事に還ってきた人はひとりもいないから、奈落がどうなっているかはだれもわからないんだ」
「ふーん。でも、それってだれかが降りて調べれば、すぐにわかるんじゃないんですか？」
「それは無理だよ」

アレックスは決然とした表情で言い切った。

「……ここエレオノーラではね、重罪を犯した罪人には落刑（らくけい）が執行されるんだ。落刑、わかるかい？　人間が奈落に降りるというのはね、そういうことなんだよ」

アレックスのとなりにいるグレイシアも、不安げな表情を浮かべている。どうやら、奈落に降りるという考えはかなり異端のようだった。

悠真は気をとりなおして、湯呑みの端を持ってお茶を飲む。あちらのお茶と味は似ているが、少し渋みが強い気がした。

「妖の生態はよくわからないけど、何かの弾みで大陸に這い上がってきて、人間たちに悪さをするということなんですね」
「そうだね。妖――正確には幻妖（げんよう）というんだけど、妖が出没するとなかなか厄介でね。多大な力を持つ存在だから、出ると騒ぎになるんだよ」
「この前も街に出没したって、さっき言ってましたね」
「ああ、そうそう。そのときも大変だったんだよ」アレックスは両手をがばっと広げて子供のような顔をした。「この前出たやつなん

てさ、二階建ての家くらいあるでっかいやつでさ。火は吹くわ、木はなぎ倒すわで大変だったんだから」

グレイシアが「あのときは大変だったねえ」と相づちを打つと、アレックスは口を大きく開けて笑った。

――まあつまりは、モンスターみたいな存在だってことか。

悠真はテーブルの上に肘をついて頬杖をつく。アレックスとグレイシアは本当に仲がいいおしどり夫婦で、ほんわかとしている二人を見ていると自然と緊張が解けてしまう。

アレックスもこちらを見て、にっこりとほほえんだ。

「そうそう。妖は、幻妖の他に天妖（てんよう）というのがいるんだよ」

「天妖ですか。見た目が変わるんすか？」

「いや、つくられた場所で天妖と幻妖に分かれるんだよ。簡単に言うと大陸でつくられるのが天妖で、奈落でつくられているだろうと思われるやつを幻妖と呼んでいるんだ」

「ふーん」

悠真は背中を丸めてテーブルに体重をあずけていたが、はっとして身体を起こした。

「ちょっと待って、アレックスさん。その、つくられた場所って、何？」

「ん？　ええと、つくられた場所は大陸か奈落かの違いなんだけど――」

「そうじゃなくて、妖はつくられるの？　産まれるんじゃなくて」

「そうだよ。くわしいことはよく知らないけど、妖は核と刻印術を

つかって『つくられる』んだよ。その術を妖令術（ようれいじゅつ）というんだけどね」

――なんだそれ。

悠真は生唾を呑みこんだ。天空の世界、奈落という存在、そしてつくられる生物であるという妖。わけのわからない世界観が次々と舞いこみ、頭の中が整理できなくなってしまう。

困惑する悠真には気づかず、奥さんのグレイシアが言葉を続ける。

「エレオノーラは優秀な妖令師（ようれいし）を輩出してきた国でね。王位を継承する人間は、優秀な妖令師でなければならないんだよ」

「そうなんですか。でも、妖をつくりあげても平気なんですか？街を襲ったりは」

「街を襲うのは、奈落から這い上がってきた幻妖だけさ。妖令師によってつくられた天妖は人間を襲わないんだよ」

悠真は腕を組んで考える。

――この世界はほんと、わけわからないことだらけだ。

色々な用語が出てきて頭がこんがらがってしまう。アレックスに頼んでメモ帳を用意してもらおうかと悠真は思った。

「ああ、そういえば」アレックスが声をあげた。「王位と言ったら、昨日、王女様のもとに暗殺者がしのびこんだんだってねえ」

突然のひと言に、悠真の心臓が胸から飛び出しそうになった。

「へ、へえ。そんなことがあったんですか」

「あれ、ユウマは聞いてないのかい？　街は今朝からその話題で持ちきりなんだよ」
「えっ？　あ、そ、そうだったんすか。いやあ、この街は来たばっかりだから、全然知らなかったな～」
変な声を出してしらばっくれる悠真をアレックスは白い目で見つめたが、やがて「はあ」とため息をついた。
「まあ、王宮の禁衛師団が身体を張って王女様をお護りしたそうだから、ことなきを得たそうだけど、暗殺者には逃げられてしまったそうでね。まだ街のどこかにひそんでいるんじゃないかっていう話なんだよ」
悠真の背中に冷たい汗が伝う。暗殺者というのは、十中八九、悠真のことだろう。昨日の今日だというのに、情報の伝達が想像以上に早い。
――ここには長居しない方がいいのか。
青ざめる悠真を見て、グレイシアが心配そうな顔をした。
「ユウマ、だいじょうぶ？　ちょっと顔色が悪いけど」
「えっ、だ、だいじょうぶです」
「そう？　ならいいんだけど」
グレイシアはがっくりと肩を落として、テーブルを見つめた。
「それにしても最近、王女様の暗殺とか、怖い話が多いねえ」
「そうだな」アレックスは椅子の背もたれに寄りかかって眉をひそめた。「国王が病に伏してから王宮は後継者争いで荒れているみた

いだし。この国はどうなってしまうのかなあ」
「この前も王女様の乗った車が事故に遭ったそうだしね。宮伯(きゅうはく)様は偶然の出来事だとおっしゃってたけど、本当のところはどうだったんだろうねえ」

落ちこむ二人を見て、悠真は目を瞬いた。

「後継者争いって何すか？　この国は何かもめてるんですか？」
「そうだよ」アレックスがすぐに相づちを打つ。「国王陛下のコーネリアス様はご高齢でね、一年前から病に伏しておられるから、王宮では後継者をだれにするかで意見がまっぷたつに割れているんだ」
「そうなんですが」
「うん。国王陛下には二人の正妃(せいひ)がいてね。第一王妃で三年前にお亡くなりになられたアンジェリーナ様と、第二王妃で現在の正妃であらせられるエリザベート様なんだけど、お二人にはそれぞれ王女様と王子様がいらっしゃるので、どちらを後継者にすべきかで王宮で意見が分かれているんだ」
「ああ、なるほど」

悠真はすぐに理解した。腹違いの者同士で王座をかけて争うというのは、あちらの世界の歴史でもありがちな話だ。

「王宮ではエリザベート様のお力が強く、王子派に大きく傾いているという話だから、最近は王女様をつけ狙うような事故が頻発しているんだ。……国民はだれも、そんなことは望んでないのにね」
「王女――」

悠真の脳裏にセラフィの笑顔が映し出される。アレックスが言う王女というのは、もしかしたらセラフィのことではないのか。

セラフィの名前は、イサベル・セラフィーナ。エレオノーラの王家の姓がセラフィーナであれば、彼女が王女である可能性がきわめて高い。

「あ、あのさ」悠真は何と問うべきか迷った。「あの、国王陛下のフルネームは何ていうのかな？」

「んん？　コーネリアス様のフルネームは、エレオノール・コーネリアス・ラ・アーシェラだけど。それがどうかしたのかい？」

アレックスは眼鏡の縁を持ち上げてレンズを光らせる。彼の視線にどきりとして、悠真はあわてて視線を逸らした。

国王コーネリアスの名は、エレオノール・コーネリアス・ラ・アーシェラ。この世界での名前の構成の仕方はよくわからないが、通例なら姓は一番最後につけるものである。

エレオノーラ王家の名は、アーシェラ。そして、セラフィの姓はセラフィーナ。セラフィは王女ではないのだろうか。

――禁衛師団に護られてたくらいだから、てっきり王女なんだと思ってたけど、違ったのかなあ。

セラフィが王女でないとすれば、王女を狙った暗殺者というのはだれになるのであろうか。悠真の他にも昨夜に王宮に入りこんだ人間がいたのだろうか。そんな感じはしなかったが。

「ところで」突然のアレックスの声に、悠真の肩がびくりと反応する。「あ、はい。何ですか？」

「話ががらりと変わってしまうけど、ユウマはこれから行く宛があるのかい？」

「いえ、ないです」
「ああ、やっぱりね」アレックスは人のよさそうな表情で笑った。
「なら、しばらくうちで泊まっていきなよ」
「いいんですか？　そんな。だって俺、部外者なんですよ。まるっきりの」
「部外者だなんて、寂しいこと言わないでくれよ。君がさっきコンロを直してくれたから、私たちはとても助かったんだ。だから、私たちも何か礼がしたいんだよ」

アレックスがふり向いて「なあ」と言うと、グレイシアは大きくうなずいた。

「この人の言う通りだよ。うちはこの人とあたしの二人しかいないから、部屋ならいくつか空いてるからね。だから、全然遠慮しなくていいんだよ」
「そうですか」

――まったく、この人たちは。

どこまで人がいいのだろう。王女を狙った暗殺者かもしれないというのに。

しかし、二人の提案は悠真としては願ってもない話だったから、思いがけない幸運に悠真は合掌したくなった。

悠真は姿勢を正して頭を深く下げた。

「わかりました。ではすいませんが、お言葉に甘えさせていただきます」
「おお！　本当かい！　そうだよ。ぜひそうしていってくれ。はは

っ！　じゃあ今夜は三人でパーティだ」

アレックスが飛び跳ねるようにして喜ぶと、グレイシアは「今晩の夕食はにぎやかになりそうだねえ」と嬉しそうに言った。

悠真は二人に調子を合わせながら、自分の頭をなでた。

「あ、でも、俺、何もできませんよ。こっちの世界のことは何もわからないし。あっちの世界で家事なんてやったことないし」

「ははっ、何言ってるんだよ。君には、さっきみたいにコンロを直す力があるじゃないか。……隠しているみたいだけど、優秀な刻印師なんだろう？　君は」

「えっ？　別に隠してるわけじゃないけど。それに、さっきのは単なる偶然だと思うし」

「そんな謙遜しなくていいんだよ。他にもランプとか直してほしいものがあるし。それにほら、この前アルバイトの子が怪我しちゃって、人手が不足してるからさ。お店もちょっと手伝ってくれるとありがたいんだよな～」

あっはっはっはと豪快に笑うアレックスを見て、悠真は椅子からずり落ちそうになった。

8（後書き）

アーシェラ王家の家族構成

アンジェリーナ（第一王妃・没）
└──王女　→　女であるため王位を継ぐことはできないが、
　　└非常に優秀で将来を有望視されている。

コーネリアス（国王）
└──王子　→　男であるため王位を継ぐことができる。
　　└だが才覚がなく王になる器ではない。

エリザベート（第二王妃）

国王のコーネリアスは高齢であり一年前から病に伏しているため、エレオノーラでは後継者をめぐって対立が起きています。

王宮では王女派と王子派で意見がまっぷたつに分かれているが、第二王妃のエリザベートの力が強いため、王子派にかたむきつつあります。そのため王女をつけ狙う事件が頻発しています。

9

その後、旦那さんのアレックスの要望だったランプの修理をしてから、悠真は昼食をいただいた。昼食は黄色のジャムを塗った食パンとサラダで、欧米に近い食事だった。

食べてみるとジャムはほんのり甘く、蜜柑（みかん）のような味がした。奥さんのグレイシアに訊ねてみると、ジャムは『レムネ』という柑橘（かんきつ）系の果物をすり潰して精製したものらしい。

また悠真が修理したランプだが、こちらはランタンのような代物で、ガラスの容器の中に炎を灯すタイプの照明器具だった。底をぱかっと開けると内側――本来ならば蝋燭（ろうそく）を置く場所に火の刻印が描かれており、印を描いたり消したりすることでスイッチのオン・オフを切り替えているようだった。

あちらの世界でつかわれる電灯はどこにも見当たらない。冷蔵庫や洗濯機、またテレビといった電化製品も家にはないため、悠真は最初アレックス夫妻がそれらを買えないほど貧乏なのかと思ったが、ならば自分を泊める余裕もないはずだとすぐに考えを否定した。

――いくら貧乏でも、電灯ひとつくらいはついてるだろう。

だが、家には電化製品が一切ない。ならば、買えないのではなくて、そもそもそんなものは存在しないのではないかと、悠真は思った。こちらの世界では電気が発見されていないのではないか。または電気そのものが存在しないのか。

そして電気の替わりを果たしているのが、『刻印術』という例の

如何わしい術なのではないかと、悠真は思った。コンロに照明器具と、冷蔵庫やテレビまであるかはわからないが、あちらの電気とこちらの刻印術を置き換えると、意外なほどにしっくりくることが少しおかしかった。

「じゃあユウマ。あんたはこの部屋をつかって」

グレイシアの案内で悠真は階段をあがり、二階の部屋に入った。ワンルームほどの大きさの部屋の隅には木製の寝台が置かれ、まん中に丸いテーブルと椅子が二つ置かれている。奥の壁には小窓がついており、カーテンを開けると日差しが悠真の目を刺激した。

グレイシアがはたきで寝台の上を叩くと、埃(ほこり)が部屋中を舞った。悠真は急いで小窓を開けた。

「もう五年以上も使ってない部屋だからね。ちょっと汚いかもしれないけど、我慢しておくれ」

「あ、はい。だいじょうぶ、です」

言いながら悠真は右手で鼻と口を抑える。その様子を見て、グレイシアは「はは」と白い歯を出して笑った。

「それにしても、あんた、変わった格好してるねえ。そのシャツは、あんたの国の服なのかい？」

「えっと」悠真は第二ボタンまで開けたカッターシャツの襟(えり)をつまんだ。「そうです。学校の制服なんですけど」

「ふーん。まあ、よくわかんないけど、その格好で外に出たら目立つだろ？　替えを用意してあげるよ」

「えっ、いいですよ。そんな。そこまで気を遣わせてしまうわけにはいきませんし」

「別に遠慮しなくていいんだよ。うちは古着屋だから、着る服なんて店にたくさんあるんだから。それに」言いながらグレイシアは悠真の頭に視線を移した。「少なくても頭を隠すものは必要だろ？」
「あっ。……そうですね」
「はは。あの人に選ばせると大変なことになるから、あたしが適当に見繕ってあげるよ。ちょっと待っててね」

グレイシアははたきを手わたすと、そそくさと階段を降りていく。彼女の背中を見送って、悠真は頭の上をさすった。

「そうだよなあ。もとはと言えば、帽子を探すためにここに入ったんだもんなー」

悠真ははたきで寝台の上を叩きながら、何をやっているのだかと思った。妖の話やらコンロの話やらで当初の目的をすっかり忘れていた。

「そういや、刻印術のことは聞きそびれちったなあ。アレックスさんは、空気中の物質がどうのこうのって言ってたけど」

右手を止めて悠真は考える。創造主から授かった力のお陰で悠真は刻印術をつかえるが、刻印術の原理や刻印師という職業については、まったくわからないのだ。

刻印の描き方は脳と身体が覚えてしまったから、つかうことはできるが――それだけでよいのだろうか。

しかし、と悠真は思う。刻印術でコンロやランプを直しておいて、「刻印術って何なのですか？」と聞いてもよいものだろうか。それを聞いて、アレックスとグレイシアが不審に思わないだろうか。

悠真は開かれた小窓から空を見上げた。

「聞けない、よなあ」

しばらくしてグレイシアが洋服を持ってきてくれた。折りたたんだ服を篭にたくさん入れて、帽子と革のブーツまで用意してくれた。

悠真は篭の中をがさがさと漁り、青のベストをとり出した。肩から股関節までの長さがある、綿のベストをシャツの上に羽織り、ウエストサッシュを腰に巻くと、ＲＰＧに出てくる旅人のような格好になった。

土でよごれた上履きを脱いで茶色のブーツを穿いてみる。ブーツなんて今まで穿いたことはないが、似合うのだろうか。

膝までの高さがあるブーツの裾を折って裏返しにする。正面で二つに裂けている裾の縁に金色のラインが入っていて、おしゃれなブーツだと悠真は思った。

「ま、こんな感じかな」

その日の夕食は、グレイシアが腕によりをかけてつくってくれた。リビングのテーブルの上には鳥の丸焼きや肉団子のソテーなど、悠真の好きな肉料理がずらりとならべられた。

鶏肉をほおばる悠真を見て、グレイシアは「育ち盛りの男の子はお肉をたくさん食べないとね」と顔をほころばせていた。

一方のアレックスは、フォークを動かす手を止めて「悠真が住ん

でたニホンというのは、どんな国だったんだい？」と話を聞きたがったが、学校のことや電化製品について話をすると、とたんに眉をくもらせて「ニホンというのは変な国だね」とまるで外人のようなことを言った。

「まあ、変な国だと思うのは無理ないよなあ」

夕食の片づけが終わり、悠真は自室の寝台にどさっと寝転がる。両手を枕にして小窓から空を見上げると、ダイヤモンドのような星がきらきらと輝いていた。

夜空をながめている分には、あちらの世界と大差ないのになと、悠真は思う。空気がきれいなせいなのか、あちらよりも星がたくさん見えるくらいだった。

悠真は右手をあげて天井に向ける。人差し指の第一関節と第二関節の間には、銀色の指輪がはめられている。クロムハーツのようなごついデザインではなく、ティファニーやグッチのような、女性が好みそうな指輪である。ほとんど装飾のない表には、見たことのない記号が羅列されていた。

『こんなところで命を落とされたら、君をここに連れてきた意味がなくなってしまう』

指輪の持ち主は、何のために悠真をイリスの世界に呼び寄せたのだろうか。魔王を倒すため？　世界の平和をとり戻すため？　それとも、魔王としてこの世界に君臨するため？

呼び出された理由を解き明かし、創造主の願いを叶えれば、悠真は日本に帰ることができるのだろうか。

――異世界に生きたいって、何度も思ってた。だけど。……だけど。

右手の腹の上に乗せて天井を見つめた。木目の板の表面はあちこちが痛み、黒い染みが浮かびあがっている。自分がかつて住んでいた家よりも古い家なのだろうと、悠真は思った。

あちらは今ごろどうなっているのだろうか。自分が姿を消して二日が経とうとしているが、学校で騒ぎになっていないだろうか。親は心配しているのだろうか。

悠真はごろんと寝返りを打ち、両膝を曲げて身体を縮ませる。腕にぐっと力をこめると、ひとりでに肩がふるえた。

「帰りたい」

次の日、アレックスの希望に応えて、悠真は店の手伝いに入った。店内で帽子を深くかぶるのは不自然だが、入店した客に黒髪だということはばれなかった。

店の仕事は接客をはじめ、服の陳列や掃除など雑用もたくさん含まれている。アルバイトをしたことがない悠真にとっては、どれから先にとりかかればいいのかわからなかったが、アレックスに丁寧に教えられたため、致命的なミスをすることはなかった。

レジで会計をしていて、悠真はまた新しいことに驚かされた。こ

ちらの世界のお金は、ルビアドールという水晶でつくられていて、硬貨や紙幣はつかわれていないようだった。

ルビアドールは色によって価値が分けられ、青が一万円、紫が千円、赤が百円、黄が十円、そして白が一円に相当するらしい。またルビアドールだと呼び名が長いため、お金を支払う際には、「五百八十ルビア」と省略するのが通例なのだそうだ。

アレックスに日本の紙幣を見せると、「こんな紙切れがお金なのかい？」とまた不思議そうな顔をしたが、それはこっちの台詞だと悠真は言ってやりたかった。

「何ていうか、こちらの世界はほんと、意味わからないことだらけだ」

お昼の休憩に入り、悠真は店の外でぐっと伸びをする。初めてのアルバイトで緊張が続いたため、身体が想像以上にだるい。午後は部屋でのんびりとくつろぎたいが、アレックスは許してくれるだろうか。

――ただで寝泊りさせてもらってるんだから、仕方ないか。

首をこきこきと鳴らして、悠真は街を見わたす。現在立っているこの通りは商店街になっていて、対面はパン屋が店を開いている。左には青果を売る店――こちらでも八百屋と呼ぶのだろうか――があり、右にはテーブルや椅子をあつかう日用品の店が並んでいる。

お昼どきの商店街は人が多く、買い物籠を下げた主婦たちがその大多数を占めている。街並みが中世ヨーロッパに近いことを除けば、あちらの商店街と大差ないように思えた。

「ユウマ。悪いけど、ちょっとこっちに来て手伝ってくれないか」

店の中からアレックスに呼ばれて、悠真が返事したときだった。商店街の向こうから、「きゃあ！」という女性たちの悲鳴が聞こえてきた。

「ん、何だ？」

悠真が茫然と見つめる先から、人ごみを掻き分けてこちらへと向かってくる影があった。影は二つ。フードのついた白いマントで全身をすっぽりと覆っており、だれなのか判別がつかない。服装から連想されるイメージは、回復役の白魔道師か異国の旅人といったところだろうか。

背の高い白魔道師が、背の低い白魔道師の手を引きながら、一心不乱にこちらへと迫ってくる。ざわざわと騒ぎ声をあげている人たちは足を止めて、慌てて道を開けていた。

「な、何っ……！？」

たじろぐ悠真の前で、背の高い白魔道師が突然フードをめくりあげた。あらわれたのは、オレンジ色に近いきれいなブロンドの髪。後ろで束ねている長いストレートの髪が、フードをめくりあげた勢いでふわりと宙に舞った。

顔は少し面長で、肌が雪のように白い。目は細いが睫毛（まつげ）が長く、理知的な印象を感じさせる。改めて見るときれいな顔してるんだなあと、悠真はぼんやりと思った。

一昨日に王宮で悠真と対峙した、禁衛師団の紅一点。

「って、シャーロット。お前が何でここに――」

悠真が言い終わるよりも早く、シャーロットはこちらに向かって猛然とジャンプする。悠真は顔面に蹴りを入れられて、「おぶっ！」と変な声を出して路上に倒れた。

ほぼ同時に、黒い線が悠真の上を通過した。黒い線――レーザーといった方が正しいのだろうか。レーザーの飛んでいった先から爆音がひびいた。

悠真は右手で顔を押さえながら急いで立ち上がった。

「ってえな！　てめえ、何すんだよ」

「全て後にしろ。今は貴様の戯言にかまっている暇はない」

「はあ？」

シャーロットは悠真に背を向けて、腰から長剣を抜き放つ。後ろで倒壊した家屋から砂塵が舞い、追い風に乗って商店街を砂まみれにする。悠真は袖口で鼻と口をおさえた。

商店街の中央に伸びた黒いレーザーが、ふわりと上空に舞い上がる。レーザー――黒い紐の先端には、ヨーヨーのような円盤がとりつけられている。円盤のまわりには短剣のような刃が無数についており、ヨーヨーの動きに従って高速に回転していた。

刃のついた円盤が、シャーロットたちの来た道の奥に戻っていく。替わりに、漆黒の影がこちらに向かってゆっくりと歩いてきた。

「何なんだ……？」
「来るぞ！」
シャーロットが長剣をかまえて右足を踏みしめる。前方から迫り来るおぞましい殺意に、悠真の全身の毛が弥立った。

10

「やっと観念したカイ。エレオノーラの王女サマ」

向こうからゆっくりと歩いてきた男は、少しも悪びれずに哄笑した。老人のような白い髪を生やし、顔は病人のように白い。同じ白でも、シャーロットのような美しい肌とはまるで正反対だった。

全身を覆うマントは、イリスで忌み嫌われる――黒。艶のない生地は色彩がなく、影のようである。袖口は魔術師のローブのように大きく、裏地の血のような赤い色をちらりとのぞかせる。

黒マントの男は、袖から血色の悪い手を出した。爪の長い人差し指を伸ばして、シャーロットの左腕にしがみつく、背の低い白魔道師に向けた。フードをかぶった魔道師は、身体を小刻みにふるわせている。

「エレオノーラの、王女様……？」

悠真はかぶっていた帽子が吹き飛ばされていることに気づかずに、背の低い白魔道師に視線を移す。すると相手も視線に気づいたのか、ちらりとこちらに顔を向けた。フードのわきから出ているのは、ラベンダーの色をした不思議な髪。毛先は鮮やかな紫色だった。

「ああっ！　アンドゥ！」

ラベンダー髪の女の子――セラフィは不安げな表情を一変させて、目を大きく見開く。アメジストのような紫色の瞳は、美術品のように輝いていた。

――王女様ってことは、やっぱり。

セラフィはシャーロットの手を離し、悠真のとなりに歩み寄る。悠真はどきりとして、とっさに後ずさりした。

「な、何」

「アンドゥ、だよね」

「そう、だけど」

「……よかった」

セラフィはフードをかぶったまま、にっこりとほほえんだ。

「シャロがあなたを暗殺者だと勘違いしてたから、無事だったのか心配してたの。その、ごめ――」

セラフィがそう言いかけたとき、「セラフィーナ様！」とシャーロットが悲鳴のような声をあげながらこちらに飛びついた。シャーロットが悠真とセラフィに抱きつくようにして地面に倒れる――その背後を、刃のついたヨーヨー――ソーサーが通りすぎた。

ソーサーは通りの奥にある廃屋（はいおく）に炸裂し、どん！　と鈍い音を発する。黒マントの男が右手首を返すとソーサーの刃が家の壁を抉り、天井まで一直線に斬り裂いた。

街にひびく悲鳴を聞きながら、黒マントの男が悠真たちを見下ろす。

「俺様の前で、何をくちゃくちゃくちゃくちゃくちゃ、くちゃくちゃくちゃくちゃ、くっちゃべってんだア？　あアん？　王女様よヲ」

黒マントの男が右手を上に向けると、紐でつながったソーサーが上空から返ってきた。刃の間を器用につかみ、男は「ひゃっひゃっひゃ」と気味の悪い声を出した。

「君、もうちょっとさア、緊張感っていうのを持った方がよいと思いマスよお。カリにもサア、命をねらわれているんですからサア」

シャーロットは黒マントの男をきっとにらみつけ、左のわき腹をおさえながら立ち上がる。悠真もすぐに身体を起こし、セラフィの身体を支えながら立ち上がった。

悠真は逃げたくなる気持ちを抑えて、両膝に力をこめる。シャーロットの後ろに寄って、背中をちょんとつまんだ。

「あの危ないやつは何もんなんだよ」

「やつは、『闇の使者』の団員だ」

「闇の使者、て何だよ」

「闇の使者というのはな」シャーロットは柄の頭を左手でにぎりしめながら舌打ちする。「イリスの闇を支配する世界最大の諜報機関だ。やつらは密偵をはじめ、武器の輸送、麻薬密売、暗殺など、後ろ暗いことを全て金ひとつで引き受ける、名前通りの闇の請負人だ」

「あ、暗殺――」悠真は唾をごくりと呑みこむ。シャーロットは少し後退して、悠真に顔を近づけた。「そうだ。やつはセラフィーナ様のお命をねらう、正真正銘の暗殺者だ」

黒マントの男は笑顔をつくり、首を少しかしげた。

「君たち、さっきから何くちゃくちゃ話してンのかナア？　ねえ、僕も仲間に入れてよ。ねえ」

「ご免こうむる。貴様のような気違いとつるんだら、私まで気違いだとかん違いされてしまうからな」
「んん？　言ってることがよくわからないけど」男は爪の長い指で自分を指差す。「僕はねえ、シリルっていうんだよ。シリル・グレイ。あの悪名高い闇の使者の一員なンダヨ。かっこいいでしょ」

シリルと名乗った男の口調は一定しない。若者のような口調で話し出したと思いきや、突然に丁寧口調に変わり、そう思うと今度は子供のような話し方に変わる。一人称も「俺」や「僕」など、そのときによってころころ変わるのだ。

まるで麻薬漬けになった中毒者のようである。

――いや、もしかして……こいつ、本当にラリってるのか。

そう思う悠真の前で、シリルはおもむろに右手のソーサーをふりかざした。悠真とシャーロットに緊張が走る。

「なあ姉さん。俺の趣味、教えてやろうか。なあ、教えてやろうか」
「いや、けっこうだ。およその察しはつく」
「そうかア。じゃあ仕方ねえ。姉さんにだけ、こっそり教えてやるよ。趣味はア――」シリルはソーサーをシャーロットに目がけて投げつけた。「人殺しだア！」

シャーロットは左に跳んでソーサーをかわし、突撃して剣を斬りつける。シリルは素早く後退して手首を返し、宙を舞うソーサーを右手でキャッチした。

「なかなかいい踏みこみだ。だが、ダガア！　そんなんじゃ、この俺はタオセネエんだよおおオ！」

シリルは瞳が飛び出しそうになるくらいに目を大きく開き、口から汚い涎(よだれ)をだらだらと垂らす。その姿はやはり麻薬がきまってしまった中毒者にしか見えない。

シリルは急接近するシャーロットに対し、右手のソーサーをふり回して応戦する。ソーサーを飛ばしてしまうと、戻ってくるまでタイムラグが出てしまうからなのだろうか。危ない口調に反して戦い方は理に適っていると、悠真は思った。

――だけど。

「オラ、オラア！　どうしたア、このくそアマがア！　とっとと斬りつけねえと白昼堂々ぶっ殺されちまうゾヲ！」
「くっ、そのはしたない言葉を少しは慎め！」

果敢に攻撃するシリルに対し、シャーロットは剣で受けるばかりでほとんど反撃しない。隙をうかがっているのだろうか。だが、素人の目からは、単に攻めあぐねているようにしか見えない。

悠真は背中でセラフィを隠すようにして、静かに戦いを見守る。悠真の心にも焦りと苛立ちがこみ上げてくる。

「何で、シャーロットは反撃しないんだ。あのシリルっていうやつが名うての暗殺者なのはわかるけど、あいつの腕だったら、もっとガンガン攻められるだろ」

固唾を呑みながら悠真は想像する。シャーロットに襲われたあの日の夜、シャーロットは大きく飛びかかり、悠真の眉間に剣先を向けた。あのとき、悠真は初めて死を覚悟した。

セラフィが後ろから悠真のベストをつかんだ。

「シャロは、わき腹を痛めてるの」

「わき腹？」

「うん」セラフィは頭を少しうつむかせる。「この前、アンドゥを追ってたときに、痛めちゃったんだって」

「俺を追ってるときに……？」

疑問に思いながら、悠真はまた想像する。悠真はシャーロットに剣を向けられた後、もうひとりの悠真があらわれて記号の洗礼を受けさせられた。その後、戦闘中にもうひとりの悠真が覚醒し、刻印術でシャーロットら禁衛師団を次々と倒していった。

そのとき、悠真の刻印術はシャーロットの左のわき腹を吹き飛ばした。正当防衛のつもりだったのが、このようなタイミングで牙を剥くとは。悠真は「くそっ！」と声を出して悔しがった。

堪忍袋の緒が切れたのか、シリルが怒り狂ってソーサーを飛ばす。それをシャーロットはかわし、同時に長剣を高く斬り上げる。シリルとソーサーをつなぐ紐がぷつりと斬れて、黒い紐がだらりと地面に落ちた。

「えっ、うそ」シリルは狼狽して後ずさりする。斬れてしまった紐を引っ張るが、ソーサーは手もとに返ってこない。シリルは目に見えるようにうろたえて「ちょっと待てよ」とか「聞いてねえよ」と声をもらした。

シャーロットはわき腹を押さえながら、長剣をかまえ直した。

「貴様の雇い主はだれだ」
「えっ、ちょ、ちょっと待ってよ」
「国外の人間か。それとも国内の人間か」
「ダカラ、ちょっと待ってってば」
「泣き寝入りはしても無駄だ。貴様はこれから私といっしょに王宮まで来てもらうからな。わかることは全て吐いてもらうぞ」

シャーロットは「ふう」と息を吐き、長剣を鞘に納める。緊張が解かれて、悠真も張っていた肩の力を抜いた。

そのとき、

「なら、今ここで吐いてやるよ」

突然の嘲りに、シャーロットが剣の柄に素早く手を伸ばす――それよりも早く、シリルのソーサーがシャーロットの右肩を殴打した。シャーロットが右肩を押さえてうずくまる。

「くくっ……あっはっはっは！」

シリルは大声で笑いながら左手の手首を回転させる。左手の中指から紐でつながったソーサーが、くるりと宙を舞ってシリルの左手に収まった。

「ソーサーがひとつだとは、だれもイってませんヨヲ。私が戦意喪失してたのを見て、すっかり油断しちゃったンデスカア？」

シャーロットを冷然と見下ろし、シリルは左手のソーサーをくるくると回した。

「クライアントなんてよオ、わざわざ聞かなくてもわかってるんだろう？　まあでも、そんなに教えてほしいんだったら、くそ王女をぶっ殺したアトにでも教えてヤルヨ」

シリルがこちらに身体を向ける。豹（ひょう）のような冷たい視線が悠真に突き刺さる。

「オヤ、君、イカした髪の色してますねえ。染めてイルんデスか、それ」

シリルが落ち着いた足どりで近づく。交渉が通じる相手だとは、思えない。

「わざわざクロク染めるなんて、私たちに喧嘩を売ってイルトシカ思えマセンね。いただけませんよ。ヒジョウにいただけませんよ、それは」

「や、やめろ――」

悠真がふるえる足を踏み出したときだった。高速で回転するソーサーが悠真とセラフィの間を通り、後ろの壁を貫いた。

悠真は肩をがたがたとふるわせながら、ソーサーの飛んだ先にふり返る。家の角は粉々に粉砕されて、円形にくり抜かれた穴の上から、ぱらぱらと木のくずが落ちている。

「雑魚はどいてろ。風穴をアケテほしくなかったらなあ」

身体を支える腰の力が抜けて、悠真はその場にへたりこむ。全身から噴き出す汗がシャツと身体をべったりと張りつかせる。

――こんなやつに、俺なんかが勝てるわけない。

パン屋のとなりの民家にセラフィもへたりこんでいる。がたがたと身体をふるわせる様子を見下ろして、シリルが血色の悪い顔で嘲笑した。

11

パン屋のとなりにある民家の壁に、セラフィがへたりこむ。身体をがたがたとふるわせて、フードの中の顔は血が抜けてしまったように青い。

「ヤット観念したようだね。王女様。今楽にしてあげるヨ」

シリルは恐々とするセラフィを見下ろし、鼻息を荒くする。街の往来のどまん中だというのに、シリルはひと目を少しも気にしない。人殺しを慣れている人間は、殺害現場を選ばないものなのか。

――このままだと、セラフィが。

悠真は右手に力をこめて立ち上がろうとする――が、恐怖で腕がふるえてしまい、力がまったく入らない。

「くくつ。痛みナンテほんの一シュンですから、何も怖がらなくてイイんダヨ」

シリルがソーサーの持つ左手をふりあげる。陽の光がソーサーの刃先で反射し、悠真の目を刺激する。

「ちょ」

暗殺者が非力な女性に刃物をふりあげる。生で見るのは初めてだった。治安がよかったあちらの世界ではとても考えられない、異様な光景。死が目前に迫る光景が、こんなに絶望的なものだったなんて。

怖い。胸が張り裂けそうになるくらいに、怖い。

「ちょ、っと」

だが、それでいいのか。ここで負けてもいいのか。このまま恐怖に慄いていたら、セラフィを永遠に失ってしまうのだ。それでいいのか。

――そんなの、嫌だ。

心の奥底から声が聞こえる。腕はがくがくとふるえ、全身から汗が吹き出しているというのに、心がそれらを拒絶する。身体の内側からほとばしる熱い魂が、手足に強靭な力をあたえる。身体中を流れる血流が早くなっていくのを感じた。

「ちょっと待てや！」

悠真の怒号を聞いて、シリルの左手がぴくりと止まる。シリルは「ち」と舌打ちし、こちらにふり返った。

「何だア兄ちゃん。このオンナよりも先にコロサレタイのか」
「セラフィに、手を、出すな」
「あア！？　言ってるイミガよくわからんなあ」
「だから、セラフィに手を出すなって言って――」

悠真の言葉を待たずにシリルが左手を素早くふり下ろす。高速で回転するソーサーが悠真の目前に迫る。

――よけられない。

死を覚悟したとき、悠真の心に異変が起こった。どくんと鼓動が脈打った瞬間、心の奥底にひそむ、もうひとりの悠真が覚醒する。ジェルのような粘膜がざわざわとあふれ出し、身体の内側から全身を包みこんでいく。

――来い！　もうひとりの俺。

悠真は、このタイミングで内なる自分――もうひとりの悠真が覚醒するのではないかと思っていた。もうひとりの悠真は、オリジナルの悠真が危機に直面するとあらわれて、人格交代するのだ。

確証はなかったから、過分に危険な賭けではあったが。

悠真の瞳が真紅に染まる。シリルのソーサーを紙一重でかわし、前傾姿勢でシリルに突撃する。驚愕するシリルの前で刻印を描き、衝撃波でシリルを吹き飛ばした。

「な、何ナンダ、オマエは」

シリルは宙でくるりと一回転し、往来のどまん中で着地する。左手のソーサーをふり上げて、前方の悠真に放とうとした。

だが、

「ナニッ！？」

悠真は高速で急接近し、シリルの懐（ふところ）に入りこむ。後ろに引いた右拳を目一杯に繰り出して、シリルの鳩尾（みぞおち）を容赦なく突き上げた。シリルの身体がくの字に折れ曲がる。

「かはっ！」シリルは腹を抑えて後ろによろめく。軽快なステップで距離をとる悠真を口惜しそうににらみつける。

――これが、創造主の力なのか。

悠真は真紅の瞳で茫然と戦闘を見守る。自分の身体がシリルの動きに反応し、ひとりでに動き、攻撃をかわして反撃する。目まぐるしく変化する視界とは対称的に、攻撃のかわし方や反撃の仕方は最小限の動作で留め、ほとんど無駄がない。殺陣（たて）の手本を間近で見ているような感覚だった。

――相手は名うての暗殺者なんだぞ。なのに、それなのに、こんなに圧倒的に強いなんて。

シリルは民家の壁を蹴り、向かいの家の天井の上に着地する。左腕を素早くふり降ろし、ソーサーを勢いよく放った。「死ねやアア！」

高速で回転するソーサーが悠真の眼前に迫るが、悠真の足は地面に縫いとられてしまったように動かない。後ろから、「アンドゥ！」と叫ぶセラフィの声が聞こえた。

悠真は右手の人差し指を出して光の刻印を描く。宙に描かれた印は、衝撃波を発生させる刻印とは異なる印――それがソーサーと激突した瞬間、印は弾け飛ぶように消えてなくなった。ソーサーも刻印に跳ね飛ばされて、地面に音を立てて落ちた。

悠真は落ちたソーサーを右手で拾い上げる。ソーサーを戻そうとするシリルが紐を引っ張り、往来から家の天井にかけて、黒く長い

紐がぴんと張った。

「は、離せ！」

シリルは歯を食いしばりながら紐を引っ張るが、悠真の右腕はびくともしない。悠真は口もとをゆるめて、右腕を一気にふり降ろす。ぶちっと音がして、黒い紐がソーサーのつけ根で切れた。

地面に捨てられるソーサーを見て、シリルの顔色がまっ青になった。「覚えてろ！」と台詞を吐いて、家の屋根を飛び越えていく。

その後を悠真は追う。通りを猛スピードで疾走し、民家の壁を伝って屋根の上へとよじ登る。屋根を飛び越えるシリルに猛然と接近する。

「うわあ！　ク、クルなア！」

シリルは悲鳴をあげて、袖から出した毒針を投げつける。針の先端が毒々しく紫色に着色されている、触れただけで人を殺してしまいそうな毒針だった。が、悠真の身体は右に素早く跳んで毒針をかわす。シリルは毒針をしつこく投げつけたが、一本も悠真の身体にはあたらなかった。

悠真の左腕が伸びる。シリルの黒いマントの裾をつかみ、力まかせに後ろへと引っ張る。「あわわ！」と悲鳴をあげるシリルの頬に、悠真は右拳を突き出した。

「あべヴッ！」

シリルの身体は時計の逆回りに回転しながら地面に落下していっ

た。

1

悠真は、右肩を負傷したシャーロットを手当てするため、二階の自分の部屋に案内した。アレックスとグレイシアは、騒ぎの中心であるセラフィとシャーロットを匿うことに困惑したが、シャーロットの傷を見て手当てに協力してくれた。

「すまない」

シャーロットは白いマントを脱がされて、寝台の上で身体を起こしている。神官服のような服も脱がされて、左の胸から右の肩にかけて、包帯が幾重にも巻きつけられている。まるで女性の武士が胸に巻く晒(さら)しのようだった。

グレイシアは手当てを終えると、戸口の前でぺこりと頭を下げた。

「それでは、あたしは下のリビングにいますので、何かありましたら遠慮なく呼びつけてください」

「はい。シャロを手当てしてくれて、ありがとうございました」

セラフィがフードを外して深々と頭を下げる。彼女の顔と髪を見てグレイシアは何かを言おうとしたが、不安げな表情を浮かべたままそそくさと部屋を出ていった。

悠真はテーブルから椅子を引っ張り出してセラフィに差し出す。自分も残りの椅子に腰かけて、テーブルの上に肘をついた。

室内にしんと沈黙が支配する。シャーロットは申しわけないと思っているのか、うつむいたまま口を堅く閉ざしている。セラフィは、

悠真とシャーロットの間に張りつめる空気に言葉をなくし、「えっと」と二人の顔を交互に見ている。

――気まずい。

悠真は胸にずきずきと痛みを感じながら、沈黙のまん中で息を呑む。

シャーロットが口を噤むのは無理もないと、悠真は思う。エレオノーラの王女だと思われるセラフィが暗殺者にねらわれるところを、部外者に見られてしまったのだから。王国の人間からすれば、王女がねらわれることも、王女の命をねらっている人間がいることも知られたくないはずだ。王国に不穏な翳(かげ)を落としてしまうのだから。

くわえて悠真の場合、一昨日に暗殺者に間違えられたという事実がある。暗殺者だと勘違いしていた人間に、本当の暗殺者を撃退してもらったのだから、シャーロットの面目はまんまとつぶれてしまったことになる。

――とはいっても、今さら責められない、よなあ。

悠真は「ふう」と息を吐く。悠真にはシャーロットを責める理由がある。だが、溜まった不満をそのままぶつけてしまってもよいものか。

悠真のとなりにはセラフィがいる。彼女の前でシャーロットをねちねちと詰(なじ)れば、悠真はきっと嫌われてしまうだろう。それ以前に、深く傷ついた女性をここぞとばかりに責めたてる男など、人として間違っていると悠真は思う。

しかし、悠真の頭に浮かぶことはそんなことばかり。悠真はセラフィとシャーロットに何と声をかければよいかわからなかった。

「あ、そ、その」しばらくしてセラフィが悠真の顔を見て言った。

「ごめんね。アンドゥには関係ないのに、変なことに巻きこんじゃって」

「それはいいよ、別に。あのシリルとかいうやつは、俺も気に入らなかったし」

「でも、悠真はあたしに召喚されて、色々と大変だったんでしょ。……それなのに、あたし、勝手に悠真を召喚しちゃって、その――」

「ああ、もう」悠真は声を荒げて、セラフィの言葉を遮る。「もうすぎたことなんだから、いいよ、それは」

悠真は頬を右手の上に乗せて背中を丸める。シャーロットの肩がぷるぷるとふるえているような気がするが、面倒なので気づいていないふりをした。

セラフィは顎を引いて、上目遣いで悠真を見上げる。

「アンドゥ。……もしかして、怒ってる？」

「別に怒ってねーよ」

「でも」

悠真が面倒になって「だから」と声を立てると、シャーロットが顔をがばっとあげてこちらをにらみつけた。

「貴様！　さっきから大人しく聞いてれば、何だ！　その口の利き方は」

「はあ？　何だよ、いきなり――」

「黙れ！」シャーロットが左手で寝台をどんと叩いた。「貴様だっ

てもうわかっているのだろう。こちらにおわすセラフィーナ様がどなたであるか。それをさっきから聞いてれば、別に、だの、怒ってねーよ、だの無礼な言葉をならべおって。少しは身分をわきまえたらどうだ」

「うるせえ！」悠真も堪えきれなくなって立ちあがった。「俺だってな、いきなりこっちの世界に連れてこられて、め、迷惑してんだよ！　この前だってな、お前らに暗殺者だと勝手に間違えられて死にかけたし。……さっきだって、わけわからずに死にかけたんだぞ。それをお前らは――」

言いながら、空気が凍りついていることに気づいて悠真ははっとした。セラフィとシャーロットは返す言葉がないのか、腿（もも）の上に手を置いたまま押し黙ってしまった。

――しまった。

悠真は椅子にへたりこむ。

「その、ごめん」

「いい。貴様の言い分は間違っていない。過分に気に入らないがな」

「あん？」シャーロットの言葉にまたイラッとした。「間違ってないって言ってるわりには、何か素直じゃなくね？」

「あたり前だ！　どこのだれだかわからんやつに、何でわれわれが頭を下げなければいけないのだ。大体、貴様のその頭は妖（あやかし）――」

「シャロ！」

セラフィに不意に呼び止められて、シャーロットは慌てて言葉を止める。セラフィは丸い頬をぷくりとふくらませた。

「悪いのはあたしたちなんだから、アンドゥにちゃんと謝らなきゃ

だよ」
「う――」
シャーロットは口をひくひくさせながら顔をまっ赤に染める。頭から湯気を出して恥ずかしがる様子は、まるで茹であがった蛸のようだった。
――こいつ、男女のくせに、セラフィには頭があがらないのか。
悠真はこみ上げる笑いを必死に抑えようと口と腹を抑える。右手をぷるぷるとふるわせて悔しがるシャーロットの姿が浮かび、なお笑いがこみ上げてくる。
笑いを堪えてある程度の溜飲が下がった。悠真は顔をあげてシャーロットを見つめた。
「まあ、馬鹿なコントはこの辺で置いといて、俺にもくわしく話してくれよ。シリルとかいう危ない野郎にどうしてあんたらがねらわれてるのか。あんたらは何者なのか」
「貴様。……いいのか。危ない橋をわたることになるのだぞ」
「危ない橋ならもうわたっちまったんじゃねーかな」悠真は肘をついて頬杖をつく。「あのシリルっていうやつをこの手で伸しちまったんだ。今ごろ組織のブラックリストに、俺の名前もあがってるんじゃないかな」
「そうか」
シャーロットは深いため息をついた。
「貴様はもうわかってるかもしれんが、セラフィーナ様はわがエレオノーラの王女であらせられる。国王陛下の第一王妃でいらっしゃ

ったアンジェリーナ様のご息女で、王家の正当な血筋を受け継がれているお方なのだ」
「ふーん。でも、エレオノーラの王家ってアーシェラっていうんだろ？　それなのに、セラフィの姓がセラフィーナなのはおかしくないか」

悠真がそう返すと、となりでセラフィが「それはね」と顔をあげた。

「あたしの場合、『セラフィーナ』はあたしの名前だから、家名じゃないの」
「えっ？　じゃあ、セラフィの名前はセラフィーナ・アーシェラなの？」
「ううん」

セラフィは目を閉じて首を横にふる。

「あたしの名前は、イサベル・セラフィーナ・ラ・アーシェラっていうの。でもこれだと名前が長いから、いつもはイサベル・セラフィーナって名前を途中で切ってるの」

なるほど、と悠真は思った。エレオノーラの国王の名は、エレオノール・コーネリアス・ラ・アーシェラ。セラフィは確かに正当な血筋を受け継ぐ人間なのだと、悠真は静かにうなずく。

「ん？　じゃあ、先頭の『イサベル』っていうのは名前じゃないの？」
「イサベルっていうのは、王家の太祖（たいそ）であらせられるエレオノール・アーシェラ様の正妃のイサベル様の御名（ぎょめい）で、王家の女性に代々受け継がれる、王家の証のようなものなの」

「あ、そうか。国王の名前は、エレオノール・コーネリアス。男の場合は、太祖のエレオノールの名前が代々受け継がれてるんだ」
「うん」
セラフィが笑顔をとり戻してうなずく。二人の様子を見て、シャーロットは顔をうつむかせる。
「話を戻すが、現在のエレオノーラの王妃はエリザベート様というお方で、セラフィーナ様の異母にあたる方なのだが、エリザベート様にはエドワーズ様という嫡子（ちゃくし）がいらっしゃるのだ」
「その話なら聞いたよ。国王のコーネリアス様が病気だから、セラフィと、その、エドワードっていうやつで――」
「エドワードではなくてエドワーズ様だ！」
シャーロットが額に青筋を浮かべる。悠真はその迫力に圧倒されて「わ、わかったよ」と言葉をつまらせた。
「で、えっと、その、エドワーズ様とセラフィのどっちかを後継者にしようってんで、もめてるんだろ？　王宮で」
「そうだ。王宮は、男子を後継者にしようという古い考えを持つ者が多いため、エドワーズ様を支持する人間が多数を占めているのだ」
「ふーん。まあ、わからなくはないけどなあ。じゃあ、あんたはセラフィを支持してるから、こうやって身近でボディガードをしてるのか」
「いや、そうではない。私は禁衛師士であり、セラフィーナ様の身辺を護るという大役を仰せつかっているから、畏れながらもこうしてセラフィーナ様の身近に置かせていただいているのだ。私たち禁衛師団にお二人を推挙する資格はない」
セラフィがしょんぼりと肩を落とすのを悠真は見逃さなかった。

悠真は指でテーブルの上をとんとんと叩いた。
「まあ、シリルの雇い主がだれなのか大体の察しはつくけど。でも、王位って普通は男が継ぐものなんじゃないのか？」悠真ははっとしてセラフィに向き直る。「あ、セラフィが女王様になる資格がないとか、そういう意味じゃないからな」
あたふたする悠真を見て、シャーロットが苦笑する。
「お前が言ってることは間違いではない。帝国や近隣の王国では、男子が王位を継ぐことになってるのだからな」
「む、何か腑に落ちないな、その言い方。それじゃあエレオノーラの場合は違うっていうのかよ」
「そうだ」シャーロットは背を正して悠真を見つめる。「わがエレオノーラは代々優秀な妖令師（ようれいし）を輩出してきた誉れ高き王国。故にわが国の王位を継ぐ人間は、妖令術を修めた者でなければならないのだ」
悠真も背中を伸ばして腕を組んだ。
「妖令術っていうのは確か、妖をつくり出す術だったな」
「ほう。貴様、いつの間にそこまで。なかなか侮れんやつだな」
「妖令術のこととか王家の問題のことは、ここの家の旦那さん、ええとアレックスさんっていうんだけど、アレックスさんから教えてもらったんだよ」
「そうか」シャーロットは顎に手をあてて思案するような仕草をする。「国民の政治に対する関心はかなり高いのだな。われわれももっとしっかりせねば」
悠真はのっそりと立ち上がり、壁についた小窓を開ける。外から

そよ風が吹いて、暑くなった体温を冷ましてくれる。

「で、その妖令術が今回の後継者問題と関係してるんだな」

「貴様の察する通りだ。セラフィーナ様は幼年のころから勉学に励まれ、その天才的な資質と相まって、若年にしてとても高度な妖令術を習得しておいでだ」

「ちょ、ちょっと！　シャロ。天才だなんて、やめてよ」

セラフィが顔を赤くしながら立ち上がる。だがシャーロットは悪びれる様子を見せずにセラフィを見つめ返した。

「いえセラフィーナ様。セラフィーナ様のお力は、私のみならず王宮のだれもが認めているのですよ。太祖のエレオノール様を超える器であると。ですから、あなた様を支持する人間が王宮で踏ん張っているのです」

「そんな。……持ち上げすぎだよ、みんな」

「いいえ。みんな、わかっているのです。セラフィーナ様がお母様のアンジェリーナ様のご期待に応えようと、とても熱心にご勉強されていたのを。アンジェリーナ様も大変喜んでおられたではないですか。セラフィーナ様にはご立派な妖令師になれる才能がおありだと」

「もう、シャロのいじわる」

椅子にどすんと腰を落とすセラフィに、シャーロットは「ふふ」と笑顔を返す。セラフィはむすっと口をとがらせている。まるで姉に怒られた妹のようだなと、悠真は思った。

――セラフィは亡くなったお母さんのことが大好きだったんだなあ。

悠真は窓の縁に背中をつけてシャーロットを見下ろす。

「セラフィが優秀なのはわかったけど、それが王位継承と関係してるのか？　エドワーズっていうや――王子様が妖令術をつかえれば、何も問題は起きないんだよな」

すると、部屋はとたんに静まり返った。セラフィとシャーロットは悠真と視線を合わせずにうつむいてしまう。穏やかだった室内を沈黙が支配する。

悠真は言葉を続けようか迷ったが、この沈黙が訪れた理由をすぐに理解した。

――王子様の方はセラフィと違って、ぼんくら野郎なんだな。

外から吹きつける風が強くなってきたため、悠真はすぐに窓を閉めた。

2

話を終えて悠真が一階に降りると、リビングにアレックスとグレイシアの姿があった。二人は不安げな様子でこちらを見上げていたが、悠真の顔を見て足早に近づいた。

「ユウマ。お二人の具合は？」

「えっ。シャーロットの傷はだいじょうぶそうだけど」

「そうか」

アレックスは胸に手をあてて深呼吸をする。グレイシアは「そう」と静かに相づちを打つ。悠真は首をかしげた。

「二人ともどうしたの？　ずいぶん元気ないみたいだけど」

「どうしたのじゃないよ！」アレックスは血相を変えて悠真の肩をつかむ。アレックスの手からふるえが伝わってくる。「あのうす紫色の髪のお方は、王女のセラフィーナ様なんだろう。王女様がご滞在されているというのに、どうしてユウマは平気でいられるんだ」

「どうしてって言われてもなあ」

悠真はぽかんと口を開けて考える。どうして自分は王女のセラフィと普通に会話ができるのだろうか。

――そんなこと言ったってなあ。王女なんて言われても、あっちの世界じゃどれだけありがたみがあるのか、よくわからないしなあ。

グレイシアが両手をふるわせてまごつく。

「ああ、どうしましょう。そろそろお茶でも出しにいった方がいい

のかしら。でも、くつろがれているところを邪魔するわけにもいかないし」
「あ、だったら喉乾いてるか、二人に聞いてこようか」
悠真は階段を駆け上がろうとしたが、グレイシアがあわててその手を引き止める。
「やめときなよ。お二人に粗相をはたらいたら、あんたが落刑になっちゃうんだよ」
「だいじょうぶだって。セラフィとシャーロットにかぎってそんなことはしないから」
「本当かい。でも、あたしは心配だよ。だって、王女様は雲の上のお方なんだよ。本来なら、あたしたち平民と同じ床を踏まないお方なんだから」
「同じ床を踏まないって、また大げさだなあ。話してみるとけっこう普通だよ。二人とも。シャーロットはまあ、いちいち口うるさいけど」
その日の夜、セラフィとシャーロットをリビングに案内して夕食を囲んだ。アレックスとグレイシアは二人に粗相をはたらかないようにと、ぎこちない動きで夕食をとっていたが、セラフィの明るい性格とシャーロットの礼儀正しい姿を見て次第に心を開き、やがて食卓は歓談につつまれた。
「ご馳走さまです」
食事を終えてセラフィが両手を合わせてお辞儀すると、グレイシアは申しわけないように苦笑した。
「王女様と禁衛師士様がお見えになられているというのに、お粗末

な食事しか出せなくて申しわけありませんでした」
「ううん。とってもおいしいご飯だったよ。おばさん、ありがとう」
「そんな！　滅相もありません」

グレイシアは赤面しながらかぶりをふる。セラフィのとなりに座るシャーロットが左手を出して、にっこりと微笑んだ。

「いえ、グレイシア殿。今日はおいしいご飯をいただけて、本当に感謝する。セラフィーナ様は朝から十分な食事をとられてなかったので、気がかりだったのだ」
「そうでしたか。心中をお察しします」
「今日は街で騒ぎを起こしてしまい、あなた方にも迷惑をかけてしまった。倒壊してしまった家屋については、国の人間を呼んで修理させるので、しばしお待ちいただきたい」
「はあ」

毅然とするシャーロットにグレイシアは間抜けな返事をする。悠真はセラフィのとなりによって、「なあ」と小声で言った。

「シャーロットってさ、歳いくつなの？」
「ん？　シャロは二十歳だったと思うけど。それがどうしたの？」

首をかしげるセラフィに背を向けて悠真はげんなりする。

――二十歳って、俺の五こ上であんなに落ち着いてんのかよ。信じられねえ。

街の修理プランを冷静に語るシャーロットを見て、この女とはやはり合いそうにないなと悠真は思った。

その後はセラフィとシャーロットを悠真の部屋に戻し、悠真は新しくあてがわれた部屋に腰を下ろした。部屋といっても物置としてつかわれていたため、室内はだいぶ埃（ほこり）にまみれていたが。

あらかた片付けられた床の上に悠真が寝転がっていると、

「アンドゥ」

と声がかかってふり返ると、戸口にセラフィが立っていた。彼女は肩を少しすくめて、両手をもじもじさせている。

「ごめんね。アンドゥの部屋なのに、あたしたちがつかっちゃって」

「いいよ、別に。他に部屋はなかったんだし」

「うん。……でも、何か悪いなって、思うし」

セラフィは視線を逸らして、「だから、その」と言葉をつなげようとしている。シャーロットと話をしている姿と比べて、明らかにぎこちない。

――もしかして、嫌われてんのかなあ。俺。

かなりのショックを隠しつつ、悠真はむくりと起き上がって床の上にあぐらをかく。人差し指で頬を掻いてから、「セラフィ」と彼女を指差した。セラフィの肩がびくんと反応する。

「は、はい」

「お前にひとつ、先に言っておきたいことがある」

「うん」

「俺の名前はユウマだ。だから、俺をアンドゥって呼ぶな」

セラフィはその場にしゃがみこむ。きょとんとしながら悠真を見つめる。

「でも、アンドゥの名前は、ユウマ・アンドゥなんでしょ。だから、ユウマがご先祖様のお名前で、アンドゥが本当のお名前だから、その」

――そういうことか。

セラフィがしきりに「アンドゥ」と呼んでいた理由がわかり、悠真は背中をだらりと丸める。これだから育ちのいいやつはと言いたくなるのを、口を抑えて堪えた。

「あのな、セラフィ。俺が住んでた国には、人の名前にご先祖様の名前をつけるしきたりなんてないんだよ」

「そうなの？」

「俺がいた国は、ええと日本っていうんだけど、日本の場合だと人の名前は姓と名しかつけないから、ご先祖様の名前はつけないんだよ。で、俺の姓は安藤で、名は悠真。だから、俺の本当の名前は安藤悠真っていうんだよ」

悠真は長財布から一枚のレシートをとり出し、床に転がっていたペンで『安藤悠真』と書き殴る。それをセラフィにわたすと、彼女は不思議そうな顔をした。

「何か、とっても難しい刻印だね」

「刻印じゃないって。これは漢字っていって、日本でつかわれてる文字なんだよ。画数が多いから、ひらがなより書くのがめんどくさいんだけどね」

「ひらがなっていう文字もあるの？」

セラフィが悠真を見上げて首をかしげる。悠真はしゃべりすぎたと思い、「いや、こっちの話」と適当に返した。

悠真は背筋をのばし、こほんと咳払いをした。

「だから、これからはアンドゥじゃなくて、ユウマとか、俺の名前にちなんだあだ名で呼んでくれよな。アンドゥだと、その、むきむきのボクサーみたいでかっこ悪いし」

「うん。わかった」

セラフィは満面の笑みでうなずく。週刊誌の巻頭を飾るグラビアアイドルのような小さい顔で、両腕で身体をかかえこむようにしている。部屋にふらりと入りこんだ子猫のようだなと、悠真は柄になく思った。

――やっぱ、可愛いなあ。

異世界に突然トリップして、となりには王国のお姫様がいる。そんな二次元じみたことが、悠真の前にあらわれて現実のものとなっている。

だが、セラフィの存在が妄想だとは、もう思わない。彼女はイリスの世界で生活し、自分と同じように食事して呼吸をしているのだ。

――でも、女の子と会話なんてしたことないから、何話したらいいんだろ。

セラフィが首をかしげて悠真の顔をのぞきこむ。悠真はとっさに後ずさりする。

「ユウマがいたニホンって、どんな国だったの？」
「ん？　うーん、そうだなあ。こっちの世界より文明は発達してたかなあ」
「そうなんだ」言いながらセラフィは頬を少しふくらませる。「でも、エレオノーラだって十分発達してると思うけどな」

悠真は思わず苦笑した。

「何ていうか、あっちの世界はこっちの世界と全然違うよ。行ったらきっと、驚くと思うよ」
「そうなの？」
「だって、あっちの世界の建物って二十階建てのビルとかあるんだぜ。電気社会だから夜でも明るいし、テレビもパソコンもあるし、おまけにインターネットまであるんだからさ」
「テレビ？　イ、インター……？」
「インターネット。パソコンにＬＡＮ線をつなげるだけで全世界の友達と交流できるんだぜ」
「へえ」

セラフィは目を見開いて驚喜する。その表情は屈託がなく小学生のようだった。

「何だかよくわからないけど、ユウマのいた世界ってすごいんだね！　そのインター何とかをつかえば、街の人とも帝国の人とも友達になれるんだもんね」
「そりゃもちろん！　どんなとこにいるやつとだってダチになれるからな。いやあ、インターネットを開発したアメリカ国軍は偉大だよなあ」

悠真は腕組みして、うんうんとうなずく。セラフィも調子を合わせてうなずいた。

「でも」悠真は両手を後ろの床についてだらりとした。「俺もこっちの世界に来て、色々驚いたよ。地面は宙に浮いてるし、髪の毛はカラフルだし、おまけに刻印術なんて変な術まであるし」

「地面が浮くって、大陸のこと？　ユウマの世界の大陸は浮いてないの？」

「浮いてないよ。ていうか、大陸って浮いてるのが普通なの？　こっちの場合は」

「うーんと」セラフィは唇（くちびる）に指をあてて考える。「普通って言えば普通になるのかな。浮いてない大陸なんて、だれも見たことないしね」

「そっか。こっちの場合だと、地上っていうか、浮いてない陸地は存在しないんだもんな」

「うん」悠真の調子に合わせてセラフィが腕組みする。「何か、難しい問題だね」

本当に難しい問題だなと、悠真は思う。異世界にトリップしてすぐに馴染めると思っていたけれども、あちらと異なる常識が矢継ぎ早に舞いこむため、対応するだけで手いっぱいだった。

こんな調子で今後もうまくやっていけるのだろうか。そう思っていると、

「帰りたい？」

セラフィに突然問われて、悠真は慌てて顔をあげた。

「えっと」

悠真は何と返すべきか迷った。あちらに帰りたいとは思っている。あちらにいたときは異世界を旅したいとしきりに思っていたけれども、帰るべき場所に帰れないのはやはり不安だし、また苦痛だと思う。

しかし、自分を召喚したセラフィに（本当の張本人は創造主かもしれないが）そう告げることはできない。

「あ、あのさ」悠真の声が思わず裏返る。「俺、あっちの世界にいたときにさ、その、考えてたんだよ。どっか、別の世界に行きたいなーってさあ」

「そうだったんだ」

「そうそう！　だから、その、セ、セラフィにさ、召喚してもらってほんと助かったよ。俺の長年の願いが叶ったし、その――」

「ユウマって優しいんだね」必死に言葉をつなげようとする悠真を見てセラフィが苦笑する。「でも、うそをつくのは下手なんだね」

「う、うそじゃねえって」

「ふふっ。だって、言葉が急にたどたどしくなるんだもん。あたしのために一生懸命言葉を考えてくれてるんだなって思うよ」

「あ――」

悠真は口を開けたまま身体をかたまらせる。悄然と肩を落とすセラフィになんて声をかければよいのかわからない。

セラフィは床にお尻をつけて、両腕で膝をかかえる。

「あたし、どうやったらユウマをもとの世界に帰せるのかわからないけど、でも、絶対に帰すから。もとの世界に帰れる方法を探して、ユウマを帰すから」

悠真は身体を起こして背中を丸める。

「なあ。セラフィは何で俺を召喚したんだ？」

セラフィはこちらを向いて苦笑する。

「あんまり深い理由じゃなかったんだけど。その……友達がほしいなって思って」

「あっ、そうだったんだ」

「えっとね。もともとは天妖を召喚しようと思ってたの。宮殿の地下に召喚術のことが書かれてる本があったから、あたしにできるかなって思って。そうしたら」

「俺がいきなりあらわれたのか」

「うん」

セラフィが申しわけなさそうにうなずく。悠真は天井を見上げてうなり声をあげる。

――てことは、何かの間違いで俺は呼び出されたのか？

しかし、と悠真は思う。学校の図書室で不思議な本を開き、天使のアリエルに導かれてイリスにやってきた。この一連の流れが間違いやプログラムのミスだとは思えない。何か、重大な意味がこめられているはずなのだ。

もしかしたら、セラフィが自力で呼び出したのではなく、召喚術をつかうセラフィに創造主がいたずらをしたのではないか。セラフィが召喚術をつかうタイミングに合わせて、創造主が力をつかい、悠真をイリスに呼び出したのだと。

創造主というのは、世間一般で思い描かれているようなお人よしなどではないのかもしれない。彼はもっと利己的で狡猾(こうかつ)であり、決して油断ならない存在なのではないかと、悠真は思った。

――まあ、やつの目的は、アリエルが出てきたときに聞けばいいか。

悠真は膝に手をついて立ち上がる。腕を天井に向けてぐっと伸びをした。

「セラフィは、明日はどうするんだ？　しばらくここで寝泊りするのか」

「ううん」セラフィは首を横にふる。「ずっとここにいるとアレックスさんとグレイシアさんに迷惑がかかるから、明日には出発するの」

「そっか。じゃあ王宮に帰るのか」

「ううん。王宮にはしばらく帰れないって、シャロが言ってた。だから、お父様の配下の人のお家(うち)に行って、ほとぼりがさめるまで待たせてもらうの」

「そっか」

悠真は腰に手をあてて考える。

セラフィは暗殺者にねらわれている。今日はシリルを追い返したが、暗殺者はひとりとは限らない。王位を争奪するために暗殺しようというのだから、相手は金に糸目をつけず、確実にセラフィの命を奪おうとするはずだ。

セラフィとシャーロットの二人旅は、過分に危険をはらんでいる。

このままセラフィを送り返したら、もう会うことはできないかもしれない。

――そんなの、嫌だ。

悠真は拳を堅くにぎりしめた。

「それ、俺もいっしょに行くよ」

「えっ、いいよ。そんな」驚いたのか、セラフィもすぐに立ち上がった。「これ以上ユウマに迷惑かけるわけにはいかないもん」

「でも、シリルみたいなやつがいつやってくるか、わかんないんだぜ。あんなのがまた襲ってきたら、セラフィは撃退できるのか」

「む。……シャロがいるから平気だもん」

セラフィは頬をふくらませて、胸の前で両手をにぎりしめる。その仕草が可愛くて、悠真は慌てて視線をそらす。

「でも、だな。シャロ――あいつは右肩と左の腹を怪我してるんだぞ。あの状態じゃ、剣なんてろくにふれないぞ。それでも平気なのか」

「う……へ、平気だもん」

口をつまらせながらも強がるセラフィを見て、悠真は吹き出してしまった。

「うそつくのが下手だとか言っといて、セラフィだって下手じゃんか」

「う、うそじゃないもん！　ほんとだもん」

「はいはい。俺に気を遣わせないようにしてくれてるのはわかったから、ここは俺の言う通りにしてくれ。な」

「……うそじゃないもん」

セラフィはぺたりと座りこむ。意志の弱い女の子なのかと思っていたが、なかなかの頑固者のようで、やはり二次元の女の子ではないんだなと悠真は微笑ましく思った。

悠真はふっと息を吐いた。

「それに、友達なんだろ。俺は」

「えっ、あ、うん」

「友達だったら、困ってるときは助け合うんだろ。死んじゃったお母さんだって、きっとそう思ってるんじゃないかな」

セラフィはぽかんと口を開けていたが、くすりと笑って悠真を見上げた。

「シャロもユウマも意地悪だよ。すぐにあたしの弱いところで攻めるんだもん」

「セラフィはわかりやすいからな。まあでも、素直なのはいいことだよ。うん」

「う。すごくばかにされてるような気がするけど。気のせいかな」

セラフィはむすっと口をとがらせる。その素直な反応がおかしくて、悠真は声を出して笑った。

3

次の日、太陽が南天に昇りはじめたころに悠真はアレックスの古着屋を後にした。つばの長いクロッシェを深くかぶり、菫色（すみれ）のマントで身体をすっぽりと隠している。

アレックスとグレイシアは悠真が旅立つと聞いて驚いたが、セラフィが置かれている状況をつぶさに説明するとすぐに納得してくれた。アレックスの「家がまた広くなっちゃうね」という言葉が頭から離れない。

――本当はもうちょっとのんびりしたかったけど、仕方なかったんだよな。

悠真は足を止めて後ろをふり返る。グラスデンに続く道はあたりの木々に阻まれて、先が見えなくなっている。

「ユウマ。何をぼさっとしてるんだ。さっさとついてこい」

森の道を進むシャーロットが面倒くさそうに声をあげる。悠真はマントをひるがえして彼女の後につづく。

「ああ、すまん。ちょっと後ろが気になったからさ」

「何だ、追っ手の気配でも感じたのか？」

「えっ、いや、別にそんなんじゃないけど」

悠真が適当に返すと、シャーロットは悄然と肩を落とした。

「まったく。貴様がついてくると言って聞かないから、仕方なく同

行を許してやってるが、くれぐれもセラフィーナ様を困らせてしまうようなことはするなよ」
「わ、わかってるよ」
悠真は「け」と毒づく。
シャーロットは朝から機嫌が悪い。理由は悠真が勝手に同行しているためだと思われるが、それ以前に彼女は悠真を毛嫌いしているのかもしれない。
――生理的に受けつけないっていうことか。
そんなことは知るか、と悠真は思った。悠真も生真面目で融通の利かないシャーロットとは肌が合わないため、いくら嫌われようが痛くもかゆくもない。
むしろこちらは被害者なのだ。勝手に暗殺者と間違えられて、危うく殺されかけたのだから。順番で考えたら、向こうから先に態度を改めて、こちらと和解する方法を模索(もさく)すべきなのである。
――そうだ。俺は何も間違っちゃいない。悪いのはこいつ。この脳みそ筋肉男女(きんにくおとこおんな)が全て悪いんだ。だから、お前は一刻も早く俺に謝るべき……。
悠真がシャーロットの背中をしつこくにらめつけていると、セラフィが悠真のとなりに来て微笑んだ。悠真も慌てて笑顔を向ける。
「だいじょうぶだよ。ああ見えてもシャロはユウマのことを頼りにしてるから」
「そうか？　とてもそういう風には見えないけど」

「ふふっ。シャロは素直じゃないから。でもほんとはね、ユウマがきてくれるって――」
「セラフィーナ様！」

シャーロットが足を止めてこちらにふり返る。フードで隠した顔は林檎のように赤くなっている。

「セラフィーナ様、思ってもいないことを口にしないで下さい。私の沽券にかかわります」
「ふふっ、ごめんね。でも、これからはあたしたち三人で力を合わせていかなきゃなんだから、仲間割れはだめだよ」
「それは、承知しております。こんな」言いながらシャーロットは悠真をにらみつける。「土から生まれた妖のような男と力を合わせなければいけないのは、嫌悪を通り越してもはや苦痛でしかありませんが、セラフィーナ様のご命令とあらば我慢いたします」
「う、うん」

シャーロットの並々ならない怒気を感じて、セラフィが言葉を失う。唇をひくひくさせて怖がっている姿から、彼女がシャーロットの主だということは想像できない。

――け。ざけんじゃねえよ。

シャーロットは踵を返して歩を進める。その背中を、悠真は眉間に皺を寄せて凝視する。となりのセラフィに近寄ってそっと耳打ちした。

「いいかセラフィ。あっちの世界だと、あいつみたいなやつのことをツンデレっていうんだぜ」
「ツンデレ？」

「そ。外ではツンツンしてるけど、家の中じゃあデレデレする、外面ばっか気にするかっこつけ野郎のことだよ。まさにあの男女のためにあるような言葉だよなあ」

悠真は空を見上げてがははと爆笑する。前方から虎をも殺しかねない殺気が発せられていたが、悠真はまったく気づかなかった。

「で、俺らはどこに向かってるんだ？」

小一時間後、顔を包帯でぐるぐる巻きにされた悠真がシャーロットに問いかける。シャーロットは背を向けたまま森の奥をひた歩く。

「宮伯のマーカス様のところだ。マーカス様はエリザベート様の専横に反対されておられる方だからな」

「ふーん。で、宮伯って何だ？」

「何だ、宮伯も知らんのか」

シャーロットは露骨にため息を洩らす。

「宮伯というのは、王宮で政務を執る師士たちをまとめる長官のことだ」

「長官、ねえ。つまり大臣のことなんだろ？」

「大臣？　何だそれは」シャーロットは目を細めて明らかに嫌そうな顔をする。悠真も包帯のすき間から目を細めてにらみ返す。

「えっ、だから政治家の長官のことだよ。財務大臣とか外務大臣とか、俺もよくわかんないけど、俺がいた国じゃあ長官のことを大臣

って呼んでるんだよ」
「そんなものは知らん」

そんなやりとりをしながら、悠真たちは木が鬱蒼（うっそう）と茂る森の道を歩く。舗装されていない自然の道は、左のカーブをゆるやかに描いている。木の枝が屋根となって日差しを遮っているため、森の中はとてもひんやりとしている。

歩を進めるたびに落ち葉を踏みつぶす音が聞こえてくる。人の姿が全然見えないため、森の中は静寂につつまれている。聞こえてくる音といえば風の音や、ときおり鳴き出す鳥の声くらいであった。

――気味悪いくらい静かだな。

木の幹の間を見つめながら、悠真はそっと息を呑む。凶悪な暗殺者にねらわれているというのに、人気（ひとけ）のない場所にいてもよいのだろうか。

「なあセラフィ。マーカスさんの家にはいつごろ着くんだ？」
「ん？　えっとね、マーカスさんのお家は三つ先の街にあるから、歩いてだと三日くらいかかるんじゃないかな」

セラフィのさらりとした言葉が悠真の耳を粉砕する。

「三日って、まじ？」
「うん。まじだよ」

セラフィはにこにこして小悪魔のような笑顔を向ける。どこか、こちらの反応を見て楽しんでいるような気がするが、気のせいだろうか。

「シャロ」セラフィが突然足を止める。「この辺でもういいんじゃないかな？」

シャーロットもすぐに足を止めてセラフィに向き直った。

「そうですか。では、お願いします」

「うん。まかせといて」

セラフィは右手に持っている巾着袋のようなバッグを開けて、中をがさがさと漁る。「あった！」と言ってその場にしゃがみこみ、とり出した小さな石を土の上に置いた。

ビー玉くらいの大きさの紫色の石だった。表面は透明で、純度の高い宝石のような光沢を放っている。紫水晶と呼ばれるアメジストに酷似しているが、どこか妖しい光を放つ気味悪い石だと、悠真は思った。

セラフィは次に菜箸のような棒をとり出し、紫水晶のまわりに円や線を引きはじめた。るんるんと鼻歌まじりに作業をしている姿は、落書きを楽しむ小中学生のようだった。

――あの棒、どこかで見たことあるような。

セラフィの後ろからのぞきこみながら、悠真の脳裏にアレックスの姿が映し出される。コンロを修理していたアレックスの手にも、セラフィが持つものと同じ棒がにぎられていた。

指揮棒のような黒く細い棒切れ。先端にはステンレスのような銀色の金属がつけられている。

「なあセラフィ、さっきから何してるんだ？」
「妖令術で妖(あやかし)をつくってるんだよ」
「いぃっ！？」

思わず後ずさりする悠真を尻目に、セラフィは刻印をどんどん描き進めていく。紫水晶を中心として魔法陣のようなものが地面に印(しる)される。大きな円の中に描かれたものは、ナスカの地上絵に似ていた。

「できた！」

セラフィが棒の先端を紫水晶につけた瞬間、円と鳥の絵から青白い光が放せられた。ばちばちと電流のようなエネルギーがあたりに飛散し、紫水晶がゆっくりと宙を浮きはじめる。

「こ、これは――！」

唖然とする悠真の前で、刻印に描かれた鳥が地面から剥ぎとられ、紫水晶をがばっと呑みこんだ。土の塊(かたまり)が宙に浮いたままエネルギーを放出し、やがてもりもりと隆起しはじめる。

土の塊は縦長に伸びると、まん中の後ろあたりからにょきっと細長い腕を伸ばした。腕はわきの下から指先にかけてうすい翼を生やし、エメラルドに変色する。身体の下部には二本の足が生えて、上部には長い首の先端に黒い嘴(くちばし)が形成された。

鷲(わし)のような大きな鳥が悠真の前で翼を広げる。血のような紅い瞳に見つめられて、悠真は腰を抜かせてしまった。

「こ、これが、妖」
「そうだよ。師獣(しじゅう)よりも速いし素直だから、とっても便利なんだよ」
首を伸ばす鷲の頭をセラフィが嬉しそうに撫でる。鷲も「くうくう」と鳴き声を出しながら気持ち良さそうに目を細めている。巨獣を臆することなく従えるセラフィの姿は、ある種異様な姿のように思えてならない。
シャーロットが「ふふん」と悠真をあざ笑う。
「どうだ、ユウマ。セラフィーナ様の偉大さがわかったか？」
「あ、ああ」もはやシャーロットの顔を見上げる余裕はなかった。
「あれが、妖の中の、天妖(てんよう)っていうやつなのか」
「そうだ。天妖といえども色々な種類がいるそうでな。あれは鳥型で緑色の毛並みが特徴的なラウルという天妖だ」
悠真は改めてラウルという妖を見上げる。目の上に紅い毛が一本ずつ後ろに生えている。眉毛だろうか。大きな翼や尻尾の先の毛は白く、艶やかな色をしていた。
「な、なあ。天妖ってどのくらい種類があるんだ？」
「さあな。私は妖令師ではないからよくわからないが。だが、セラフィーナ様ならば五十種類くらいの妖令術はお使いになられるのではないかな？」
「ご、ごじゅ――」
悠真は思わず喉(のど)をつまらせてしまった。
悠真たちはラウルの背にまたがり、グラスデン郊外の森を飛び立つ。悠真は、先頭にまたがるセラフィの後ろに乗り、彼女の小さな

肩を両手でがっしりとつかんでいる。

好きな女の子の身体に触れるなんて、何て幸運なんだと思う悠真であったが――。

「ァァアアああ！　てか超速ええ！」

ラウルは空に向かって急上昇すると、翼を水平に倒して高速で滑空する。その速度は車を優に超えている。ジェットコースターのような速さでラウルは風を切る。

「ユウマ！　だめ、ちゃんとつかまって。じゃないと落ちちゃう！」

「んなこと言ったってえエエ！」

前から殴りつけてくるような風に必死に抵抗しながら、悠真はセラフィに抱きつく。いい匂いがするとか、そんな悠長なことを考えている余裕はない。

ラウルがグラスデンのある島を飛び越える。眼下にあらわれたのは、白い河のような雲海と対岸の岬。雲の上に陸地があるということには違和感を禁じえないが、雲に囲まれた景色は神秘的で絵本の中の世界のようだった。

――なんて能天気なことは考えていられないんだよな。マーカスさんっていうやつが信用できるやつだったらいいんだけど。

セラフィに後ろからしがみつきながら、悠真は眉をひそめた。

4

天妖ラウルの背にまたがり雲海に浮かぶいくつかの島を飛び越えると、広大な森が前方に姿をあらわした。東京ドームが何個入るのだろうかという広い森のまん中を湖が占め、湖畔に宮殿のような建物がたたずんでいる。

「あ！　ユウマ。見えてきたよ」

セラフィが右手を伸ばして宮殿を指差す。赤い屋根をつけた建物が三つ、山のように連なっている。屋根の左右には角（つの）のような塔が伸びて、先端には金色の飾りが施されていた。

ラウルは翼を縦に起こして飛行速度を落とすと、宮殿の門の前にふわりと着地する。悠真はラウルから飛び降りて、門をまじまじと見上げた。

「ひゃあ。何ていうか、でかい建物だなあ」

まるでフランスやドイツの文化遺産をながめているような心地だった。関所のような巨大な門が、悠真に向かって口を大きく開けている。門というよりもこれではトンネルだよなと、悠真は半ば呆れながら思った。

「それじゃ、マーカスさんにちょっくら会いに行きますか」

「ちょっと待て」

シャーロットが悠真の襟（えり）を後ろからつかむ。マントの襟が首筋にくいこみ、悠真は思わず「うげ」と声を出してしまった。

「いってーな。何すんだよ」
「セラフィーナ様がラウルを片づけるから、そこで待ってろと言っている」
「はあ？」

背を向けるシャーロットを恨めしく思いながら、悠真も後ろに視線を向ける。

セラフィは翼をたたんだラウルを連れて、湖畔の庭に向かう。長い首を差し出したラウルの首筋を彼女が撫でると、ラウルは青白い光をばちばちと放って、土の塊へと姿を回帰させた。

土の塊は地面に落下すると音もなく崩れ去り、こんもりとした土の山になる。その中から紫色の石を拾い上げて、セラフィは小走りでこちらへと向かってきた。

「ごめんね。おまたせ」
「あ、ああ」

悠真は唖然としたまま土の山を見やる。先ほどまで怪鳥ラウルの姿をしていたはずだが、今はただの土くれに戻っている。妖令術について頭では理解しているが、実際に目のあたりにすると違和感を禁じえなかった。

――やっぱりこっちの世界は意味わからねーな。

悄然と肩を落とす悠真を見て、セラフィが首をかしげた。

「ユウマ、どうしたの？」

「あ、いや、別に」

芸術品じみた門をくぐり抜けて、悠真は庭園のまん中に伸びる石畳を歩く。草花の咲く庭園には大きな噴水があって、ワイングラスのような彫刻から水が勢いよく放出されている。空に虹がうっすらとかかっていた。

宮殿の前まで来てシャーロットが呼び鈴を鳴らすと、格式の高そうな扉がゆっくりと開いた。白のタキシードのような服を着た召使いは、悠真たちを見まわしてそっと一礼したが、セラフィが王女であることを告げると飛び跳ねそうな勢いで驚いた。

「ご、ご主人様は王宮に出仕されていますので、今日は、お帰りになれないかもしれません」

「わかってる。セラフィーナ様も突然に訪問したことは重々承知しておられるから、安心していただきたい。ただ、マーカス様には早急に相談せねばならないことがあるので、そこはよろしくたのむ」

「は！　す、すぐに伝書鳩を飛ばします」

赤い絨毯（じゅうたん）が敷かれたロビーを歩きながら、シャーロットが召使いの男と話をする。両手を動かして仕草を交えながら会話するシャーロットは毅然としていて、おどおどした様子を見せない。

「何ていうか、こういうときはほんと、たのもしいやつだな。シャーロットは」

「ふふっ。たよりになる臣下でしょ」

呆れる悠真を見てセラフィがくすりと笑った。

応接室に通され、召使いの長のジェフリーという男から挨拶を受

けると、悠真たちはすぐに二階の部屋へと案内された。宮伯のマーカスは明日にならないと帰れないため、くわしい話は明日にしようとのことだった。

自分に宛てられた部屋の扉を開けて、悠真は絶句した。二十畳以上の広さはあろうかという部屋には絨毯が敷かれ、天井には大きなシャンデリアがかけられている。カーテンはゆるやかにドレープがかかり、部屋の中央に置かれたベッドは、シルクのようなつやつやした生地のシートが敷かれていた。

外国のセレブが泊まるような豪奢（ごうしゃ）な一室。あちらの世界なら、一泊するのに二、三万円はかかるに違いない。

――俺もここに泊まるんだよな。やっぱり。

悠真は戸口で立ち尽くしたまま行き場を失う。椅子を引いて座ろうとしても、その椅子が金でできているような代物なのだから、悠真に座る勇気はなかった。

しかし、自分はとんでもないことに首を突っこんでしまったのだと、悠真は改めて思い知った。セラフィはエレオノーラの王女。彼女が住む部屋は、この部屋よりも広くて贅沢な部屋なのだ。

「あちらの世界でも王女っているんだろうけど、やっぱこういう部屋に住んでるんだろうな。よく考えれば、そんなこと、すぐわかったはずなのに」

口頭で教えられて、充分に理解しているつもりだったけれども、自分は何もわかっていなかったのだと、悠真は思った。セラフィは自分と住む世界が違う。今さらになって、アレックスとグレイシア

の狼狽していた姿が目に浮かび、悠真は自分の迂闊さを悔やんだ。

部屋の隅でげんなりしていると、こんこんと扉をノックする音が聞こえた。悠真が「はい」と返事すると、セラフィが扉を開けて顔を出した。

「ユウマ。どう？　くつろいでる？」

「あ、ああ」

悠真が曖昧な返事をすると、セラフィは首をかしげた。

「ユウマ。どうしたの？　何か、落ちこんでる？」

「べ、別に、落ちこんでねえよ」

悠真は高級そうなベッドにおそるおそる腰かける。自分の浅ましい姿が情けなくて仕方なかった。

悠真は苦笑した。

「何てな。強がってるってわかるよな。……俺、今までこんな豪華な部屋になんて入ったことないから、どうしたらいいかわからないんだ」

「そうなんだ」

「はは、情けないよな。男なのに、部屋を汚したりしたらどうしようって、びびりまくってててさ。セラフィだったら、こういうところに来ても全然余裕なんだろ。だって、王女様なんだもんな」

「ううん。そんなことないよ」

セラフィは悠真のとなりに座った。

「あたしは、部屋を汚したりしたらどうしようって不安になったりしないけど。でも、あたしだってすごい不安だもん」
「えっ、部屋に耐性があるのに何で不安になるんだ？」
「あたしの不安はお部屋じゃないの」セラフィは肩をすくめて苦笑いする。「あたしはその、王女だから、あまり、お外に出たことないし。出たとしてもたくさんの従者に囲まれてたから、ひとりでお外で泊まったことなんて一度もないし」
「そうなのか」
「うん。今日だってシャロがいてくれるから、まだ平気でいられるけど、ひとりだったらきっと、挨拶だってうまくできなかったと思うもん。……ユウマはそういうの、全然平気なんでしょ？」
「うーん、そうだなあ」

悠真は腕組みしてシャンデリアを見上げる。金色の燭台には蝋燭（ろうそく）の炎がゆらゆらと動いている。

――王女様には、王女様の悩みがあるんだよな。

悠真は「はあ」と息を吐いて、のっそりと立ち上がった。

「それじゃあまあ、ここに来てお互い緊張してるっていうことで。情けないもん同士ということでいいか」
「ふふ。そうだね」

セラフィは悠真をまっすぐに見上げてくすくすと笑う。その仕草にどきりとして、悠真は慌てて視線をそらす。

「あ、そ、そういえばさあ、さっきラウルを土に戻してたじゃん。あれって、どうやってやったの？」
「ん？　あれはね、熄滅（そくめつ）っていうんだけど、妖の首筋に刻まれてる

刻印を消して、ラウルを解放させてたんだよ」
「刻印を消して解放って、どうゆうこと？」
「うーんとね」セラフィはベッドの端に両手をついてうつむく。「妖は紫玉（しぎょく）を核にして、土や水などを媒体にしてつくるんだけど、核と媒体をつなげるのにソピアが必要だから、媒体に刻印を描いて――」セラフィは悠真の頭から湯気が出ていることに気づいて言葉を止める。「ユウマ、だいじょうぶ？」
「だめだ、さっぱりわかんねえ」
「えっと、ユウマは刻印術の原理ってわかってる？」
「いいや、さっぱり」

素直に白状する悠真の顔を、セラフィは不思議そうに見つめる。何かを言おうと口を開いたが、その言葉を両手をおさえて呑みこむ。

「えっとじゃあ、先に刻印術の原理を教えなきゃなんだけど、大気中には『ソピア』っていう無色透明な物質があってね。このソピアを反応させると炎を起こしたり、水をつくり出したりすることができるの」
「ふーん。ＲＰＧでいうマナみたいなものなのか」
「マナ、って？」
「あ、ごめん。話続けて」

悠真は頭の後ろをなでながらセラフィのとなりに座る。

「簡単に言っちゃうと、刻印術はソピアを反応させる術なんだけど、ソピアには特定の刻印に近づくと反応を起こすっていう性質があるの。だから、術を発動させたいときは刻印を描いて反応を起こすっていうのが、刻印術の原理になるの」
「なるほど」

適当に相づちを打ちながら悠真は考える。セラフィの言葉を頭の中で何度も反芻（はんすう）する。

刻印術は、ソピアという物質を反応させることで術を発動させているらしい。ソピアというのは空気中にふくまれる物質のようだが、ＲＰＧで登場するマナや魔力とはニュアンスが少し違うように思える。

――ソピアは、特定の刻印に近づくと反応を起こすのか。

悠真の脳裏にアレックスの家が思い浮かぶ。家にあったコンロには炎の刻印が描かれており、アレックスは菜箸のような棒で刻印を描いていた。そういえば、あの菜箸のような棒は何なのだろうか。

「だいじょうぶそう？」

セラフィが前かがみに身体を傾けて悠真の顔をのぞきこむ。悠真は慌てて背筋を伸ばす。

「そういえばさ、セラフィが妖令術をつかうときにさ、菜箸みたいな棒をつかってたじゃん。ほら、先端がステンレスみたいな銀でできてる」

「ロッドのこと？」

「ロッドっていうの？　あれは」

「うん」

セラフィは「ちょっと待ってね」と言ってそそくさと退室すると、巾着袋のようなバッグを持って部屋に戻ってきた。袋からストローくらいの長さの黒い棒――ロッドをとり出して、悠真に手わたした。

「これだよね。ユウマが言ってる棒って」
「あ、そうそう。これ」
「これはロッドっていって、刻印を描くペンなんだけど、この先端についてる銀――えっと呪印銀っていうんだけど、この銀は呪師が呪いをかけてつくった銀だから、空気中のソピアをたくさん集めることができるの」
「ふーん。でもさ、ソピアって空気中にふくまれてるから、わざわざ集めなくてもいいんじゃないの？」
「うーんとね、術を発動させるときは、ソピアをたくさん集めた方がより強い術になるの。だから、優秀な刻印師を目指してる人はみんなロッドをつかって刻印を描くんだって、教育係の人が言ってた」
「ふーん。そういうことだったのか」

要は電球と同じなんだなと、悠真は思った。電球はより強い電圧をかけられた方が明るくなる。その仕組みと同じだから、刻印術をつかうときはロッドをつかいなさいということらしい。

――こちらの世界もよく考えられてるんだなあ。

セラフィは機嫌がいいのか、「それからね」とにこにこしながら袋から石の板をとり出した。

「ロッドはこのスレートとセットになってるんだよ」

悠真はスレートという石板を受けとる。漫画の単行本くらいの大きさの板で、表面はざらざらとしている。

「スレートって、これは石板なのか？」
「うん。スレートは刻印を簡単に描いたり消したりできるから、刻印術をつかうときに便利なんだよ」

「だからロッドとセットになってるのか」

要は黒板なのだと、悠真は思った。黒板のように簡単に文字を描くことができるから、刻印を頻繁（ひんぱん）に描くときにつかわれる。悠真がスレートの表面を指でなぞると、簡単に文字を描くことができた。

スレートに食い入る悠真をセラフィが嬉しそうに見つめる。

「刻印術の基本は『発動』と『停止』。すなわち刻印を描いて術を発動させて、術を行使した後は描いた刻印を消して停止させる。だけど、妖令術は妖をつくり出す術だから、それぞれ『創出』と『熄滅』に言葉が置き換えられてるの」

「つまり、言葉が違うっていうだけ？」

「うん。刻印を描いて妖をつくり出すから『創出』で、また刻印を消して妖を滅するから『熄滅』なんだけど、ちょっとややこしいよね」

セラフィは舌を出して苦笑した。

「でも、ユウマってすごいよね。刻印術の知識がないのに、どうして刻印術がつかえるの？」

「えっ、あ、こ、これはだな」

悠真はどきりとした。創造主という如何わしい存在から力をもらったことや、もうひとりの悠真が心の中にいることをどう説明すればいいのか。

セラフィが細い身体をぐいっと近づける。悠真はとっさに後ずさりする。

「しかもしかも、ロッドもスレートもつかわないで宙に刻印を描いてたし。もしかして、ユウマがいたニホンの刻印術って、エレオノーラよりも発達してるの？」
「あ――」その手があったかと悠真は得心する。「そ、そうだよ！実は日本にも刻印術があってさ。俺はあっちで刻印術を習ってたんだよ～」
「……ほんと？」

セラフィが目を細める。その瞳は、疑っていますと言わんばかりである。

悠真とセラフィの間に長い沈黙が流れる。

――俺ってほんと、うそつくの下手だよな。

悠真は視線をそらして、空々しく口笛を吹く。口笛なんてうまく吹けないから、口からはひゅーひゅーと空気の抜ける音しか出てこなかったが。

しらばっくれる悠真を見かねて、セラフィはすっくと身体を起こした。

「まあ、ユウマがそう言うんだから、いいや。あたしはエレオノーラしか知らないから、ユウマのいたニホンなんてよくわからないし」
「そ、っか。日本も、まあ、その、刻印術は盛んだったから、あれだったんだけどさ。その、あれ」
「……ばか」

セラフィは悠真をにらみつけると、扉を大きく開けて出ていってしまった。ばたんという大きな音が部屋中にひびきわたる。

「ああ。……確実に嫌われたな、俺」

身体を疲れを感じて、悠真はベッドにごろんと横になる。天井のシャンデリアにつけられている蝋燭は、黙々と火を灯している。セラフィがいなくなっても変わらずに。

創造主や天使のアリエルをことを正直に話した方がよかったのだろうか。悠真は左腕を枕にして寝返りを打った。

「っていうか、あれって何だよ。意味わかんねーよ、俺」

5

その日の夜は一階の食卓で夕食をいただいた。白のテーブルクロスが敷かれた縦長のテーブルに、セラフィと向き合うかたちで悠真は席についた。

夕食は豪華な客室に輪をかけるようなものだったが、悠真にそれを気にかける余裕はなかった。正面からセラフィの視線がぐさぐさと突き刺さるからだった。

――う、疑われてる。

テーブルのまん中には悠真の大好物である肉料理が置かれているが、手を伸ばすことはできない。悠真はセラフィと目を合わせないようにして、手前に置かれたスープをスプーンでひたすらすすった。

「む。貴様、セラフィーナ様に何か悪さをはたらいたのか」

食事を終えてセラフィが二階に上がるのを見届けると、シャーロットがそう言った。悠真は「け」と舌打ちする。

「悪さなんてしてねーよ。つーか、近所の悪ガキか、俺は」

「概ね(おおむ)間違ってないのではないのか？」

「なわけねーだろ」

悠真は口をとがらせて、テーブルに肘をついて背中を丸める。その様子を見てシャーロットが「ふふん」と口もとをゆるめる。

「まあ、貴様みたいな不純な輩(やから)に近づかれないのはよいことだ。こ

れでセラフィーナ様が悪い影響をお受けにならずに済む」
「け、どっかの男女と違って、俺は悪い影響なんてあたえてねーよ」
「む。その男女というのは私のことか？」
「いいえ、違いますよ～」

シャーロットはかったるそうにする悠真を余所に、ハンカチで口もとの脂をふきとる。その仕草がいちいち優雅で腹が立つ。

「まあ貴様のことはどうでもいい。……セラフィーナ様のお歳は十四。ゆえに今はどのようなことにも関心をお寄せになられる。貴様がセラフィーナ様に近づくことには目をつむるが、セラフィーナ様は今がとてもお大事な時期なのだから、くれぐれも悪い影響をあたえるようなことはするなよ」
「わかってるよ」

悠真も食事を終えて二階の自室に戻った。扉を開けてベッドの上に腰を降ろすと、肩の上にどすんと重りが乗りかかる。

「セラフィには何とかして謝らないとなあ」

あんなに色々と教えてもらったのに、こちらはうそをついてしまったのだから、セラフィが怒るのも無理はないと悠真は思う。しかし、創造主に呼ばれてきたとか、天使のアリエルみたいなものがいるなど、すべてを赤裸々に話してしまっても平気なのだろうか。
「本当のことを話さないとフェアじゃないのはわかる、わかるんだけどなあ」

悠真はがっくりと肩を落とす。

図書室で変な本を開けて、創造主とかいうわけのわからない存在にこちらへと呼び出された。天使のアリエルに導かれて、自分の交代人格だと言い張るもうひとりの悠真がピンチのときにあらわれて、刻印術も創造主の力で習得することができた。

――自分で考えてても意味がわからないな。

悠真は「はあ」とため息をつく。話の前後に脈絡がなく、経緯や目的もよくわからない。何より創造主の存在を悠真自身がよくわからないのだから、正しく説明できる自信がどうしても持てなかった。

気を落としてうなだれていると、腹からぐうと音が鳴った。悠真は右手で腹をさする。

「ああ、腹減ったなあ」

せめてパンの一枚でも食べておけばよかった。ベッドに身体をあずけて悠真が天井のシャンデリアをながめていると、

「タラリラ〜ン」

聞き覚えのある幼子（おさなご）の声が突然ひびいて、悠真はあわてて身体を起こした。

金色の輝きを放つ豪華なシャンデリアの真下が淡い光につつまれる。サッカーボールくらいの大きさの白光の中から天使のアリエルがあらわれた。

「お前」

「オヒサシブリで〜す。ユウマサン。調子はいかがですか？」

アリエルは唖然とする悠真の前で身体をくるりとまわす。拳ほどの大きさしかない二次元キャラは、男心をがしっと鷲づかみにする破壊力を持っている。――こいつを可愛いなどとは、断じて認めたくないが。

悠真はぽかんと口を開けてアリエルをながめていたが、はっとわれに返って右手を伸ばした。

「てめっ」

「おおっト！」アリエルは四枚の翼を羽ばたかせて身体を上昇させる。「だから、ユウマサンはどうしていつもつかもうとスルんですか！」

「うるせえ。お前らのせいで俺は色々と誤解されてな、今大変なんだよ。少しは責任とりやがれ！」

悠真はその場で跳躍してアリエルに手を伸ばす。アリエルは必死になってシャンデリアのまわりをちょこまかと飛びまわる。こうしてみると、大きな蜂（はち）のようにも見えなくない。

アリエルはシャンデリアの上に乗っかって悠真を見下ろす。

「ユウマサンはどうしていつも反抗的なんですか。こんなメンドウくさい人は生まれて初めてデスよ」

「るせえ！　初めてだろうが知ったことか。向こうに帰る方法をさっさと教えやがれ」

「んもう。そうやって乱暴バカリしてると、女の子に嫌われマスよ？」

「う――」

悠真はどきりとして、ふり上げた拳を降ろす。顔が少し熱くなっているが、アリエルにばれないようにそっとベッドに腰を降ろした。

急に静かになる悠真を見て、アリエルが目をしばたく。

「アレ？　どうしたんデスか、ユウマサン」

「べ、別に、何でもねえよ」

「んん？　もしかして、恋でもシテルんデスか？」

「し……！」悠真の心臓がはち切れんばかりに暴れ出す。「してねえよ！」

アリエルは嬉しそうな顔で口もとを両手でおさえる。

「あれれ？　その反応……もしかして、図星だったんデスかあ？」

「な、なわけねーだろ！　こ、恋って――」

「イイですねイイですね！　どちらですか。王女サンですか。それとも剣士サンの方ですか？」

アリエルは目をきらきらと輝かせて悠真にすり寄ってくる。そのあまりの豹変ぶりに悠真は呆れ果ててしまった。

「お前、俺の話、全然聞いてないな」

「んもう、ちゃんと聞いてマスってば。で、どっちなんデスカ。王女サンですか。剣士サンですか」

「王女サンって、お前。さっき出てきたばっかなのに、何でセラフィとシャーロットのことまで知ってんだよ」

「それはアタリマエですよ！」アリエルは右手をにぎりしめて、ふくらんでいない胸をどんと叩く。「アリエルはユウマサンの担当なんですから。姿こそ見せてマセンが、いつもユウマサンを影ながら見守ってるんデスよ」

「影ながらって、ストーカーみたいできもいな、お前」
「そうなんですよ～。ダカラ担当になる人にいつもいつも気持ち悪がられて――て！　アリエルはストーカーじゃアリマセン！」

アリエルは翼をばたばたと羽ばたかせながら、こちらをきっとにらめつける。だが、二次元キャラにいくらすごまれても、怖さをまったく感じなかった。

悠真はふっと息を吐いた。

「最初お前を見たときは、あり得なさすぎて信じられなかったけど。……何ていうか、慣れちまうもんだな。人間っていうのは」
「は、はあ」
「今じゃあお前が出てきても、大して驚かないし。何だかんだ文句言ってたのに、結局適応しちまうんだから、嫌になるよな、ほんと」

悠真はベッドにどさりと倒れこむ。両手を枕にして天井を見上げると、アリエルが心配そうに顔をのぞきこんだ。

「ユウマサン。……その、落ちこまれてます？」
「別に、落ちこんでねーよ」
「でも……何か、いつもより元気がないみたいデスけど」

アリエルはベッドの上にお尻をつけてしゅんとしている。悠真は右手で頭をがりがりと掻いた。

「なあ」
「はい。何デスカ」
「この前、もうひとりの俺だっていうやつがあらわれて、俺をこっちの世界に連れてきた理由があるって言ってたけど、お前、何か知

ってるか？」
「へっ」アリエルは四枚の翼をたたんできょとんとする。「さあ、そういったお話は何も聞いナイデスが」
「そうか」
悠真は眉間をわずかにくもらせる。
自分よりも創造主に近い場所にいるアリエルならば、創造主の目的を知っていると思っていたが、その考えはいささか甘かったようだ。だが、他に創造主と接点を持つ者が他に存在するのだろうか。
「あの、アリエルは、ユウマサンみたいに異世界を旅する人たちを案内する、ただの案内人デスカラ、ユウマサンの旅をサポートすること以外の指令や権限は持たされていないんデス」
「……ん？　じゃあお前は、俺が異世界の扉――じゃなかったか。次元の扉を開いたって、どうやって知ったんだ？　創造主から指令が下ったから、俺の前にあらわれたんじゃないのか？」
「それはデスネ。あの日にユウマサンが次元の扉を開けるというのを、上の方から教えられたカラなんですヨ」
「上の方って、平たく言えば上司のことだろ」
「う。……ふんいきを台なしにしないようにと思って、せっかく言葉を選んでたのに」
アリエルは恨めしい目で悠真を見やる。
どうやらアリエルも創造主のことはよくわからないらしい。目的はおろか、姿かたちまでわからないとなると、彼の存在を暴くのはかなり困難なものになりそうだ。創造主などという如何わしい呼ばれ方をされているから、大したことのない偽物の神だとばかり思っていたが、予想以上に厳(いか)めしくて手ごわい相手なのかもしれない。

「モトの世界に帰りたいデスか？」
「どうだろうな。俺個人の立場で考えれば、そりゃあ帰りたいと思うんだろうけど、状況を考えるとそれはできないしな」
「王女サンと剣士サン――おっと、名前で呼ばないのは失礼でしたネ。セラフィーナサンとシャーロットサンが心配デスカ」
「ああ」悠真は身体をむくりと起こした。「セラフィは王家の問題で暗殺者から命をねらわれてるし。シャーロットだって、強がって顔には絶対出さないけど、身体のあちこちを怪我（けが）してるから、暗殺者と戦うのなんてできないんだろうし」
「ユウマサンは優しいんデスネ」

聞きながらアリエルが大きな目を潤ませる。悠真はぎくりとして身体をのけ反らせる。

「ば！　ばか！　何でお前が泣くんだよ」
「ユウマサンが意外と献身的だったノで、思わずうるうるシテしまいました」
「あっそ」

悠真は面倒くさくなり、ベッドの上に身体を倒した。

「あ、そうだ。お前さ、天使だったら回復の魔法とかってできないの？」
「ええと、天使だったらというイミがよくわかりマセンが、怪我の治療ならできますヨ」
「ほんとか！」悠真はがばっと身体を起こした。「だったらさ、シャーロットの怪我を治してくれよ。あいつ、右肩と左の脇を怪我してまともに戦えないんだ」
「ええとデスネ。あの、ヒジョウに言いにくいのですガ」アリエル

は両手の人差し指をちょんちょんとつけてもじもじする。「それは、してはいけないのデス」
「えっ、何でだよ。怪我人がいるんだから、ちょちょっとやって治してくれたっていいじゃんか」
「ユウマサンの意見はごもっともなんですが、アリエルたち次元の統括者は、担当以外のカタと不必要に干渉してはいけないと決まってるんデス」
「はあ？　何だよそれ」
「いいデスカ」

アリエルは小さい身体を起こして背筋をまっすぐに伸ばす。真剣な表情で悠真を正視する。

「アリエルたち次元の統括者は、創造主の御力により、ユウマサンがいた次元やコチラに自由に行き来することができます。創造主はすべての次元を創造されたお方デスカラ、アリエルたちは主（あるじ）の代行として、担当する次元や人を管理するために必要な力を主カラいただいているのデス」

いつにないまともな話に、悠真は思わず唾（つば）を呑む。アリエルが「それでデスネ」と言葉をつなげる。

「創造主の御力はとてつもなく大きいデスから、その御力を拝借すれば怪我を治療することはカンタンです。ですが、その強大すぎる御力を濫用（らんよう）すれば、次元――ええと、世界と言った方がしっくりきますよネ。その世界に大きな影響をあたえてしまうノデ、アリエルたちは原則としてユウマサンたちに干渉してはいけないことになっているのデス」

聞きながら、悠真は顎（あご）に手をあてて考える。悠真は創造主から刻

印術を授かった。そしてピンチになるともうひとりの悠真が心の底からあらわれ、術を駆使して敵を排除してくれる。

その圧倒的な力は禁衛師団を倒し、名うての暗殺者だったシリルを倒した。いとも簡単に。

――あの力は、確かに強力だ。

悠真の背中にぞくっと寒気が走る。あの力が濫用されたら、世界に多大な影響をあたえてしまうだろう。それを防ぎ、世界のバランスを保ちたいと考えるのは、創造主たる者の切なる願いのように思えてならない。

アリエルは肩をすぼめてもじもじする。

「アリエルは、ユウマサンの担当ですから、創造主の託（ことづけ）にしたがってユウマサンをサポートシマス。ですが、ユウマサンに関わってる方までサポートするわけにはいかないノデス。……ちょっと冷たいですが、わかってほしいデス」

「なるほど。まあ、その創造主っていうやつが、俺の想像よりもはるかにけちなやつだっていうことは、よーくわかったよ」

「け、けちだなんて暴言をハイテはイケマセン！」

アリエルは首をきょろきょろ動かしてあたふたする。悠真はベッドに寝転がり、「ち」と舌打ちした。

「だから、お前らに頼るんじゃなくて、自力で方法を探せって言いたいんだろ。だったら、刻印術で治療できる方法を探してやるよ」

「そ！　そうデスよ！　そのホウがいいデスよ。……デ、デハ、今日のアリエルはこの辺でー」

アリエルはぱたぱたと翼を羽ばたかせると、シャンデリアの下で静止する。両腕を広げて身体を発光させると、アリエルは部屋から姿を消した。

セレブな部屋に静寂がおとずれる。

「結局、俺を連れてきた目的はわからず終いか」悠真は右手でベッドの表面を殴った。「くそっ！　創造主ってのは何者なんだよ！　人の運命を好き勝手に捻じ曲げやがって」

創造主というのは、すなわち神のことだろう。全知全能の神は、人間を平等に助け、苦難から救う至善（しぜん）の存在でなければならないはずだ。

だが、アリエルの口から語られる創造主は絶対的な力を持っているけれども、ひどく独善的で自己中心的な存在のように思えてならない。

悠真がイメージしている神と創造主はそもそも別ものなのだろうか。では、創造主とは一体何者なのか。

――わからねえ。わからねえよ、俺には。

悠真は歯を食いしばりながら額の汗をぬぐった。

6

翌日、宮伯のマーカスがラネリーの宮殿にあらわれたのは、正午をすぎてからだった。禁衛師士の数名を引き連れて、厳重に警護をかためながらの登場であった。

「セラフィーナ様！　ご無事ですか！」

マーカスは宮殿に入るなり、どたどたと足音を立ててロビーを駆けまわる。セラフィを発見すると目の色を変えて彼女の両手をとった。

「セラフィーナ様。だいじょうぶですか。どこか、お怪我はございませんか」

あまりの迫力にセラフィは少し後ずさりする。

「もう、マーカスってばおおげさだよ。あたしは無事だってちゃんと伝えてあったでしょ？」

「何を悠長なことをおっしゃっているのですか！　あなた様は白昼堂々とあらわれた暗殺者にお命をねらわれたのですぞ。それも、あの悪名高き闇の使者に！　……ああ、今考えただけでも恐ろしゅうございます」

マーカスはひと言で表現すると、大臣という言葉がぴたりと一致する男であった。

髪は黄色みかかった白髪で、頭頂部がはげ上がっている。顔には皺（しわ）が目立つが、小太りの体格であるため頬はふっくらとしている。

年齢は五十代後半から六十代前半といったところだろうか。

服は、貴族服と呼べるような菫色（すみれ）の上着を着て、首もとにはうす色のアスコットタイを巻いている。その上から赤いマントを羽織り、バッチのような丸い金属でマントを留めていた。

――あれがマーカスさんか。まさに絵に描いた貴族って感じだな。

悠真はロビーの隅でマーカスを見やる。

セラフィとマーカスのまわりには、マントを羽織った禁衛師士たちが囲んでいる。神官服のようなもので身をつつみ、腰には長剣を下げている。彼らも貴族らしい服を着ていて、貴族らしくない者といえば古着を着ている悠真ひとりくらいであった。

――何ていうか、俺、すげー場違いだな。

ロビーのまん中でシャーロットがマーカスと会話をしている。話の内容は聞きとれないが、おそらく状況の説明などをしているのだろう。

仕事熱心でご苦労なこったと、悠真が他人ごとのように思っていると、シャーロットとマーカスが不意にこちらを向いた。不安になる悠真を他所に、マーカスがゆっくりとこちらに向かって歩いてきた。

「君がユウマ君かね」

「は、はい」

マーカスは人のよさそうな顔で微笑む。

「君のことはシャーロットから聞かせてもらった。見ず知らずの旅の方なのに、セラフィーナ様を暗殺者の魔の手から救っていただけたそうで」
「えっ、い、いや、俺は別に、そんな」
「われわれの替わりに尽力していただき、非常にかたじけない」
マーカスははげた頭を向けるようにして、深々と頭を下げる。あちらの世界でいう国会議員に頭を下げられて、悠真はどう反応すればよいのかわからない。
――でもシャーロットが、俺のことを……？
悠真の視線に気づいたのか、シャーロットは腕を組んでそっぽを向いた。
「勘違いするな。……師士は礼節を重んじるもの。この間はセラフィーナ様を助けてもらったという礼を貴様から受けたから、私も礼で返したまでのことだ。貴様のことを完全に認めたわけではないからな」
シャーロットは身体をぷいと背けてロビーから出ていく。その背中を見つめて、マーカスが苦笑した。
「彼女はしっかり者だが、人見知りをする子でね。部外者にはそっけない態度をとることが多いんだ。……だが、安心してくれ。彼女の言葉以上に、君は信用されているから」
「あ、はい。だいじょうぶです。ああいう風に言われるのはいつものことですから」
「そうか。それは失礼した」

マーカスは「ははは」と声を出して笑ったが、不意に口を止めて眉をくもらせる。

「セラフィーナ様はわが国にとってとても大事なお方だ。私たちはこの身を犠牲にしてセラフィーナ様を護らねばならない。だが――」

「……だが？」

悠真が言葉を続けようとすると、マーカスは突然肩をびくつかせた。

「いや、何でもない。状況をくわしく聞きたいから、これから始める会議に君も参加してもらっていいかな？」

マーカスはまた人のよさそうな笑顔で言う。その表情にはどこか翳(かげ)りがあった。

マーカスの指示のもと、悠真とセラフィとシャーロットは一階の会議室に案内された。会議室は廊下の突きあたりにあり、三十人くらいは余裕で入れるほどの大きな部屋だった。

円卓の中央にセラフィが座り、その左にマーカスが、そして右側にシャーロットが侍(じ)すように腰を降ろす。悠真はだいぶ離れて、扉に近い下座を選んで腰を降ろした。

シャーロットはしきりに「貴様はこっちに座れ」と自身の右どなりを差したが、悠真は必死に固辞した。

――あんなセレブな位置に俺みたいなパンピーが座れるかっての。

そう思いながら悠真がテーブルに肘をついていると、

「ここ、となりいいかな？」

穏和な声がかかって悠真は顔をあげた。

右どなりの椅子を引いて腰かけたのは、禁衛師士の男だった。スポーツ刈りのように短く切った髪はうすいエメラルドグリーン色で、顔は白人のように彫りが深い。

肩幅がとても広く、体格はかなりがっしりとしている。座高は悠真よりも頭半分くらい高く、長身であることをうかがわせる。まるでバレーボールやバスケットボールの選手だなと、悠真は思った。

――あれっ？　でもこの人、どっかで見たことあるような。

悠真が男の横顔を正視していると、男もこちらを向いて微笑んだ。

「ひさしぶりだね。いやあ、この間は本当に失礼なことをした」

「この間は……？」悠真が頭をフル回転させると、暗殺者に間違えられた夜の光景が記憶の底から這い上がってきた。「あ、あんた、前にシャーロットといっしょに襲ってきた、ええと、名前は……名前は」

名前を頭から引っ張り出そうとするが、キーワードが何も出てこない。夜の崖下（がいか）で彼らに囲まれた光景は鮮明に映し出されるのだが。

悠真が「うーん」とうなっていると、男は苦笑して右手を差し出した。

「私はセオドラだ。セオドラ・トワイラスという。うちのシャーロットがお世話になっている」

「あ、いえ、そんな。俺の方こそ迷惑かけてばかりで」悠真はセオドラと握手する。「俺はユウマです。ユウマ・アンドウといいます」

セオドラは顎をそっとさする。

「そうか。君はユウマ君というのか。話はシャーロットから聞いている。異国出身だが、刻印術にとても精通しているそうじゃないか」

「精通、してるのかどうかはよくわかんないですけど」

「あの日は、セラフィーナ様が妖令術をおつかいになられて、君を異国から呼び寄せたんだってね。そうとは知らずに暗殺者だと勘違いしてしまって、すまなかった」

「いいですよ。それはもう」

悠真が曖昧な返事をしていると、向かいの席に座るシャーロットが「こほん」と咳払いした。悠真とセオドラはそろって姿勢を正した。

シャーロットはテーブルに手をついてマーカスを見やった。

「ではマーカス様、セラフィーナ様はしばらく王宮へお帰りになられない方がよいのですか」

マーカスが「ああ」と浅くうなずく。

「暗殺者がまっ昼間にあらわれるなんて、だれも予想してなかった

からな。王宮の中はすごく混乱している。中になんて入れたものじゃない」
「そうですか。ではエリザベート様は、今回の騒動について何とおっしゃられてるのですか？」
「王妃は完全に白を切っているよ。何度尋ねても、私は知らないの一点張りだ」

マーカスは腕を組んでテーブルのまん中を見つめる。扉ががちゃりと開いて、トレイにコップを乗せた召使いがあらわれて、水の入ったコップをマーカスのそばに置いた。

シャーロットが手前に置かれたコップの縁（ふち）を指でなぞる。

「証拠は何もありませんから、エリザベート様は何もお答えにならないでしょうね」
「そうだな。だからやはり、あのシリルという暗殺者をとり押さえて、決定的な証拠を吐いてもらうしかない」
「しかし、シリルはあれから姿を消してしまいました。何も手がかりがないのに、シリルを探し出すのは至難の業でしょう」

シャーロットの言葉をマーカスが苦々しく呑みこむ。会議室がしんと静まり返る。

――シャーロットは、王妃の尻尾をつかみたいのか。

コップの水を飲みながら悠真は考える。

暗殺者シリルの黒幕は、おそらく王妃のエリザベートである。ならば、セラフィの暗殺を止めるために王妃の謀略（ぼうりゃく）を暴かなければならない。

エリザベートは病弱な国王コーネリアスに替わって権勢をふるっているそうだが、セラフィの暗殺を企てる決定的な証拠を突き出すことができれば、セラフィは無事に王宮に還ることができるのではないか。

悠真のとなりでがたっと音がして、セオドラが不意に立ちあがった。

「だが、悠長なことは言っていられないぞ。王宮にはセラフィーナ様の替え玉（影武者のことらしい）を用意してあるが、そんなものにだまされる王妃ではない。いつ、ここに王妃の部下たちがやってくるか、わからないんだ。それまでに何とかしなければ」

「わかってる。だからこそ、いち早くシリルを捕まえなければならないのだ」

シャーロットはコップをにぎりしめる。コップが小刻みにふるえ、水面がわずかにゆれ動く。その様子を見てセオドラがぎりぎりと歯ぎしりする。

――みんな、相当焦ってるな。て、そりゃあ焦るか。セラフィの命がねらわれてるんだもんな。

紛糾する会議室の隅で、悠真はテーブルに肘をつく。セラフィを助けてあげる方法は何かないのだろうか。

悠真は顔をあげて、セラフィの顔をそれとなく見つめる。ああでもないとうるさく議論される部屋のまん中で、セラフィは口をかたく閉ざしている。うつむいているその目が、少し潤んでいるような気がした。

7

結局、効果的な案が出ないまま会議は終了してしまった。ほとぼりが冷めるまでセラフィをかくまうしかないという、これまでの消極的な方針をつらぬくことになった。

また王宮の状況を逐一（ちくいち）知らせるために、セオドラは会議の後すぐに別荘を飛び出していった。悠真は自分もついていくと進言してみたが、セオドラとマーカスに止められてしまった。

「君がいなくなると、セラフィーナ様をお護りできる人がいなくなってしまう。気持ちは嬉しいが、君はセラフィーナ様のそばで目を光らせていてくれ」

そう告げたセオドラの表情は悲愴とある種の決意に満ちていた。

――みんな、自分が今できることを探してるんだな。俺もしっかりしないと。

師獣にまたがって空高く飛んでいくセオドラを見送り、悠真は決然とこぶしをにぎりしめる。同性で歳の近いセオドラには近くにいてほしかったが、今はわがままを言っている場合ではない。

それにしても、と悠真は思う。こちらの乗り物は主に師獣と呼ばれる大型の鷲（わし）であることが多い。鷲といっても翼開長（よくかいちょう）が五メートルはあろうかという巨大な鳥で、身体も象のように大きい。

天空の世界ならではの乗り物であるが、馬はつかわれていないのだろうか。

「馬？　馬というのは何だい、ユウマ君」

別荘の大きな門をくぐりながら馬について尋ねると、マーカスに聞き返されてしまった。またかと悠真はげんなりする。

「ええとですね。馬っていうのはあれですよ。首と足が長くて、ええと毛が茶色の動物で、その」

「はて、首と足が長いというと、ムルムルみたいな感じの動物なのかな？　ムルムルの毛並みはうすいピンク色だけど」

ムルムルというのは駝鳥（だちょう）のような鳥のことらしい。空を飛べない替わりに足が速いため、陸上用の師獣としてつかわれているそうだが、イリスの場合は飛行能力を持つ師獣をつかうのが一般的らしい。

「ユウマ君がいた国では、ムルムルみたいな陸上用の師獣をつかうのが一般的なのかな？」

「えっ、ええ。まあそうですね」

今どき馬に乗るやつなんて競馬のジョッキーぐらいしかいないよという言葉を、悠真は必死に呑みこむ。

――大臣に続き馬までないのか、こっちの世界は。あんまり変なこと言って怪しまれないように注意しないとな。

あははとつくり笑いを浮かべる悠真を見て、マーカスが足を止める。

「もし」

マーカスは悲しそうな表情で何かを言い出そうとしている。ただならない空気を感じて悠真の足も止まる。

「セラフィーナ様に、もしものことがあったら、君は――」

「君は……？」

悠真が言葉をつなげると、マーカスは慌ててかぶりをふった。

「いや――あ、そうだ。今度よかったら、その、馬という乗り物についてくわしく教えてくれないか。君のいた国のことを知っておきたいからね」

マーカスは早口で言い切ると、庭園の石畳を足早に駆けていった。

悠真は庭園のまん中に伸びる石畳を歩きながら、胸の前でそっと腕を組む。先ほどのマーカスの憂(うれ)えた表情が気になってしまう。

「会議の前でもそうだったけど、マーカスさんは俺に何を言おうとしてるんだ？」

悠真は目をつむって考える。マーカスはセラフィのことで何を伝えようとしているのか。それとも、相談しようとしていたのか。

「でも、相談するんだったら何も知らない俺より、部下のシャーロットやセオドラさんにした方がいいよな。あの人たちの方がこっちの世界にくわしいし、王宮のこともよくわかってるんだから」

悠真は足を止めて、「うーん」と声に出しながら考える。マーカスの表情や言葉から推測してみるが、彼の人となりがわからないため何も答えが浮かんでこない。

「だめだ。今日初めて会った人のことなんて俺にはわからねーよ」

だからこそ余計に怪しいのだと悠真は思う。マーカスは今日初めて会った悠真に何を伝えたいのか。彼は穏和だが、それほどオープンな性格だとは思えない。

――俺があちらの出身だから、なのか？

スラックスのポケットに手をつっこみながら歩いていると、左手に大きな噴水が見えた。噴水は空に向かって水を勢いよく出している。放出された水が左右に分かれて、丸めのMの字を描いていた。

噴水に向かい合うように設置されているベンチにセラフィの姿があった。シャーロットや他の従者を連れず、ひとりでしょんぼりとしている。

「おーい」悠真が声をかけるとセラフィはすぐに気づいて顔をあげた。

「ユウマ」

「そんなとこにひとりでいたら危ないぞ。命をねらわれてる身なんだから」

「う、うん。そうだよね」

セラフィは力なくこたえると、悄然と顔をうつむかせる。地面の一点をずっと見つめているだけで、口を開こうとしない。

気まずい空気がじんわりと流れる。

――この前うそついちゃったこと、まだ気にしてるのかなあ。

悠真の脳裏にセラフィの怒った顔が思い浮かぶ。ここは何と切り出すべきなのか困ったが、悠真は意を決してセラフィのとなりに座った。

「その、ごめん！」悠真はセラフィに身体を向けて、両手を顔の前でばちんと合わせた。セラフィが驚いてふり向く。「ど、どうしたの？　ユウマ」

「どうしたのって、怒ってるんだろ。この前、俺がうそついちゃったから」

「えっ、あ――」セラフィは言葉の意味に気づいて、くすりと笑った。「そのことだったら、もういいよ。だって、あたしがユウマの気持ちを考えないで、ずけずけと聞こうとしたから悪かったんだもん」

「あ。……そ、そうなの？」

「ふふっ。今のユウマ、すっごい変な顔してるよ」

セラフィはベンチに両手をついて、にこにこといつもの笑顔を向けてくれる。悠真は慌てて視線をそらして、「いやあ、それほどでもあるけど」と頭の後ろをなでた。

「あたしこそ、ごめんね。嫌な思いさせちゃって。答えづらいことは無理に答えてくれなくてもいいから」

「あ、ああ。……でも、俺の方も、悪かったっていうか、何ていうか」

セラフィに直視されると、なぜか言葉がうまく出てこなくなって

しまう。相手がシャーロットやアリエルだとこうならないのに、どうしてなのだろうか。

――何やってんだ。しっかりしゃべれよ！　俺。

顔が熱くなっているのを感じて、悠真ははっと顔をうつむかせる。

「その、俺。セラフィの召喚術でこっちに呼び出されたけど、何かその、別のやつもからんでるみたいでさ。それで、刻印術もそいつのせいでつかえるようになっちゃったんだ――って、これじゃあ言ってること意味わからないよな」

セラフィは胸に手をあてて、じっと悠真を見つめている。悠真はごくりと固唾（かたず）を呑む。

「実は、俺も、自分の置かれてる状況がよくわからないんだ。いきなり時間が止まって妖精みたいなやつがあらわれるし、もうひとりの俺だっていうやつも出てくるし。シリルを倒したときだって、身体が勝手に動いて攻撃をよけたりするし。……でも、そいつらの正体とか全部わかったら、俺のことはつつみ隠さず話すから。だから、そのときまで待っててくれ」

「うん。わかった」

セラフィは真剣な表情でこくりとうなずく。ふたつ返事で納得してもらえるとは思っていなかったため、悠真は「えっ」と変な声を出してしまった。

「いいのか？　こんなわけわからない説明で。これじゃあ、でたらめなこと言ってるのと変わらないんだぞ」

「うん。……その、言ってることはよくわからなかったけど。でも、

あたしのために真剣に話してくれてるっていうの、すごい伝わってきたから」
「あっ、そっか」
悠真は次の言葉がなくなり、右手の人差し指で頬を掻く。妙なことをしゃべって過分に怪しまれると思っていたため、何だか拍子抜けしてしまう。
セラフィは噴水に身体を向けると、また悄然と顔をうつむかせる。膝の上に両手を置き、何かを我慢しているような表情で口を堅く閉ざしている。
それはまるで、親や学校の先生から叱られた生徒のようだった。
――落ちこんでるのは、俺のせいじゃないのか。
悠真がベンチの背もたれに寄りかかる。
「何か、落ちこんでんの？」
そう切り出すとセラフィが驚いて顔をあげた。
「落ちこんでるように、見える？」
「うん。まあ、何となく」
セラフィは口に手をあてて苦笑した。
「ごめんね。いつも余計な心配ばかりかけちゃって」
「それはいいよ、別に。で、何かあったの？」
「うん。その……今日の会議、すごいもめてたね」

セラフィはまたうつむいてもじもじする。

「あたし、会議って今日参加したのが初めてだったんだけど、会議っていつもあんな感じなのかな」

「さあ。俺も初めてだったから、よくわかんないけど」

「シャロも、マーカスもいつもの優しい感じじゃなくて、すごくぴりぴりしてた。みんな、あたしの前だといつもにこにこしてくれてたけど、本当はすごく怖い顔しながらお仕事してたんだね」

「でも、それはセラフィを助けようと思って――」

「わかってる！　……わかってるの、それは」

セラフィの肩が小刻みにふるえる。

「みんながあたしのために一生懸命になってくれてるのはわかるの。……でも、そうじゃないの。あたしが本当に望んでるのは」

「じゃあ、どうすれば」

「あたしは、みんなと仲良くできれば、それでいいの。お父様もお母様も、シャロもマーカスも、エリザベートのお義母様とも、みんなといつも仲良くおしゃべりしてるだけでいいのに。……でも、うまくいかなくて。あたしのせいで、いつも王宮で問題起きてばっかりで」

悠真の胸が両脇から閉めつけられる。

「王位なんて、あたしは別にどうでもいいの。だって、あたしがお父様みたいになるのなんて想像つかないし、お母様みたいな立派なお嫁さんにだってなれないし。……みんなの迷惑になるくらいだったら、王位なんてなくなっちゃった方がいいもん」

初めて聞く悩みだった。セラフィはエレオノーラの王女で、シャーロットやマーカスのような偉そうな人間よりも位が高いのだから、生まれや身分にきっと満足しているのだろうと悠真は思っていた。

王になりたくないという気持ちは、悠真にはよくわからない。一国の主になれば毎日が贅沢三昧なのだろうし、何でも自分の思い通りにできるのだから、万々歳ではないか。

――でも、そうじゃないんだよな、きっと。

庶民的な感覚しかもてない自分の考えを悠真は恨めしく思った。

セラフィは膝の上で指を遊ばせる。

「あたしのお母様は身体が弱かったから、子供があたししかいなくてずっと辛そうだった。エレオノーラの王位を継ぐ条件は優秀な妖令師であることだけど、女の子が王位を継いだことは今までに一度もないから、お母様はお父様にいつも責められてた」

「うん」

「王宮の人たちも、お母様のことを陰で文句言ってた。次の王様はだれにするんだって。王宮の人たちみんなが集まる式典の最中に、お母様のことを悪く言う妾（めかけ）の人だっていたし。……でも、お母様はあたしのこと一度も責めなかった」

セラフィは顔をあげて悠真に微笑む。翳のある、とても寂しそうな笑顔だった。

「お母様は、あなたは妖令術が上手なのねって、いつも嬉しそうにあたしの頭をなでてくれた。本当は、あたしが男の子だったらよかったのにって、何度も思ってたはずなのに」

「それは――」
「ごめんね。あたし、さっきから暗いことしゃべってばっかりで。だからきっと、友達できないんだよね」
「そ、そんなことないって」

がばっと起き上がる悠真を見て、セラフィはくすりと笑う。肩の力を落として、セラフィは空を見上げた。

「ユウマはいいよね。男の子で。……あたしも、普通の男の子で生まれたかったなあ」

それでなのかと、悠真は思った。セラフィが実母(じつぼ)のアンジェリーナを心から慕っていたのは。高度な妖令術を習得し、シャーロットやマーカスから心服されていたのは。

セラフィの横顔を見ながら悠真は愕然とする。彼女はこれまで、悠真が決して感じたことのない精神的な苦痛をずっと受け続けてきたに違いない。

早くから母をなくし、王族という重圧にずっとひとりで耐え続けている。そして今は暗殺の恐怖にさらされて、王位争奪の権謀に翻弄(ろう)されている。なんて不幸な生き方なのだろうか。

――それにくらべて俺はなんだ。

異世界につれられて、それなりの苦労を重ねてきたつもりではあるけれど、それをセラフィに語ることはできない。生まれてこなければよかったと思っている子に、どんな言葉をかければよいのかわからない。

創造主から絶大な力をあたえられているはずなのに、セラフィを助けてあげることができない。悠真は無力な自分が許せなかった。

「何ていうか、選べねえもんだよな。こっちの世界でも、あっちの世界でもさ」

悠真はそっと息を吐いた。

「俺はあっちの世界にいたとき、学校生活に楽しみが感じられなくて、ここみたいに魔法の力が存在する異世界に行きたいって、何度も思ってた」

セラフィが泣き出しそうな顔で悠真を見上げる。

「でも俺が望んでたのは、こんな辛い世界じゃない。セラフィやみんなと仲良くなって、世界を破滅させる魔王を倒すことを口実にして、ただ、わいわい騒いでみたかっただけなんだ」

悠真は背中を丸めて顔をうつむかせる。足もとにぺらぺら嫁菜(よめな)のような小さな花が咲いていた。

「俺は平民の生まれだから、王様や貴族の息子とかに生まれたかったなーって思ったことあるけど、王様になるのってすげー大変なんだな。全然知らなかったよ」

「ユウマ」

「どこかにさ、俺らの運命を決めてるやつがいたら、言ってやりてえよな。もうちょっと俺らの気持ちを汲(く)んでくれよってな」

創造主がすべての次元を創造したのだとしたら、悠真やセラフィの運命も彼がつくり出したのかもしれない。人の気持ちを考えずに

好き勝手に運命を弄ぶなんて、それが神の行いなのだろうか。神は人を幸福へと導く存在なのではなかったのか。

悠真は頬を掻いた。

「なんてな。俺みたいな普通人生しか歩んでないやつじゃ、これぐらいしか言えねえや。ごめん」

「ううん」セラフィは笑顔でかぶりをふった。「ユウマが話聞いてくれたから、ちょっと気分が落ち着いてきたよ」

「ほんとかよ。無理に合わせてくれなくったっていいんだぜ。むしろ、『何くせえこと言ってんだよ！　この妄想ヤロー』ぐらいに罵ってくれた方が――」

「ほんとだよ」

セラフィは両手を膝の上に置いて悠真をまっすぐに見上げる。その表情は不安や翳りが消えて、どこか安心しきっている。嬉しそうだけど、いつもより控えめに微笑む表情がとても可愛らしい。

悠真は慌てて背中を向ける。

「ま、まあ、話くらいなら聞いてやるから、その、あんまりひとりで悩むなよな。お前のまわりには、俺とか、シャーロットとかもいるんだからさ。と、友達に、水くさいことすんなよな」

「うん。……ありがとう、ユウマ」

セラフィのまっすぐな言葉がとてもくすぐったい。顔から火が出そうなくらいに照れくさいが、こういうのも悪くないかなと悠真は思った。

8

翌日、悠真が一階の食卓に降りるとセラフィが朝食をとっていた。

「ああ！　ユウマ、おはよう」

「あ、ああ。おはようっス」

がたっと席を立つセラフィの対面の椅子に腰かける。テーブルの上にはボールのような底の深い器が置かれて、ドレッシングで味つけされたレタスが山のように盛られている。となりには肉料理や、湖で獲れたと思われる魚の煮物までならべられていた。

――朝からすげー豪勢だよな。いつも思うけど。

広いテーブルの上に置かれた料理の数々をながめて、悠真はため息をついた。

「俺、朝からこんなに食えねーよ」

「そうだよね。あたしだってこんなにたくさん食べられないんだから、いっぱいつくらなくていいって言ってるのに。マーカスってば」

セラフィは両手で食パンを持ちながら、頬をぶすっとふくらませる。機嫌が悪くなると頬をふくらませるのが癖なのかなと、悠真は見ていて思った。

食パンにバターを塗りながら、悠真はそれとなくあたりを見わたす。食卓には自分とセラフィの姿しか見えない。

「あれ、そういえばシャーロットは？」

「シャロはねえ、用事があるみたいだから、朝早くから出かけちゃったよ」
「用事？」
「うん。何か、湖の調査がどうのこうのって、マーカスが頼んだみたいだけど」

セラフィは首をかしげながら天井を見上げる。「うーんとね」と内容を想像している姿は何だか微笑ましい。

――シャーロットもまあ、色々大変なんだなあ。怪我まだ治ってないっていうのに。

ぼんやりと考えながら食パンをかじっていると、戸口ががちゃりと開いてマーカスが部屋に入ってきた。

「ああ、ユウマさん。おはようございます」
「あ、おはようございます」
「昨日はよく眠れましたか？」
「えっと、はい。お陰さまで」

マーカスはセラフィのとなりに座り、手をぱたぱたと動かす。ふっくらとした頬や額は大量の汗で濡れている。

「それにしても、今日は暑いですね」
「そうすか？　そんなに暑くないと思いますけど」

マーカスは召使いを口荒く呼び出して窓を開けさせる。差し出されたタオルで顔をごしごしと拭いた後も、きょろきょろとあたりを見わたしている。どこかそわそわとしていて落ち着きがない。

――この人、何でこんなに汗かいてるんだ？

悠真は開けられた窓を見やる。外から流れる微風（そよかぜ）がカーテンをゆらゆらと揺らしている。天気はいいが風があるため、それほど暑いとは思わない。

「と、ところで、セラフィーナ様」マーカスは指でテーブルをとんとんと叩きながら言った。「いつも宮殿の中にいたら、その、暇ではないですか？」

セラフィはミルクの入ったカップを置いて少し考える。

「暇だと言えば暇かな。でも、あたしは部屋の中でじっとしてなきゃなんでしょ？」

「ええ、まあそうなのですが。……部屋に毎日こもられていると、お気を病んでしまうのではないかと心配なんですよ」

「そっか。でも、あたしは別にだいじょうぶだけど。……ユウマがお外に行きたいって言うのならあたしも行こうかな」

「えっ、俺？」

不意に呼び出されて悠真の肩がひとりでに反応する。昨日に悩みを打ち明けられてから、セラフィにはかなり信頼されたようで、とても歯がゆい思いがする悠真であった。

「えっと」

悠真は目を逸らして頬を掻く。インドア派の悠真としては、部屋の中に閉じこもるのはそれほど苦痛ではないが（むしろ嬉しいが）、ここはやはりアクティブな姿を見せておいた方がよいのだろうか。

悠真の姿を見てセラフィがきゃははと声を出して笑う。

「あ、ユウマ困ってる」
「う、うるせえな！」
「ふふっ。ユウマって、困るといつも頬を掻くよね」
「うっせえな。お、お前だって、機嫌悪くなると頬をふくらますじゃねえか。こうやってよ」

悠真がセラフィのまねをすると、セラフィが「そんなことしないもん！」と言って頬をぷくりとふくらませた。悠真が「ほら」とすかさず突っこみを入れると、セラフィにからまれてしまった。

悠真とセラフィの間でマーカスがおろおろする。

「で、あの、ユウマさん。どうします？」
「えっ、あ、はい。えっと、行きます」

悠真はマーカスに従い、宮殿を後にする。駝鳥（だちょう）のような師獣（しじゅう）のムルムルにまたがり、湖畔に広がる森の中へと足を踏み入れる。

手づなをにぎりながら、悠真はまわりをそっと見わたす。となりではセラフィが「るんるん」と鼻歌を歌いながらムルムルの背に乗っている。そのまわりを数人の従者が厳重にとり囲んでいる。だれもが腰に長剣をたずさえて、いつでも戦闘できる体勢である。

――外出するって、こういうことだったのね。

従者たちの厳しい表情を見て悠真はげんなりする。少し想像をはたらかせればこうなることはわかったはずだが、そこまで深く考えられない自分の頭を恨めしく思った。

「ああ、セラフィーナ様。あちらです」

そう言ってマーカスが指差したのは、森を散策してしばらく経ってからだった。湖畔に面したその場所は、鬱蒼（うっそう）と生える草木が開けて明るくなっている。広場のまわりにはベンチが置かれて、田舎の公園のようだった。

「へえ。けっこういいとこじゃん」

悠真はムルムルから降りて、湖の畔にしゃがみこむ。湖面は穏やかで静かに波音を立てている。あちらの世界でいうところの、マイナスイオンやら何やらが発生しているのではないかと、悠真は柄になく思った。

セラフィが悠真のとなりに来てくすくすと笑う。

「ユウマはいつもご機嫌ななめさんだから、たまにはこういうところに来なきゃだよ」

「うるせー」

後ろでムルムルに乗りながらマーカスが「ははは」と笑った。

「ではユウマさん。われわれは用事がありますので少し離れますが、セラフィーナ様をくれぐれもよろしくお願いしますぞ」

「あ、はい」

マーカスと従者たちはくるりと背を向けて畔を後にする。

――平気かな。俺とセラフィのふたりだけで。

マーカスたちの後ろ姿をぼんやりとながめながら、悠真ははっとわれに返った。

――ていうか、何気にセラフィとふたりっきりじゃんか。

セラフィは悠真の視線に気づいて、「なあに？」と首をかしげる。悠真はあわてて背を向ける。

――いかん。このシチュエーションは、何かやばい。

背中からだらだらと冷や汗が吹き出す。こんな姿をセラフィに見られたら、きっと気持ち悪がられるに違いない。

「いいか、平常心だ。平常心だぞ、俺」

「どうしたの？　ユウマ。挙動不審だよ」

悠真はセラフィを見ないように、湖の畔を見やる。畔は右まわりのゆるやかなカーブを描いており、湖から五メートルくらい離れた位置に草木が茂っている。畔は小さな浜のようになっていて、流木がいくつか転がっている。

青と緑と白い砂が織り成す自然の景色――そこで、悠真は妙な違和感を覚えた。

――あ、あれは。

畔に生えている木の幹のすき間――悠真と三十メートルくらい離れた位置に黒い何かが生えていた。それは黒装束のような衣装に身をつつみ、顔の上部――すなわち頭から鼻までを銀色の仮面で隠している。中世の貴族が仮装パーティでつかうようなおしゃれな仮面だった。

仮面の男の背はかなり高いように見受けられる。距離がだいぶ離れているため、正確な身長は視認できないが、顔の大きさから判断すると百八十センチくらいはあるのではないだろうか。

仮面の男はじっと身じろぎせずに顔をこちらに向けている。本当の影のように、または置物のようにぴくりとも動かない。生きているのか死んでいるのかもわからない得体の知れなさが、何とも気味悪い。

高揚していた悠真の気持ちが恐怖と焦燥に変わっていく。

――全身黒の服って、まさか。

悠真が後ずさりをするのとほぼ同時に、仮面の男が右手をそっとあげた。彼の後ろから大きな影がのっそりとあらわれる。その数――三体。

悠真の心臓がはち切れんばかりに暴れ出す。

「ユウマ、どうし――」

「セラフィ！　逃げろ！」

悠真はセラフィの手を乱暴に引っ張り、後ろに向けて駆け出した。

9

悠真はセラフィの手をにぎりしめたまま、ごくりと息を呑んだ。

悠真とセラフィを囲む三匹の妖（あやかし）――その姿はまさにＲＰＧに出てくるモンスターと呼ぶのにふさわしい、異形の生物だった。

顔は漆黒の毛に覆われた丸い形で、梟（ふくろう）に似ている。だが嘴（くちばし）は真紅で、銀色の目玉が左右にふたつずつ、四つの目がぎょろりと動いている。

身体は犬や狼のように体毛で覆われているが、四肢と尻尾は緑色の鱗（うろこ）でできており、まるで蜥蜴（とかげ）のようである。また梟のような顔に反して翼は生えていない。

「な、何なんだよ、こいつら」

悠真の足がひとりでにふるえる。ＲＰＧでいえばキメラに相当する合成獣だが、梟と狼と蜥蜴を合成させた生物など、悠真は見たことがない。

セラフィが後ろから悠真の左腕をつかむ。

「ユウマ。この子たち、幻妖だよ」

セラフィの声がふるえている。

「げ、幻妖？　こいつらが」

「うん。……あたしも、本でしか見たことないけど、多分、アムラ

ウっていう子たちだと思う」

三匹のアムラウは紅い嘴を開いて、鈴虫（すずむし）のような鳴き声を発する。銀色の目は血走り、興奮しているのか充血している。

――こんなやつら、どうやって相手すればいいんだ。

動揺する悠真の後ろからアムラウが飛びかかってきた。ふりあげた前肢が二の腕をかすり、制服のカッターシャツをやぶる。

残りの二匹も嘴を大きく開けて悠真に飛びかかる。悠真はセラフィの手を引いて、森の道をひた走る。

その後を三匹のアムラウが猛然と襲いかかる。金切り声のような甲高い声を発しながら。

「ちょっと待てよ！　こんなん、冗談じゃねえぞおオオ！」

悠真は腕を高速でふりながら森を全力疾走する。これまでの体育の授業で出したことのないような速度で走っているが、悠真はまったく気づかない。

――ていうか、さっさととんずらしないとガチでやばいっての！

「ユ、ユウマ、ちょっ――」

悠真の左手からセラフィの手が突然離れる。悠真がはっと後ろをふり返ると、セラフィは足をくじいて地面に倒れていた。

――しまった！

猛然と疾走してくる三匹のアムラウが大きく跳躍する。鋭利な鉤爪のついた前肢をふりあげて、セラフィの背中に飛びこむ。

「くっそがあアアア！」

悠真は身体をかがめてセラフィにヘッドスライディングをする。アムラウが着地するよりも早くセラフィの背中に覆いかぶさり、彼女の身体を素早く抱きかかえる。身体を横に旋回させて地面をごろごろと転がり、アムラウの飛び込みをかろうじてかわす。

三匹のアムラウは互いの頭をぶつけて地面にうずくまる。悠真は急いで立ち上がり、セラフィの身体を起こした。

「ご、ごめん。だいじょうぶか？」

「うん。あたしはだいじょうぶ」

悠真はセラフィの肩をつかんで顔をまじまじと見つめる。彼女の鼻の頭と頬が土で汚れているが、擦りむいた痕は見あたらない。胸もとや腰のあたりにも土が付着していたが、怪我はしていないようだった。

しばらく昏睡していた三匹のアムラウが、むくりと起き上がる。四つの目をぐるぐるとまわして標的を悠真とセラフィに合わせる。

――こいつらは第二王妃が放った刺客なんだ。

悠真は拳をにぎりしめてセラフィを後ろに隠す。セラフィが「ちょっと、ユウマ」と声をあげた。

「セラフィ。ここは俺が囮になるから、お前だけでも逃げてくれ」
「だ、だめだよ！　そんなの」セラフィが悠真の背中を引っ張る。
「あたしだけなんてだめ！　ユウマもいっしょに逃げるの！」
「バカヤロー！　ふたりで逃げたら、みすみすあいつらの餌食になっちまうだろうが。……あいつらの狙いはお前なんだ。第二王妃のうす汚え浅知恵をぶち壊すためには、お前は絶対に死んじゃいけないんだよ！」

悠真は右手でセラフィの胸をどんと押し出す。セラフィが「きゃっ！」と声を出して尻もちをつく。

――いくら自分の子供を王位につかせたいからって、許されるのかよ。こんなことが。

十四歳の女の子を得体の知れない化け物に襲わせている。王位継承の妨げになるからという理由で。彼女の存在が邪魔だから。

――こんなの、ただの人殺しじゃないか。

王位継承というオブラートをとり払えば、目の前で繰り広げられていることはただの殺戮（さつりく）行為でしかありえない。いや、王位継承だとか、社会的な事情の有無なんてそもそも関係ないのだ。

アムラウたちが気持ちの悪い声を発して飛びかかってくる。鋭く尖った爪を光らせて、悠真の正面に襲いかかる。

――許せねえ！

悠真の瞳が真紅に変わる。全身の毛がざわざわとゆれ動き、手足がひとりでに動き始める。

悠真の身体は腰をすっと落とし、飛びかかってきた一匹目のアムラウを正面で受け止める。重い身体をふりまわして二匹目を叩き落し、三匹目は顔面に強烈な蹴りを食らわせた。

一匹目のアムラウを投げ捨てる後ろで、セラフィが悠真を見上げる。

「ユ、ユウマ」

「何してんだ！　早く逃げろっつったろ！」

悠真の前で一匹のアムラウが起き上がり、嘴をもごもごと動かす。前肢をついて上体を低くし、燃え盛る火炎を吐き出した。

――こいつ、炎まで吹きやがるのかよ！

火炎放射器で放射されたような炎が迫る。悠真は上体を下げて素早く左に逃れる。地面を蹴って前へと鋭く跳び、炎を吹いたアムラウの横顔を蹴り飛ばす。

別のアムラウが横合いから飛びかかってきた。悠真の身体は地面に仰向けに倒れて攻撃をかわし、アムラウが真上にさしかかったタイミングで両足を突き上げる。蹴りがアムラウの腹を抉り、身体を宙に突き上げた。

三体目のアムラウは刻印術で吹き飛ばす。地面に倒れたアムラウの首根っこをつかみ、身体を地面に押しつける。悠真の身体が右腕をふり下ろし、アムラウの長い爪の一本を砕いた。

悠真は砕いた爪を持ち、アムラウの背中に描かれている刻印に突

き刺す。絶叫するアムラウには目も暮れず、傷をぐちゃぐちゃに抉って刻印を消し潰す。アムラウは赤い光を放ち、ただの土くれに還った。

怯える二匹のアムラウに悠真が飛びかかる。右手を手刀にしてアムラウの刻印を消し、次々と熄滅(そくめつ)させていく。その姿はまるで機械のようだった。

10

「幻妖に襲われただと！？」

湖の調査から帰ってきたシャーロットは開口一番にそう言い放った。テーブルをどんと叩いて立ち上がり、対面に座る悠真をにらみつける。

「貴様がついていながら何たる様だ！　外に出れば敵にねらわれやすくなることなど、考えなくてもわかるだろうが。それを貴様は――」

「シャロ！」

セラフィに叫ばれてシャーロットはすぐに口を噤(つぐ)んだ。

「お外に出ようって言ったのはあたしなんだから、ユウマは何も悪くないの。そうやって、何でもかんでもユウマのせいにしないで！」

顔を赤く染めるセラフィを見て、シャーロットはあわてて後ずさりする。片膝を立ててその場にうずくまり、セラフィに深々と頭を下げた。

「セラフィーナ様。何も知らずに血気に逸り、見苦しい姿をさらしてしまいました。申しわけありません」

「ほんとだよ。何かあるといつもユウマを目の敵(かたき)にして。シャロの悪い癖だよ」

「は。申しわけありません」

シャーロットは肩をがっくりと落として席につく。やってしまっ

たという慙悔(ざんかい)が表情ににじみ出ていて、先ほどまでの強気な姿は見る影もない。

だが、そんな姿を見ても嬉しくはなかった。

――シャーロットの言う通りだ。

悠真は「ふ」と息を吐いた。

「俺はどうかしてたんだよな。きっと。……外に出れば襲われることなんて、わかってたはずなのに」

「ユウマ」

セラフィが悠真を申しわけなさそうに見つめる。そもそもセラフィが外出しようと言い出したわけではないのだから、セラフィが謝る必要はないのになと悠真は思う。

悠真は頭をわしわしと掻いた。

「わりい。俺、ちょっと頭冷してくるわ。打ち合わせとかあるんだったら、俺抜きで進めててくれ」

悠真は部屋の扉を閉めてベッドに寝転がった。ベッドのやわらかい感触に身体をあずけると、身体の疲れがどっと押し寄せてくる。

――何やってるんだかな。

ベッドの上でごろんと寝返りを打つ。両手を枕にして、悠真は天井を見上げた。

自分の責任でなかったとしても、セラフィをみすみす危険な目に合わせてしまったのは、自分にも落ち度があったと思う。外に出ない方がいいことなんて、当然わかっていたはずなのに。

「はあ、はげしくネガだな、俺。こんなんだからきっと、シャーロットに目つけられるんだろうなあ」

天井のシャンデリアをながめながら、悠真はため息をつく。思い浮かぶことは後悔の念や心配ごとばかり。楽しいことはあまり浮かんでこない。

こちらの世界に来てから、思考がかなりネガティブになっているような気がする。あちらの世界にいたときは、もう少し前向きだったのではないかと悠真は思う。

――だったら異世界に行きたいとは思わないか。

悠真は身体を横に傾ける。人気（ひとけ）のない部屋は耳が痛くなるほど静かだった。

「まあ、どうでもいいか。そんなこと」

それから夜まで悠真は部屋の中で過ごした。途中でセラフィが様子を見にきたり、給仕（きゅうじ）係が夕食を運んできたが、すべて追い返してしまった。精神的な疲れを感じているためなのか、人に会う気分にはなれなかった。

今日はこのまま寝るかと悠真がベッドの上でごろごろしていると、とんとんと扉をノックする音が聞こえた。悠真は面倒だなと思いながら重い身体を起こした。

「すいませんけど、夕飯だったら――」

「私だ」

毅然とした声が扉の向こうから聞こえて、シャーロットが入室してきた。悠真の眉間がぴくりと動く。

「何か用かよ」

「別に。暇だったから、様子を少し見にきただけだ」

「あっそ」

いつものつれない返答を聞いて、悠真はベッドに寝転がる。セラフィと違い、シャーロットと話すことは何もないため、悠真は目を閉じて寝たふりをする。

しばらく沈黙が流れて、シャーロットが「はあ」と息を吐いた。

「というのはうそだ。先ほどの無礼を謝ろうと思ってきたのだ」

「は？」

悠真は驚いてベッドから起き上がる。シャーロットは腕を組んで上から悠真を見下ろす。

「勘違いするなよ。セラフィーナ様のために貴様にはここにいてもらわねば困るから、仕方なく頭を下げてやるのだ」

「そのわりにはずいぶん偉そうだな、おい」

悠真の唇がひくひくと反応する。頭を下げると言っているわりに、シャーロットは身じろぎひとつしないのだから腹が立つ。

悠真の怒気をふくんだ視線には見向きもせず、シャーロットは机から椅子を引き出して腰かける。右足をあげて足を組む姿は、日本のＯＬのように見えなくない。

――見た目はまあ、悪くないんだけどな。性格が、性格がドブスなんだよ。こいつは。

シャーロットの艶（なま）めかしい足をちらちらと見やりながら悠真は思う。長身でグラマラスな金髪女性である彼女は好みのどまん中だが、そうとは断じて認めたくない。

シャーロットがまた深いため息をついた。

「とは言うものの、正直、貴様がいてくれて助かってる。今の私ではセラフィーナ様をお護りすることができないからな」

「ふーん。だから、わざわざ謝りに来て俺を懐柔（かいじゅう）しようってのか？別に、そんなことしなくたって俺は逃げないから安心しなよ」

悠真はベッドの上であぐらをかく。シャーロットの言葉にはどこかに棘（とげ）がふくまれていて、素直に聞く気になれない。

――俺はそんな無責任なやつじゃねえっつーの。ほんとこいつ、腹立つな。

悠真が膝の上に頬杖をついて悪態をついていると、

「だめだな、私は」そう言ってシャーロットは肘を机について頭を

かかえた。「つまらん格好ばかり気にするから、いつも肝心な言葉が出てこないんだ」

突然の言葉に悠真は顔をあげた。

「えっ、何？」

「私はこんなことを言いに来たのではない。私は、セラフィーナ様のことを、貴様にお願いしにきたのだ」

「お願い……？」

シャーロットが足組みを解いて身体を起こす。

「貴様はもうわかってるかもしれんが、セラフィーナ様はわが国の王女として生まれ、その責務をご立派に果たされてきた。いつも明るく気丈にふるまわれているが、禁衛師士の私などでは想像つかない重圧や孤独をひしひしと感じておられるはずなのだ」

重い口を開くシャーロットを悠真はまじまじと見つめる。シャーロットが視線に気づいて、「こほん」と咳払いする。

「セラフィーナ様は今後のわが国を統べるお方だ。ゆえに、対等に話をすることができる人間は限られている。本来ならば、私や貴様などが食事をごいっしょすることなどありえないのだからな」

「そういうものなのか、やっぱり」

「あたり前だ。貴様はセラフィーナ様をどなただと心得ているのだ。あのお方は国王陛下の次に偉い方なのだぞ。……セラフィーナ様が号令を下されれば、貴様など簡単に奈落に突き落とされるのだからな」

悠真の背中にぞくっと鳥肌が立つ。身分社会というのはいまいち

実感がわかないが、こちらの世界では身分の高い王や貴族の存在は絶対なのだ。民衆のひとりにすぎない悠真とセラフィの差は、天と地ほどの開きがあるのだ。

――そうだ。こっちの世界は江戸時代とかと同じだったんだ。だからシャーロットはセラフィに完全に服従してるのか。頭があがらないとか、そんな単純な話じゃないんだ。

俺はばかだと、悠真は思った。あちらの世界の感覚で身分をわきまえないのだから、シャーロットが悠真に対して怒るのは当然なのである。主(あるじ)を侮辱しているのと同じなのだから。

シャーロットは肘をついて顔をうつむかせる。

「だが、セラフィーナ様はそういった堅い考えがあまりお好きではない。民衆にわけ隔てなく接しておられたアンジェリーナ様の思想を受け継がれたからなのか、われわれ下々の人間に対してとても暖かい感情をもっておられる。……お若いのに、よくできたお方だ」

言いながらシャーロットは頬をゆるめる。

「私が禁衛師団に入団したとき、セラフィーナ様はすぐにお声をかけて下さった。それも友達になってほしいと、とてももったいないお言葉をかけて下さったのだ。勿論、私などがお友達になれる資格はないから、丁重(ていちょう)にお断りしたが」

シャーロットは嬉しそうに頬を少し赤く染める。昼間にはセラフィに怒られたというのに、そんなことは微塵(みじん)も気にかけていないようだった。

――この人はほんとにセラフィのことが好きなんだなあ。

シャーロットを見ながら悠真は苦笑する。彼女のセラフィに対する好意があまりにも明け透けで笑えてしまう。彼女の好きが忠誠心なのか、または恋愛感情なのかはわからないが。

「だが」シャーロットは途端に眉をひそめた。「セラフィーナ様があそこでお声をかけて下さったのは、ただの気まぐれではなかったのだ」

「というと？」

「三年前にアンジェリーナ様がお亡くなりになられてから、セラフィーナ様の心を支える方がいなくなってしまった。国王陛下は非常に厳格なお方であるし、エリザベート様やエドワーズ様とも、親しくされるのは難しいのだろうし」

「かといって、あんたやマーカスさんたちじゃあセラフィは頭が高いから、親しくすることはできないってわけか」

それでなのかと、悠真は思った。セラフィがしきりに、友達になってほしいと言っていたのは。自分が嫌われ者だからではなかったのだ。

――何て面倒くさいルールなんだ。身分っていうのは。

身分が違うから対等に話をすることができない。身分というと民衆など下の人間が苦労するというイメージがつきやすいが、それだけではないのだと悠真は思った。

シャーロットは姿勢を正して悠真を見やる。

「セラフィーナ様はとても寂しいお方だ。お優しい方なのに、数え

きれないほどの悩みや苦痛をだれにも打ち明けることができずに苦しんでおられる。できることならば私が力添えしたいが、そんな差し出がましいことはできない。……だが貴様は違う。異国から来た貴様はセラフィーナ様と対等に話をし、セラフィーナ様はそれをとても喜んでおられる。今日は幻妖からセラフィーナ様を救ってもらい、多分に苦労をかけているが、これからもずっとセラフィーナ様のそばにいてほしい。それが配下である私の願いだ」

どすんと重いものが悠真の胸のまん中に圧しかかる。気難しいシャーロットから信頼を得たが、これは諸刃の剣なのだと悠真は思った。裏切ることは絶対に許されない、もし裏切れば、シャーロットは何の迷いもなく悠真を斬り捨てるのだろう。

「それから」シャーロットは腰に差している剣を鞘(さや)ごと抜いて悠真に差し出した。「貴様にこれをあずけておく」

悠真は剣を受けとりながら眉をひそめる。

「いいのか？　自分の剣を手放して。あんたは丸腰になっちまうんだぞ」

「その剣は私が昔から護身用のために常備していた替わりの剣だ。なくても差し支えはない」

「つまり武士でいうところの脇差(わきざし)っていうわけか」

「脇……？」シャーロットは眉間に皺(しわ)を寄せたが、すぐわれに返って咳払いした。「今後またセラフィーナ様を護ってもらうことがあるだろうから、念のために持っておけ」

「あ、ああ。サンキュー」

悠真は剣を水平に倒し、右手で剣をゆっくりと抜いてみる。赤い鞘からあらわれた刃は、悠真の不安げな表情をきれいにうつし出す。

鏡のようにみがかれた、刃こぼれひとつしていない剣だった。

シャーロットは「夜分に失礼した」と言って席を立ったが、扉の前でふと足を止めた。

「ところでユウマ。昼間の話を蒸し返してしまうのだが、貴様はなぜセラフィーナ様を外に連れ出したんだ？」

「あ？　だからあれは、俺が連れ出したんじゃねえんだよ。セラフィだって、そう言ってたじゃんか」

悠真が剣を置いてぶすっとするのには目もくれず、シャーロットは顎に手をあてて考える。

「セラフィーナ様は自分で外に出たいとおっしゃったそうだが、それは本当なのか？」

「ん？　えっと」悠真も腕を組んで考える。「いや、違ったんじゃないかな。俺もあまり覚えてないけど、セラフィは確か、自分が外に出たら危ないって認識してたみたいだったし」

「やはりか。私もそうだと思っていたのだ。……だからか。昼間に話を聞いたときに妙な違和感があったのは」

シャーロットは扉の前で石像のように身体を固まらせる。昼間に彼女が悠真を責めたのは、どうやらそれなりの憶測があってのことだったらしい。

――じゃあ、そもそもだれが……？

悠真は目をつむり、外出の話があがったときのことを想像する。外出しようと言ったのは悠真とセラフィではない。シャーロットは用事があって朝から宮殿にいなかった。

突然悠真の全身を怖気が走った。目を開き、あわててあたりを見わたす。

何日か住んでも慣れないセレブな部屋は、とても広くて豪勢な部屋だと思っていた。広すぎて少々いづらいが、この部屋が怖いと思うことは一度もなかった。

だが今は、怖い。身体が凍えてしまうくらいに、怖い。

「シャ！　シャーロット！」悠真は剣を持って立ち上がった。シャーロットはけげんそうに悠真を見つめる。「何だ、ユウマ」

悠真は唾をごくりと呑んだ。

「いいか。お、落ち着いて、聞いてくれ」

11

「いまだに信じられん」

刻印術で光らせるランタンを右手に持ち、悠真が廊下のまん中を歩く。その後ろでシャーロットが小声でつぶやいた。

悠真はランタンで足もとを照らしながら慎重に前を歩く。

「俺だって信じられねえよ。でも今日のことを考えると、すごい怪しいって思ってくるだろ？」

「いや、それはわかってるのだが」

悠真にしがみつくようにセラフィが悠真の左腕をにぎっている。光に映し出された彼女の唇は青い。身体も少しふるえている。

「ユウマ。ほんとなの？　……あたし、嫌だよ。こんなの」

「気持ちはわかるけど、セラフィは俺たちといっしょにいなきゃだめだ。セラフィがひとりでいたら、何かあったときに俺とシャーロットが護れなくなるからな」

悠真もセラフィの手をにぎり返す。好きな子と手をにぎれるのは心臓が飛び出しそうなほど嬉しいが、今はそれを喜んでいる場合ではない。

夜中の宮殿は暗く、ランタンだけでは心もとない。一定間隔で壁にロウソクがかかっているためまっ暗闇ではないが、まわりと足場を照らす程度の明るさしかないため、廊下の奥まで視認することができない。

まるで真夜中のホテルの中を歩いているようで気味が悪い。これでもし仮面の暗殺者があらわれたら、驚きのあまりに卒倒してしまうかもしれない。

悠真は右側を歩くシャーロットにふり向く。

「シャーロット。念のために聞くけど、逃げる準備はできてるんだよな」

「だいじょうぶだ。宮殿の見取図から逃げ道は確保してある。外にムルムルも準備してある」

「さすがシャーロットだ。準備に抜かりはなしか」

「しかしユウマ、どうやって追求するつもりなのだ？　妙な言いがかりをつけると、あちらにうまく言いくるめられてしまって、むしろ貴様の立場が苦しくなってしまうのだぞ」

「そうだな」悠真はうつむいて考える。人を詰問（きつもん）した経験などないため、どう責めれば相手を畳みかけられるのかわからない。

悠真は廊下の奥を見やった。

「これはまだ俺の憶測でしかないから、何か決定的なものが見つかるまでは責めづらいと思うんだよ」

「まあ、そうだな」

「だからとりあえず、まずは様子を見よう。……それでもし違った場合は、俺を煮るなり焼くなり、好きなようにしてくれ」

廊下の角を曲がり、赤い絨毯（じゅうたん）が敷かれた直線の道をひた歩く。宮殿の廊下は漢字の田の字を描くように縦と横に三本ずつつくられており、悠真たちは田の字の右上――北東の角を曲がったところだった。

目的地は北側のまん中にある部屋――宮殿の主であるマーカスの私室。

暗がりを黙々と歩いて、やがてマーカスの部屋に到着した。部屋の扉は少し開いていて、部屋の中から明かりの弱々しい光が漏れている。

悠真はランタンの火を消し、壁にぺたりとはりついて中の様子をうかがう。五十畳はあるかと思われる広間のまん中にマーカスの背中が見えて、だれかと話をしているようだった。

かすかだがマーカスの声が聞こえる。やはり、こんなことは、と早口で相手をまくし立てているようだった。話の内容まではうまく聞きとれない。

――マーカスさんはだれと話してるんだ？

悠真は目を凝らして室内をのぞきこむ。マーカスの前には黒い影のような男が座り、丸いテーブルを挟みこんでいる。

――あ、あいつは！

悠真は思わず息を呑んだ。男は黒装束のような服で全身をすっぽりと覆い、顔に銀色の仮面をつけている。湖畔で三匹のアムラウを従わせていたあの男に間違いなかった。

唖然と腰を抜かす悠真をけげんに思いながら、セラフィとシャーロットも部屋の中をのぞきこむ。セラフィがすぐに「あっ！」と声をあげて口をおさえた。

「だ、だれだ！」

がたっと音がしてマーカスが戸口にふり向く。悠真たちが扉を開けて入室すると、マーカスは怯えた表情をさらにひきつらせた。

「セ、セラフィーナ、様」

「マーカス」

セラフィは言葉を失い、戸口で茫然と立ち尽くす。シャーロットが守護するように彼女の前に立つ。

「マーカス様。そちらの仮面の方はどなたですか。黒い服とは、ずいぶんと暗殺に向いた格好をしておられるようですが」

シャーロットは腕を組んでマーカスと仮面の男を憤然と見下ろす。マーカスは焦燥して立ち上がり、「ち、違うんだ！」と声をふるわせる。

悠真はシャーロットのとなりで仮面の男を指差した。

「シャーロット、こいつだ！　この仮面ヤローが、湖のとこで幻妖をつかって俺たちを襲わせたんだ」

「何っ！？」

シャーロットは腰を落として身がまえる。

「マーカス様、これはどういうことでしょうか。私にもわかるように説明していただきたいのだが」

「待て！　待つんだシャーロット君。君は何か、とんでもない誤解

をしている」
「これのどこが誤解なのですか！」シャーロットが大喝した。「セラフィーナ様を襲わせた暗殺者と通じ、今度はどのような手を弄するつもりなのか。すべてをつつみ隠さずに白状していただきたい。セラフィーナ様の御前（ごぜん）で」

シャーロットがすり足で一歩を踏み出す。マーカスはさらに狼狽して部屋の後方へと下がる。

悠真はシャーロットの前に立って、右手で彼女を制した。

「マーカスさん。あんたはここに戻ってきてからずっと様子が変だったけど、その理由がやっとわかったよ。……いつセラフィを襲おうか、何食わない顔しながらずっと様子をうかがってたんだな」
「い、言っている意味が、よくわからんが――」
「ふざけんなよ！」

悠真の頭にも怒りがこみ上げてきた。

「今日のことは全部あんたが仕組んだんだろうが！　ずっと部屋にいたら気分がおかしくなるからとか、適当な理由をならべて俺たちを外に出して、その仮面ヤローが待つ場所に誘導したんだ」

悠真はぎりぎりと歯ぎしりする。

「あのとき、あんたとまわりの召使いが急にいなくなったから、変だと思ってたんだ。……それに今思えば、シャーロットを湖の調査に行かせたのも計画の前準備のひとつだったんだな。シャーロットがいたら、あんたが外に誘い出すときに絶対怪しむだろうからな」
「何だとっ！？」

シャーロットは愕然と悠真を見上げる。悠真は拳をにぎりしめてマーカスをにらみつけた。

「どうしてだ。……どうしてなんだよ、マーカスさん。あんたはセラフィを擁護する立場の人だったんじゃなかったのかよ。何で第二王妃なんかの命令に従ってんだよ」

マーカスは冷や汗を流しながら口をかたく閉ざしていたが、やがて力なく肩を落とした。

「もう終わりなんだよ、ユウマ君。われわれはもういくらあがいても、エリザベート様とエドワーズ様には勝てないのだ」

「そんなの、やってみなきゃわからねーだろうが！　何あきらめてんだよ。あんたは偉い大臣なんだろ！？　くそ王妃のふざけた計画なんかに屈服してんじゃねーよ！」

「ユウマ！」

いきり立つ悠真の肩をシャーロットがつかむ。

「言いすぎだ、ユウマ。そんな言葉が王宮に知れたら、貴様が名誉毀損の罪に問われることになるのだぞ」

「わかってる。わかってるんだよ！　そんなことは」

悠真の肩がひとりでにふるえる。怒りで、抑えられないほどに。どうしてこれほどまで怒りがこみあげてくるのか、悠真にもわからなかった。

場が膠着しているのを見計らい、仮面の男は後ろの窓を押し開けた。強風が吹きつける窓に身を乗り出し、漆黒の闇の向こうに姿を

消す。

「あっ、待て！」

悠真とシャーロットが駆けつける傍らで、マーカスは棚から呼び鈴をとり出す。鈴を鳴らしながらセラフィのわきを通りすぎ、部屋の外へと消えていく。

「だれか、だれかいないか！　禁衛師士のシャーロットと部外者のユウマが造反したぞ！　はやくやつらを捕らえるのだ！」

「何だって！？」

悠真は驚いてセラフィとシャーロットと顔を見合わせる。急いで部屋から飛び出すと、左右の部屋から扉が押し開けられて、中から従者たちが飛び出してきた。

1

扉から出てきた従者たちは、セラフィを見て深々と頭を下げた。

「セラフィーナ様。ご機嫌麗しゅうございます」

「あっ、うん」

「先ほどマーカス様のお声が聞こえたのですが、どちらに行かれたかご存知でしょうか？」

「えっ。……えっとねえ」

言葉に窮するセラフィを隠すようにシャーロットが立ちはだかる。親指で廊下の後ろを差した。

「マーカス様ならあちらに向かわれた。突然あらわれた暗殺者をおひとりで追跡しておられる」

「なっ……！　それは本当ですか！？」

従者たちは唖然と口を開き、互いの顔を見合わせる。どうやら彼らはまだ状況の把握ができていないらしい。

シャーロットは彼らを毅然と見つめ返す。

「私たちはセラフィーナ様を安全な場所へお連れするゆえ、マーカス様を援護することはできない。貴公らは至急マーカス様と合流してくれ」

「りょ、了解しました！」

従者たちは血相を変えて悠真たちのわきを駆け抜けていく。彼らの背中を見送ってから、悠真はシャーロットの横顔をちらりとのぞ

いた。彼女は悪びれる様子を見せずに涼しい顔をしている。

「よくあんなうそがつけるなあ。あんたは王宮を護る偉い師士なんだろ？」

「ときには詭道（きどう）を用いることも必要だ。それが師士というものだ」

悠真たちは階段を降りて宮殿の裏口へと向かう。一階の廊下でも数人の従者と出くわしたが、シャーロットが適当なうそをならべてすべて追い払った。

――この人、くそ真面目で融通の利かないやつなのかと思ってたけど、意外と機転がはたらくんだなあ。

シャーロットはセラフィの手をにぎりながら廊下をひた走る。その背中をながめて、悠真は頬をゆるめた。

宮殿の裏口では、二頭のムルムルが待機していた。手づなを木の枝につながれて、退屈そうに地面を足で蹴っている。

シャーロットはムルムルに急いで駆けつけると、結んでいた手づなを解いて背中に飛び乗る。セラフィに手を差し出して彼女を後ろに乗せた。

「ユウマ！　貴様はそのムルムルに乗れ」

「わかってるよ！」

悠真もシャーロットに習い、枝につながれた手づなをふり解こうとする。だが手づなはかたく結ばれているため、うまく解くことができない。

「ユウマ、何してるのだ！　早くしろ」
「わ、わかってるって！」

シャーロットはムルムルを寄せて悠真に叫ぶ。だが、そばで焦らされると、手づなが余計にふり解けなくなってしまう。悠真の指は汗ばみ、縄の表面でつるつるとすべってしまった。

「待て！」

後ろから突き刺さるような怒声が聞こえてふり返ると、マーカスが鬼のような形相で立っていた。ふっくらとした顔には大量の汗が浮かび、はあはあと肩で息をしている。

彼の後ろには数十人の従者たちがずらりとならんでいる。腰に差した剣の柄に手をあてて、今にも襲いかかってきそうだった。

マーカスはこちらを指差した。

「そこにいるシャーロットとユウマは闇の使者の手先だ！　早く捕らえるのだ！」

シャーロットは手づなを引いて、マーカスをきっとにらめつける。

「お前たち、その男にだまされるな！　闇の使者と通じる悪の手先はその男だ。状況をよく見極めろ！」
「な、何いぃぃ！」

マーカスは拳をふるわせて地団駄を踏む。後ろをふり返って従者に号令するが、従者たちは困惑の色を浮かべてうろたえるばかりで、悠真たちに飛びこもうとしない。

悠真は結ばれていた手づなをふり解き、ムルムルに飛び乗る。激高するマーカスを無視して従者たちに叫んだ。

「マーカスさんは闇の使者とぐるになって、幻妖にセラフィを襲わせたんだ！」

「で！　でたらめなことを抜かすな！」

「顔に銀色の仮面をつけた男がまだ近くにいるはずだ！　そいつを早く捜すんだ。そうすれば俺たちが悪くないってことがわかるから！」

シャーロットが「いくぞ」と言って手づなを叩く。悠真もぎこちない手つきで手づなを打ち、シャーロットの後に続く。

前を奔らせながら悠真はちらりと後ろをふり返った。宮殿の裏口ではマーカスひとりがヒステリックに騒ぎ立てていた。

悠真たちはムルムルを奔らせて夜の森を駆け抜ける。鬱蒼（うっそう）と茂る木に囲まれた森の道はまっ暗で、ほとんど前が見えない。

ムルムルにゆられながら悠真は空を見上げた。木の幹から生えた無数の枝と葉がぶ厚い天井を形成し、夜空を覆い隠している。紅い月の光は地面まで差しこまない。

「ユウマ、追っ手はきてるか？」

前を奔るシャーロットがこちらにふり向かずに言った。悠真は手

づなをにぎりながらそっと後ろをふり返る。視界に映るのは太い木の幹に囲まれた暗闇しかない。

「いいや、きてないんじゃないか、多分」

「そうか」

ぽつりとつぶやくシャーロットの後ろ姿を見て、悠真はにやりと笑った。

「あんたのとっさの大法螺（おおぼら）がこんなに通用するとはなー。まあ、平然とうそつきはじめたときは冷や汗だらだらもんだったけどな」

「ほざけ。ラネリーの従者たちは、マーカス様の言葉を鵜呑みにしていいのか迷ってるだけだ。私の言葉にだまされてるわけではない」

「そうか？　あんたの言葉でけっこう攪乱（かくらん）されてたっぽかったけどなあ」

悠真は「はは」と声を出して笑う。シャーロットが「あまり声を立てるな」と機嫌を悪くしたが、少しも気にならなかった。

悠真は腹をおさえながら、それとなくセラフィを見つめる。彼女はシャーロットの背中にしがみついたまま、身動きひとつしないでじっとしている。

幻妖の件（くだり）はマーカスが首謀者だったという話を伝えてから、セラフィはほとんど口を開いていない。両手をにぎりしめて、涙を堪えるような表情で口を閉ざしているのだから、悠真はセラフィのことが気がかりでならなかった。

――後でセラフィを元気づけてあげないとな。

トンネルの中のような暗闇をひたすら奔ると、突然開けた場所に差しかかった。一面に雑草が生い茂る野原は木が生えておらず、夜空から明るい月の光をあびている。森の中よりもはるかに明るく、安心できる場所だった。

野原のわきに一軒のあばら家が建っていた。木でできた家は壁がぼろぼろにくずれ、ところどころに穴が開いている。見るからに空家だが、普段ならまず利用しないなと、悠真は思った。

「仕方がない」シャーロットはあばら家を見て手づな引っ張った。ムルムルが顔をふり上げて前を歩く足を止める。「今晩はここで宿をとりましょう」

悠真はムルムルから飛び降りて、手づなを近くの木に結びつける。すぐにセラフィの手をとって、彼女をムルムルから降ろした。

シャーロットもムルムルから飛び降りると、すぐに手づなを結びつける。茫然とするセラフィの前でかた膝をつき、彼女の手を両手でかかえた。

「セラフィーナ様、申しわけありません。逃亡の最中ですので、充分な宿をとることができません。今晩はどうかここでご辛抱ください」

「いいよ、そんなに気をつかわないで。あたしは平気だから」

セラフィは苦笑するとその場に座りこむ。体育座りのように両足を腕で抱えて、野原の向こうを茫然とながめている。マーカスのことがよほどショックだったのか、セラフィはかなり落ちこんでいるように見える。

――そりゃあそうだよな。信頼してた部下に裏切られたんだもんな。

セラフィはみんなと仲良くすごしたいと思っているが、彼女のまわりは少しずつ離れはじめている。それがたとえ自身の人望の有無と無関係だったとしても、とても受け入れがたい現実であることにかわりはない。

悠真は宮殿の裏口で怒り狂っていたマーカスの姿を想像する。怒り狂うべきなのはどっちだと、悠真は思った。自分の都合で勝手に裏切っておいて、終いに切れるなんて非常識にもほどがある。それが大臣たる男のとるべき行動なのか。

――ひでえ。ひでえよ、こんなの。

悠真はセラフィの落ちこむ姿を見て拳をふるわせていたが、

「ユウマ」

シャーロットに唐突に呼ばれて肩をびくっと反応させた。

「な、何だよ」

「貴様は刻印術がつかえるんだろう？　セラフィーナ様に暖をとっていただきたいから、そこに火の刻印を描いてくれないか」

「あ、ああ。わかったよ」

悠真は足もとに落ちている木の枝を拾い、地面に炎の刻印を描く。となりではシャーロットが枯れ木を集めている。

「なあ」悠真は右手を止めてシャーロットを見やった。「マーカス

のヤローに裏切られたのに、あんたは何で平気でいられるんだ？」
「知れたことを」シャーロットは枯れ木を集めながら言った。「文句を言うよりも先にすべきことがあるからだ。それとマーカス様は宮伯だ。野郎などと気安く呼び捨てるのはやめろ」

悠真は右手をにぎりしめる。ばきっと音がして木の枝がまん中で折れた。

「だって、悔しいじゃねえか。あのヤローはセラフィの重臣なのに裏切ったんだぞ。一発くらい殴らねえと気が済まねえよ」

シャーロットは作業の手を止めてため息をついた。

「貴様の気持ちはわかる。だが、今は言うな」
「何でだよ！」
「セラフィーナ様が悲しむからだ」

悠真は口を噤(つぐ)んで後ろのセラフィにふり返る。シャーロットはため息をついて、「作業の手を止めるな」とだけ言った。

悠真が炎の刻印を描ききると、刻印のまん中から赤い炎が出現した。悠真は炎を木の枝に灯し、シャーロットが集めた枯れ木に灯す。小さい炎は枯れ木に着地すると少しずつ勢いを強め、やがて大きな焚き火ができあがった。

悠真は木の枝を焚き火の中に投げ捨てて、セラフィと少し離れた位置に座る。シャーロットはセラフィの後ろをまわり、彼女の反対側に腰を降ろした。

悠真はシャーロットの横顔を見つめた。

「なあ、これからどうするんだ？」
「さあな。まずは宿を探さなければいけないから、近くの街を探そうと思ってるが」
「そうだな。まずは寝床だよな」

悠真も体育座りをして両膝をかかえる。焚き火の近くだから肌寒くはないが、心細さで身体がひとりでにふるえてしまう。あたりは森林地帯だが、街はあるのだろうか。

――でも、今は探すしかないんだよ。じゃなきゃ次のことなんて考えられないんだから。

だだっ広い野原はぱちぱちと炎の燃える音だけが鳴りひびく。口を堅く閉ざすセラフィのとなりでシャーロットも黙然としているため、会話が何も出てこない。

だが悠真の心も憔悴（しょうすい）しきっているため、とても歓談できる気分ではなかった。手足は疲れ、身体を少し動かすだけで億劫（おっくう）だった。

「マーカスにも、事情があったんだよね」

かなりの時間に沈黙が流れてから、セラフィがぽつりとつぶやいた。悠真とシャーロットはセラフィの横顔を見やった。

「じゃなかったら、マーカスがあんなことするわけないもんね。……そうだよ。そうなんだよ」

セラフィは膝に額をつけて、ふるふると身体をふるわせる。悲しさのあまりに泣いているのだろうか。

悠真は顔を上げて正面の焚き火を見つめた。

「そうだよ。マーカスさんにも、きっと事情があったんだよ。……きっと」

ぱちぱちと燃える焚き火は夜空に煙を立ち上らせていた。

2

悠真たちは森の中で一夜をすごした。火を焚いていたら追っ手に気づかれるのではないかと悠真は思ったが、幸いにも追っ手に見つかることはなかった。

まだ日が出たばかりの暗い暁(あかつき)のころに、悠真たちはムルムルの背に乗って出発した。森の奥からしめった夜風が吹き、寝起きの身体をひんやりと冷たくさせる。

――眠い。

悠真は肩をふるわせながら、しょぼしょぼする目を右手でこする。前にはムルムルにまたがるセラフィとシャーロットの背中が見えるが、会話はひと言もない。

――そりゃあそうだよな。こんな時間だもんな。

あちらの時間にして朝の五時ごろ。眠くて会話する気が起きないのはあたり前である。悠真は「眠っ」と言葉をこぼしてだらりと背中を丸めた。

ムルムルをとぼとぼと歩かせて一時間くらい経ったころ、不意に森が開けて草原らしき場所に出た。あたりには大きな岩が転がり、雑草が微風(そよかぜ)を受けて葉をなびかせている。

悠真は右手をかざして草原の向こうを見やる。うすい霧のかかる空気の向こうに、うっすらと街の影が見える。

「あ！　街だ。セラフィ、向こうに街が見えるぞ」
「えっ、ほんと？」

セラフィは身体をかたむけて、シャーロットの背中から草原をのぞきこむ。大きな目を見開き、「あ、ほんとだ」と言って微笑んだ。

セラフィの笑顔を見ていると、悠真の腹から突然ぐうと音が鳴った。悠真はムルムルの首に寄りかかった。

「ああ、腹減ったよ。とりあえずさ、街に行って何か食おうぜ。腹減りすぎてもう死にそうだよお」
「ユウマってば、そんなにお腹空いてたの？」

セラフィはシャーロットの背中にしがみつきながら、くすくすと笑った。

悠真たちは草原をとぼとぼと歩いて街へと向かう。草原の左側は切り立った断崖（だんがい）になっていて、崖の向こうに白い雲海が見える。雲は今日も変わらずに右側へと流れている。

草原を抜けて悠真たちはカノックの街に到着した。建物は首都のグラスデンと似て白い壁でつくられているが、地面が舗装されていないため少し大人しいたたずまいをしている。

悠真たちは通りをとぼとぼと歩く。まだ朝早いため人の姿はほとんど見えない。

悠真はムルムルの上でぐったりする。

「とりあえずどっか入ろうぜ。くたくたで死にそうだよ」

「たわけが。こんな時間にやってる店などあるわけないだろうが」
シャーロットは視線だけを向けて悠真を叱咤(しった)する。悠真はむっとしてシャーロットをにらみつけた。
「だったらコンビニとかに入ればいいじゃんか。おにぎりだって売ってんだし」
「コンビニってなあに？」
今度はセラフィが首をかしげる。悠真ははっとわれに返り、「いや、ごめん。こっちの話」と返した。
――そっか。こっちの世界はコンビニなんてないんだよな。俺としたことが、つい。
朝早くで店がまだ開いていないため、仕方なく近くの公園で休むことにした。腐りかけた木のようなベンチに悠真たちは三人で腰かけて、開店時間になるまで背もたれに寄りかかりながらすごした。
待っている間もこれといった会話は出なかった。寝不足で眠気がひどいためであったが、精神的なダメージが大きかったからかもしれない。
陽がだいぶあがってきたころに、悠真たちは一軒の宿屋に入った。しかしそこはぼろいアパートのような安い宿で、底辺のランクに位置するような場所だった。
床はみしみしと音を立て、廊下の柱には鼠(ねずみ)にかじられた痕(あと)がたくさんついている。ラネリーの宮殿のセレブな廊下との格差がはげしくて、悠真は思わず吐き出しそうになってしまう。

――よりによってこんなぼろ宿に止まるのかよ。金がないのはわかるけど、まさかこんなにグレードが急落するとは。こりゃあいくら何でもきびしいぜ。

悠真はとなりを歩くセラフィを見下ろす。セラフィは床やあたりの壁を見わたして、顔を青くしている。このようなぼろ宿に泊まるのは初めてなのだろうから、気持ち悪いと思ってしまうのは無理もないと、悠真は思った。

「これからどうするつもりなんだ？」

案内された部屋の扉を閉めて、悠真はそう切り出した。シャーロットは扉に寄りかかりながらそっと腕を組む。

「今は有り金が少ないからな。他の宮伯に頼るしかあるまい。紫官のアレクシス様のところか、それとも白官のデズモンド様のところがいいか」

「ちょっと待て。宮伯っていうのは何人いるんだよ。ひとりじゃないのか？」

「何を言ってる。宮廷の中に六官あり。紫官、黄官、青官、紅官、白官、緑官のそれぞれに長官の宮伯がいるのだ。ひとりなわけがなかろう」

「なかろうっつったって、そんなの俺は知らねえよ。宮廷の官吏のことなんて聞いたことねえもん」

ぶすっと悪態をつく悠真にシャーロットはすかさず反論しようとしたが、起こした身体をまた扉にあずけて「そ、それは悪いことをしたな」とだけ返した。

悠真は机から椅子を引っ張り出して腰を下ろした。

「でも、他の宮伯は信用できるのか？　マーカスさんみたいに、第二王妃の息がかかってるんじゃないのか？」

「それは何とも答えがたいな。あのようなことが起きた以上、他の宮伯ならば安全だという保障はどこにもないからな」

シャーロットは顎（あご）に手をあてて、「ではどうすればよいのだ」とつぶやく。どうやら彼女も目的地を決めかねているようだった。

悠真はセラフィの顔をそっとのぞきこむ。彼女はベッドに腰を下ろして、悠真とシャーロットの顔をじっと見つめている。その瞳には申しわけないという気持ちと、現状を何とか打破して欲しいという願いがこめられているように思える。

――他には頼れない。金も少ない。でも、そもそも王宮に帰れれば、こんな旅を続けなくてもいいんだよな。

悠真は王宮に帰る手段について考えてみる。王宮の中は、暗殺者のシリルの出現によって混乱しているという。だがそれはマーカスの言葉であったから、今となっては信用に足りるか疑問が残る。

――でも、第二王妃がのさばってるんだから、どっちにしても王宮の中は危険なんだよな。

だが、第二王妃がいなくなればセラフィは王宮に帰れるのだ。どうにかして第二王妃を倒す方法はないのだろうか。

悠真は背中をだらりと丸めてシャーロットを見やる。口を引きつらせながら、にいっと笑みをつくった。

「なら、第二王妃の尻尾をつかむってのはどうだ？」
「何っ」
シャーロットがとたんに顔をあげる。いぶかしい表情を浮かべて悠真を見下ろす。
悠真は椅子から立ち上がった。
「俺たちには金がない。かといって他に頼るのも危険がともなう。なら、もう王宮に帰るしかない」
「何を言ってる。王宮になんて帰れるわけがなかろう。そんなことは貴様ならわかるだろう」
「だから第二王妃の尻尾をつかむんだよ」
悠真は右手をにぎりしめる。
「セラフィの命を狙ってるのは第二王妃だ。あいつが王宮にいる以上、セラフィはずっと逃げ続けなければならない。……けど決定的な証拠がないと、私じゃないってまた白を切られちまう」
「だから決定的な証拠を突きつけて、王妃を失脚させようというのか。だが、証拠をどうやって集めるのだ？　まさか王宮に忍びこむつもりか」
「まさか」悠真は口をひくひくさせてせせら笑う。「あんただってこの前言ってたじゃんか。シリルっていう動く証拠をとっ捕まえるんだよ」
後ろのセラフィが、「あ」と声をもらす。シャーロットも目を見開いて、扉に寄りかかった身体を起こした。

「だが、やつの行方はわからないんだぞ。どうやって探し出すというのだ？」
「探し出す必要なんてないさ。向こうから来てもらえばいいんだからよ」
「だから、それをどうやってやるのだと聞いている」

シャーロットはいらついてきたのか、口調が荒くなってきている。きれいな顔をしているのに短気なのが珠に傷なんだよなと、悠真は彼女を見ながら思った。

悠真は後ろをふり返る。視線の向こうではセラフィがベッドの上できょとんとしている。

――セラフィ。ごめんな。

「シリルとあの仮面をつけた男は、セラフィの命をねらってる。だからセラフィがここにいると教えてやれば、やつらは向こうからやってくるはずだ」
「ばかな！」シャーロットは床をだん！　と踏みしめた。「貴様正気か！？　よりによってセラフィーナ様を囮（おとり）につかうなど……そんなこと、私は絶対に許さん！」

悠真の頭の中の糸がぷつりと切れた。

「じゃあ！　他にどんな方法があるっていうんだよ！　俺だってなあ、危険でふざけた作戦だってことは重々承知してるんだよ。……でも、他に方法なんてないじゃんかよ」
「だからといって、セラフィーナ様を囮につかうことなど、禁衛師士として絶対に許可することはできない！　セラフィーナ様にもしものことがあったら、貴様は――」

「ああもう！　いちいちうっせえな！　いつもぎゃーぎゃー騒ぎやがって。だったら他の方法を提示しろっつうんだよ。あんたは俺よりも頭いいんだろうが」

悠真は頭から湯気を立ち上らせて、シャーロットをきつくにらみつける。シャーロットも目を怒らせて、細い肩をぷるぷるとふるわせている。この間は互いの胸のうちを打ち明けて仲良くなれるかと思ったが、頭の堅いシャーロットとはやはり意見が合わない。

悠真は「話にならねえぜ」と言って椅子にどすんと腰を下ろした。こいつとはもう一生口を利かないと、子供のようなことを考えていたが、

「あたし、やる」

後ろから決然とした声が聞こえて、悠真は慌ててふり返った。

セラフィは、膝の上に置いた両手を堅くにぎりしめていた。泣き出しそうになるのを必死にこらえて、赤くなっている顔を少しふるわせる。

「ユウマが考えてくれた作戦。やるから。……あたしなら、だいじょうぶだから」

2（後書き）

宮廷の官吏（六官）の補足

紫官（しかん）……国政を総轄し、宮中事務をつかさどる。
黄官（おうかん）……地方行政や教育・人事などをつかさどる。
青官（せいかん）……外交・貿易をつかさどる。
紅官（こうかん）……軍事・兵役をつかさどる。
白官（はっかん）……訴訟・刑罰をつかさどる。
緑官（りょっかん）……土木工作をつかさどる。兵器の開発も行う。

二章に出てきたマーカスは青官を管理する宮伯（長官）です。

3

「おっさん」
「あ？　何だ、坊主」
「この串焼き、もらうぜ」

休養のために悠真たちはぼろ宿で一泊した。翌朝、悠真はセラフィとシャーロットをつれて宿を後にする。

大通りをまっすぐに歩くと街の市場があった。学校の校庭のような広い場所にたくさんの屋台が軒をつらね、朝から多くの人でごった返している。

悠真はおいしそうな鳥の串焼きを見つけると、店主の目の前でひょいと掠（かす）めとる。代金を払わずに肉を口にほお張った。

突然のできごとに、手ぬぐいを頭に巻きつけた店主が唖然とする。

「お、なかなかうまいじゃん、これ」
「て、てめえ！」

すました顔で肉を食べる悠真を見て、店主は顔を紅潮（こうちょう）させる。屋台から飛び出して悠真の胸倉をつかんだ。悠真の身体が少し持ち上げられる。

「い……！　な、何すんだよ」
「何すんだはこっちの台詞だ！　食いてえんだったら先に金払いやがれ」
「け、何で俺が金を払わなきゃいけねえんだよ。てめえなんかに」

「あアッ！？」

店主は目をかっと見開く。右手を大きくふりかぶり、悠真の頬を力まかせに殴りつける。吹き飛ばされた悠真が地面に尻をつく。

「ユウマ！」

セラフィが悲鳴をあげて悠真のそばにしゃがみこむ。悠真は「くそが」と洩らして殴られた頬をさすった。

突然の騒ぎにあたりから人が集まる。人だかりのまん中で肩を怒らせる店主を見上げて、悠真はにいっと笑った。

「いいのか？　あんた。俺に手を出して。妙なことしたら、あんた落刑になっちまうぞ」

「何だとこのくそ坊主が！　もう一発殴ってやろうか！」

「け、ざけんじゃねえよ」

悠真は唾を吐き捨ててがばっと立ち上がる。音を出さないように浅く呼吸をして、セラフィを右手で指差した。

「こちらに御座すお方をどなたと心得る！　恐れ多くも第一王妃アンジェリーナ様のご息女、王女セラフィーナ様であるぞ！」

声を裏返しながら叫ぶ悠真を見て、店主が唖然と身体をかたまらせる。悠真の豹変ぶりに思わず呆気にとられているようだった。

まわりから「王女だと？」や「まじ？」という声が聞こえてくる。人だかりがざわざわと騒ぎはじめて、疑いの視線が悠真たちにそそがれる。

屋台の店主は腕を組んで悠真を見下ろす。大根のように太い腕には剛毛がびっしりと生えていた。

「おい、坊主。そのお嬢さんが王女のセラフィーナ様だって？　見えすいたうそでごまかそうったって、そうはいかねえぞ」

「ほう。その目は俺を疑ってるな」悠真は顎に手をそえて、ぐいっと身を乗り出す。店主が半歩下がって後ずさりする。「まああんたが疑うのは無理もない」

悠真はにやりと笑いながらセラフィの後ろにまわりこむ。彼女の長い髪を指でつまんで店主に見せびらかす。

「このうす紫色の髪。宝石のようにきれいな紫色の瞳。そして庶民らしからぬこの高貴なオーラ！　これを見てもあんたはまだセラフィを疑うというのか！」

「疑うのかって言われてもなあ」店主はまわりを見わたしながら言った。「普通、王女がこんなところにいるとは思わねえだろ」

「えっ！？　ここまでやっても信じないのかよ。なかなか強情だな、あんた。……じゃあ仕方ない。セラフィ！　みなさんに妖令術を見せてさしあげなさい！」

「ええっ！？」

セラフィは驚いて飛び上がった。

「ちょ、ちょっと、ユウマってば。やりすぎだよ」

「だって仕方ないだろ。セラフィが王女だっていうのを証明しないと、俺が無銭飲食で捕まっちまうんだからさ」

「それは悠真が悪いんじゃん」

セラフィは口を尖らせて、「じゃあ簡単な子だけだよ」と言ってバッグから紫玉とロッドをとり出した。紫玉を地面に置いてまわりに刻印を描いていく。

描ききった刻印を突くと、電流のような青白い光がばちばちと発せられる。「おお！」とあたりで見守る人たちが一斉にどよめく。

舞い上がる砂塵の中から一匹の子猫があらわれた。水色の透きとおる翼を生やした、黄色の毛並みが可愛らしい猫の天妖だった。

悠真は猫を両手で抱えてまわりの人たちに見せつける。

「ほら、この通り。ええと、名前は――」

「シトリ」セラフィは少し不機嫌な様子で言葉を添える。悠真は満面の笑みでシトリを持ち上げた。「そう！　この子は天妖のシトリ。優秀な妖令師じゃないと呼び出せないんだぞ～」

おぎゃあと赤子のような声で鳴くシトリを見て、あたりが静まり返る。しばらくしてまたざわめき出し、「王女というのは本当なのか？」や「でもあの髪の色は確かに」という声が聞こえてきた。

悠真はシトリを地面に降ろして「こほん」と咳払いした。

「お前たち、何をしている。セラフィーナ王女の御前である」

「もう、ユウマってば」

「一同、頭が高い！　控えおろ～！」

悠真が胸を張って言い切ると、屋台の店主やあたりの人間たちは一斉に地面にうずくまり、「ははあ！」と声を張り上げた。

悠真は平伏する人たちを悠然と見下ろし、胸の前に手をあてる。

「俺はセラフィーナ王女に仕える安藤悠真という。俺はセラフィーナ王女から無銭飲食をしていいという許可を得ているから、金を払わなくてもいいのであーる」

「そんなこと言ってないのに」

「ふふ、そして」悠真はセラフィを無視して後ろをふり返る。呆れ果てるシャーロットをびしっと指差した。「あそこに御座すのは音速の麗人、王宮の華と謳われし禁衛師団の紅一点、美しすぎる女剣士ことシャーロット殿下であーる」

「ば、ばか者！　私の紹介はしなくていい！」

平伏する人たちの視線を一身に集めて、シャーロットが顔を紅潮させる。彼女に肩をゆすられながら、悠真は腰に手をあててがははと笑った。

「どうでもいいが、さっきの『控えおろ～』というのは何なんだ。恥ずかしすぎて死にたくなったぞ」

天幕の張られた休憩場に案内されて、悠真たちはまん中の席に腰を降ろした。細長いテーブルがならべられた休憩場のまわりには、たくさんの人たちが人垣をつくっている。

シャーロットは向かいの席に座り、不機嫌そうに頬杖をついている。首をきょろきょろと動かして、まわりの視線が気になるようだった。

テーブルの上には、色々な屋台から差し入れられた食べ物がたくさん置かれている。悠真はたこ焼きのような丸い焼き物をがつがつと食べながら、シャーロットを見上げた。

「俺のいた国じゃ割りと有名な台詞なんだよ。印籠っつってな、菊の模様が描かれた箱を見せつけて、『この紋所が目に入らぬか～』てやるんだよ」

悠真が食事の手を止めてものまねすると、シャーロットは「貴様のいた国では下らん文化が流行ってるのだな」と呆れ顔でつぶやいた。

悠真は焼き物を口にぱくりと入れて、口をもごもごと動かす。

「俺だってなあ、ほんとならこんな恥ずいことしたくないんだよ。でもしょうがねえだろ。シリルを呼び出すためには、あほなことして注目を集めるしかないんだからさ」

「その割にはずいぶん楽しそうだったけど」

となりに座るセラフィも呆然と悠真を見つめる。差し入れには一切手をつけず、足を閉じてじっとしていた。

悠真は焼き物をぺろりとたいらげると、奥のサラダに手を伸ばす。

「せっかくもらったんだから、セラフィも食っといた方がいいんじゃないか。夜もいっぱい食べれるとは限らないんだから」

「そんなこと言ったって。……これじゃあ王位を乱用して食べ物をせしめてるみたいだよ。あたし、嫌だよ。こんなの」

「セラフィは真面目だなあ。ただでもらったんだから、気にしないで食べちゃえばいいのに」

ひとりでがつがつと食べ続ける悠真を見て、シャーロットはため息をついた。

「まったく、貴様の適応能力には脱帽だな。これほどまで図太ければ、どこに行っても生きていけるのだろうな」

「け。あんたに追われてるうちに適応しちまったんだよ。日本の高校生をなめるんじゃねえ」

悠真たちは夜になるまで宿の外ですごした。暗殺者のシリルたちに見つけてもらわなければいけないのだから、宿に帰るわけにはいかなかった。

とはいえ初めて訪れたカノックの街で行く宛などなく、また大通りを歩いていると通りすぎる人たちの視線が気になってしまうため、街をぶらつくこともできなかった。

結局、どこに行くわけでもなく、昨日休んだ公園のベンチに三人で座り、日が暮れるまで待つことにした。

「うまくいくのかな」

空が茜色(あかねいろ)に染まりはじめたころに、セラフィがそうつぶやいた。悠真は腕を組んで「うーん」とうなる。

「今すぐにっていうのはむずかしいんじゃないかな。シリルとかもセラフィがここにいるっていうのは知らないんだし。でも、セラフィのうわさはすぐに広まると思うから、明日か明後日になればやつらはやってくると思う」

「そっか」セラフィは腿(もも)の上に手をのせて指を遊ばせる。「でも、

もう少し我慢すれば、あたしたちは帰れるんだよね」

――その前にシリルとあの仮面ヤローを倒さなきゃいけないんだけどな。

悠真は右手をにぎりしめて腕に力をこめる。二の腕が少しだけ盛り上がった。

「おう！　セラフィはぜってー王宮に帰してやるからな。大船に乗ったつもりで待ってろよ」

「ユウマもいっしょだよね」

「えっ、俺も？」

「うん。ユウマもあたしたちといっしょに、王宮に来てくれるんだよね」

「えっ、と。それは」

悠真は頭の後ろを掻きながら、何と返すべきか返答に窮する。セラフィの好意はすごく嬉しいのだが（むしろ心臓が爆発しそうだが）、異国出身の平民が王宮に入りこんでもよいのだろうか。

セラフィのまっすぐな視線を受け止めることができず、悠真はシャーロットを見やる。シャーロットは見かねて「はあ」と息を吐いた。

「ことが済みましたら、国王陛下にユウマを推薦いたしましょう」

「ほんとに！？　シャロ」

セラフィは飛び跳ねるように喜び、シャーロットの両手をつかむ。シャーロットはにこりと微笑んだ。

「セラフィーナ様をお護りした功績があれば、国王陛下も考慮していただけるでしょう。ユウマには王宮専属の刻印師兼セラフィーナ様の相談役として、王宮に仕えてもらいましょう。……ユウマ、依存はないな？」
「あ、ああ」

シャーロットの突き刺さるような視線を受けて、悠真はこくりとうなずく。釘を刺されなくても、王女の側近――セラフィの近くにいられることを拒む理由はない。

――いや、でも、いいのか。俺みたいのが王宮なんかに入っちまって。

思わぬ提案に悠真は茫然と空を見上げる。うっすらと伸びる雲の上に、二つの大きな影がうごめいている。二枚の大きな翼を広げる鷲（わし）のような鳥だった。

背中に人を乗せた師獣（しじゅう）が、猛然とこちらに向かってくる。左回りに大きくカーブしながら夕暮れの空を自由に滑空する。

――あれは。

並々ならぬ殺意を感じて悠真は立ち上がる。「ユウマ？」とセラフィがけげんそうに悠真を見上げる。

グライダーのように滑空する師獣の影がどんどん大きくなる。拳ほどの大きさだったのが、数分と経たないうちに軽トラックほどの大きさにまで膨張している。その変化の早さが尋常ではない。

師獣にまたがる影が、突然きらりと光を発した。金属の反射光の

ような、目に突き刺さる鋭い光の線。悠真は思わず目を手で覆い隠す。

師獣の影から、しゅるしゅるとブーメランのようなものが飛んできた。それは平べったい円盤のようなもので、フリスビーと少し似ている。少し厚みがあるからヨーヨーの方が似ているかもしれない。

黒いワイヤーにつながれた、鋭い刃のついた投擲（とうてき）武器――ソーサー。

「セラフィ！　危ない！」

悠真は叫びながらセラフィに飛びつく。どしんと音を立てて倒れるベンチを、高速で回転するソーサーが破壊した。

4

「ヤット見つけましたよ。子猫チャン」

夕焼けの空から二頭の師獣が舞い降りる。

前の師獣から飛び降りたのは、長い白髪を肩に垂らした黒ローブの男、シリル。頬にかかる長い前髪はまん中で分けられて、まるでバンドマンのような髪型をしている。

シリルの後ろで長剣を光らせるのは、銀色の面をつけた仮面の男。黒子のような衣装を着ているためか、横幅が少し細く見える。バレーボールの選手のようにすらっと背が高い。

――来た！

シリルが手を空に向けて手首を返すと、繰り出されたソーサーが高速で回転をはじめる。きゅいんと歯車が高速でまわる音とともにソーサーが舞い上がり、黒い紐に引っ張られてシリルの手に収められた。

悠真とシャーロットは慌てて立ち上がってみがまえる。シリルはふたりを見下ろすように顎を突き出して、細い両目を目一杯に見開いた。

「俺たちにワザワザ所在を知らせるとは、いい度胸ダ。くそ王女もろともテメエラをぶっ殺してやンヨ」

「さあて、何のことかな」悠真はふるえる唇を力をこめて、にやりと笑った。「無銭飲食してちょっと騒がれただけなのに、何であん

たらに所在を知らせたことになるんだ？　意味わからねーよ」

哄笑するシリルの口がぴくりと止まる。

「その目は。……テメエ、何かタクランデやがるな」

「たくらむ？　何言ってんだよ、人聞きが悪い。それじゃあ俺らが悪人みたいじゃないか。たくらむのは悪人であるあんたらの仕事だろ？」

悠真は前髪を掻き分けて余裕の表情を見せつける。シリルは開いた口が塞がらないという顔をしたが、突然腹を抱えて爆笑した。

「オレら闇の使者を罠にハメるってかア？　正気かよッ。テメエみたいなこそ泥ヤローがカ？　バッカじゃねえぇの！」

シリルは口から汚い涎（よだれ）を垂らしながら笑い転げる。下卑た笑い声を聞きながら、悠真は拳をぶるぶるとふるわせる。

――挑発には乗ってこないか。

相手を捕獲する場合、相手を怒らせてペースを乱すのが効果的である。だがシリルはそれを読んだのか、あえて怒らずに笑い転げるという方法を選んだ。

むしろ挑発を逆手にとって悠真の心を逆なでしてくるのだから、たちが悪い。薬物漬けの気違いであっても、暗殺者の名折れではないということか。

悠真は首を動かしてシャーロットにふり返る。

「シャーロット！　二対二だ。いけるか」
「まかせておけ。肩の傷ならもう塞がってる」
「よっしゃ！　なら仮面ヤローを頼むぜ」

悠真は猛然とシリルに体当たりする。シリルは「ち」と舌打ちして後ろに跳躍する。

「私もなめられたモノですね。この間の立会いでずいぶんと思いアガッテイルとみえる」

シリルは袖口に右手を突っこみ、数本の毒針をとり出す。右手を大きくふりかぶり、毒針を悠真に投げつけた。

高速で迫る毒針が、悠真の目の前でスローモーションになる。水の中にいるような耳障りな音につつまれて、悠真の五感が研ぎ澄まされる。体内を巡る血液が沸騰し、身体が突然熱くなる。

――行っけええぇぇぇ！

悠真の身体は瞬時に膝を曲げて地面にしゃがみこむ。頭上をよぎる毒針をかわしながら地面を踏みしめて、シリルの懐（ふところ）に飛びこむ。下から強烈なアッパーを突き出した。

「チイィィィィ！　この紅目ヤローがァ！」

シリルは後退しながら両手をま横に伸ばす。袖口からあらわれたソーサーをにぎりしめて、口を横に大きく広げた。

「シネやあアアァァ！」

シリルは涎を撒き散らしながら悠真に飛びかかる。ダガーのような刃をもつソーサーをふりまわし、悠真をしつこく攻撃する。悠真の身体は上体を前後左右に動かして、ソーサーの刃を器用にかわす。

悠真は後ろに勢いよく飛んでばく転し、シリルと距離をとる。両足で着地してから右手をそっと前に出し、人差し指をちょいちょいと動かしてシリルを誘いこむ。

「その武器は投擲(とうてき)用の武器なんだろ？　この前みたいに投げつけてこいよ。その細い紐を引きちぎってやるからよ」

「何ッ！？」シリルの眉間がぴくりと動く。後ろに跳んで木の枝の上に着地する。「そんなにおのぞみとあれバ、クレテあげましょう」

シリルの両手から二枚のソーサーが投げ落とされる。ずがん！と大きな音がして地面に炸裂する。地面にふたつぽっかりと大きな穴が開く。

「モットモ刻印術で強化シテイルから、キミのやせ細った腕でハ引き千切れマセンがね」

シリルは高笑いしながらソーサーの雨を降らす。悠真の身体は地面に両手をつき、側転飛びでソーサーをかわす。

――この前よりも動きが鋭くなってる。油断して痛い目に遭ったから、やつも今日は本気できてるんだ。

ベンチの上に着地する悠真の右側面から強烈な殺意が襲いかかる。はっとふり返る悠真に仮面の男が長剣をふりあげて斬りかかってきた。

――まじかよ！？

悠真は心の中で悲鳴をあげるが、身体は冷静に反応する。ベンチの背に手をつき、ひらりと跳んで男の剣をかわす。

仮面の男がベンチを足げにして高く跳躍する。後退する悠真にしつこく斬撃をあびせる。

悠真はシャーロットをにらみつけた。

「シャーロット！　何やってんだ。こいつの相手はお前だろ！」

「だまれ！　戦場というのは流水のように変化するのだ。ぼけっとしてる貴様が悪い！」

シャーロットは長剣をかかげながら木の幹を踏みしめる。上空を跳んで木の枝に乗るシリルを斬りつける。シリルは「くそガ」と悪態をつきながら地面に降り立つ。

仮面の男は腰を落として剣を横薙ぎに払う。悠真は前に跳んで剣をかわし、足を突き出して男の左の頬を蹴りつける。男は左腕でガードしたがわずかに後ろによろける。

男はすぐに体勢を立て直して剣をふり降ろす。悠真の身体はふり子のように左右に動き、男の剣を自動で回避する。

「シリルはまっ昼間に平然とセラフィを襲ってきたのに、あんたは何で仮面なんかつけてんだ？　人に見られたらやばいくらい酷い顔してんのか？」

悠真の足が一歩を踏みこみ、強烈なまわし蹴りを繰り出す。仮面

の男は大きな身体をすばやく後退させる。

「いや、そんなことよりも先に聞きたいことがある」悠真は紅い瞳で仮面の男をにらみつけた。「セラフィに忠誠を誓ってたマーカスさんをそそのかしたのはあんたなんだろ。闇の使者ってのは、目的達成のためならどんな汚えことでもやるんだな。さすが世界最大の諜報機関だぜ」

仮面の男は、しゃべらない。男性的な角張った顎を動かさずに口を堅く閉ざしている。不必要におしゃべりなシリルとは正反対である。

男はふりあげた剣を下ろし、仮面のまん中に開けられたふたつの穴から悠真を見つめる。瞳はきれいな碧い色だった。

「あんたらは第二王妃に金で雇われたんだから、あんたらが直接悪いわけじゃないのはわかる。けど。……けど！　あんたは何とも思わねえのかよ。大人たちで寄ってたかって、ひとりの女の子をつけまわしてよお！」

セラフィは倒れたベンチの陰に隠れて、おどおどしながらこちらをのぞいている。身体はふるふるとふるえて、立つこともままならないように見える。

「セラフィは十四歳の女の子だ。俺のいた世界じゃ、十四歳っていったら中学二年か三年生だ。学校で勉強して、友達と芸能人の話とか恋ばなしてる年ごろだ。国のことなんて考えられる年齢じゃねえ」

悠真の拳が小刻みにふるえる。

「それなのに。……それなのに、あんたは幻妖なんかつかってセラフィを襲って、酷いことしてるって思わねえのかよ。人のよさそうなマーカスさんをたぶらかして、セラフィが塞ぎこんで口きけなくなるまで追いつめて、あんたの良心は傷つかねえのかよお！」

男は沈む陽の光を背に受けて、じっと身体をかたまらせている。右手がわずかにふるえているのか、剣の柄からかたかたと金属音が発せられる。

悠真は仮面の男を見たときから、妙な違和感をおぼえていた。なぜかはわからないが、あかの他人と思えないのである。

それは今こうして相対することでさらに深まった。この男は暗殺者ではなく、マーカスと同じくセラフィの近くにいる男なのではないか。

悠真は男が持つ長剣を見やる。剣の柄には篭（かご）がついていて、男の拳をすっぽりと覆っている。ナックルガードと呼ばれるものだが、表面には金の装飾が施されている。シャーロットが持つ剣と同じく、王宮でつかわれているような両刃の宝剣だった。

――あいつの仮面を剥（は）ぎとるんだ。

悠真の想いに反応したのか、悠真の足がひとりでに動き出した。地面を力強く蹴り飛ばし、正面から仮面の男に突撃する。

男は狼狽しているのか、肩をびくつかせて後ろに下がる。右手の剣をぶら下げて、悠真が繰り出す蹴りを必死になってよける。

――お前の顔を見せろおおおおぉォォォ！

人差し指に熱い力が灯り、創造主の指輪が輝き出す。眩しい光が放射線状に放たれ、宵の空を明るく照らす。

悠真の身体はその場にしゃがみこみ、靴の側面に人差し指の先をあてる。指でくるくると円を描き、光の刻印を描き出す。

両手の平と左の膝を地面につき、前傾姿勢で仮面の男をにらみつける。刻印術で強化された足は爆発的な瞬発力を生み出し、猛スピードで仮面の男に急接近する。

「なっ……！」

男が呆気にとられて口を開く。悠真は男の胸倉をつかみ、勢いそのままに強く押し出す。男はなすすべなく地面に押し倒される。

馬乗りになった悠真の右手が伸びる。手を大きく広げて、男の顔につけられた銀色の仮面をがしっと鷲づかみにする。

右手が後ろに強く引かれる。仮面をおさえる紐がぶちっとちぎられて、男から強引に引き離される。悠真の汗ばんだ右手がつるりとすべり、仮面が夜空を舞った。

5

銀色の仮面が音を立てて地面に転がり落ちる。公園のまん中で刃を交差させていたシャーロットとシリルは、異変に気づいてこちらにふり向いた。

「そんな……うそだろ」

悠真の紅い瞳が黒い色をとり戻していく。悠真はふらりと立ち上がり、ふらつく足どりで仮面の男から離れた。

仮面の中からあらわれたのは、白い肌の精悍な男の顔だった。表面は彫りが深くて鼻が高く、髪はうすいエメラルドグリーン色だった。スポーツ刈りのように短く切られている頭は、さっぱりとしていて男らしい。

シャーロットの同僚。禁衛師士セオドラ・トワイラス。

「セオドラさん。あんたが、どうして」

セオドラは上体を起こしたまま、ぐっと奥歯をかみしめる。うつむいたまま、悠真と視線を合わせようとしない。

悠真はこらえきれなくなり、右足をどすんと踏みしめた。

「どうして！　シャーロットの仲間のあんたが、どうして！　わざわざ暗殺者なんかに成りすましてたんだよ。……い、意味わからねーよ」

セオドラはセラフィを守護する禁衛師士のひとりで、マーカスといっしょにラネリーの宮殿にやってきた。だが会議が終わると王宮の様子を見に行くといって、宮殿からすぐに姿を消してしまった。

王宮に帰るという言葉とあのときの沈痛な表情は、すべてうそだったのか。

「セオドラ」シャーロットはがっくりと肩を落としながら言った。

「貴様が、どうして変装などを」

セオドラは顔をうつむかせたまま、すっくと立ち上がった。

「シャーロット。悪いことは言わない。セラフィーナ様をわれわれに引きわたすんだ」

「ふ、ふざけるな！」シャーロットは顔をまっ赤にして怒号した。

「裏切り者の貴様などにセラフィーナ様をわたせるものか！　貴様は自分がしてることの重大さを理解してるのか。こんなことが国王陛下に知れたら貴様は落刑（らくけい）に――」

「その国王陛下のご命令なのだ！」

セオドラは目をくわっと見開いてシャーロットをにらみつける。シャーロットが勢いに圧倒されて後ろにたじろぐ。

「き、貴様は、一体何を――」

「われわれを遣わせてセラフィーナ様のお命を狙っているのは、第二王妃ではない」セオドラの拳がふるふるとふるえる。「セラフィーナ様を狙っているお人は、国王陛下なのだ」

悠真の全身を電流に似た何かが走り抜ける。腰と膝を支える力が抜けて、その場にぺたりと座りこむ。

――うそだろ。だって、セラフィは自分の娘なんだぞ。それなのに。……それなのに、わざわざ暗殺者なんかを雇って、娘の命を奪おうとするなんて。そんな、うそだ。

シャーロットの後ろから、シリルがにたにたしながら歩いてくる。シャーロットがあわてて身がまえる。

「そういうことダカラ、さっさとくそ王女様をわたしてくれないかなア？　こっちだってイロイロと忙しいんだからサア」

「ふざけるな！　貴様らのたわけた讒言（ざんげん）など信用できるものか！」

「アレえ？　まだ状況をワカッテナイのかなあ？　困ったお姉さんダ」

剣先を光らせるシャーロットを見て、シリルはふふんと鼻で笑う。ソーサーを袖口にしまいこみ、シャーロットの前で両手を広げてみせる。

セオドラが忌々しげに首を横にふった。

「アンジェリーナ様がお亡くなりになってから、第二王妃のエリザベート様はエドワーズ様の後見人としての立場を強め、病弱な国王に替わって王政を牛耳るようになった。だが、マーカス様をはじめとした半数の宮伯や師士たちは王妃の専横に異をとなえて、王妃とまっ向から対立した。セラフィーナ様を後継者として祭り上げたのだ」

悠真は固唾をごくりと呑む。

「派閥の分かれた王宮では権謀がはびこり、師士たちは王政を忘れ

て下らんだまし合いばかりをはじめるようになってしまった。帝国が隣国を落としてわが国に迫っているというのに。……王はずっと悩まれていた。押し寄せる病魔とたたかいながら、ベッドの中おひとりでエレオノーラの今後をずっと憂えておられたのだ」

シャーロットは唖然と言葉を失う。かまえた長剣の切っ先がゆっくりと降ろされる。

「シリルがセラフィーナ様を襲ったあの日、国王はマーカス様ら側近を集めて、セラフィーナ様暗殺のご命令を下されたのだ。その後すぐにマーカス様の使いの者から連絡が入り、マーカス様の別宅にセラフィーナ様がご滞在であると告げられた」

セオドラは悄然と肩を落としながらこちらにふり返る。目の下にはくまができ、とても疲れ切った顔をしていた。

「マーカス様は自室に閉じこもり、一晩お悩みになられた。だが国王の命に抗うことはできない。われわれは断腸の思いで宮殿を訪れ、そして――暗殺を実行したのだ」

言葉にならなかった。悠真は何とか反論を試みようとしたが、言葉がすべて喉をつかえてしまう。

セオドラとマーカスは、国王の命令で仕方なくセラフィの暗殺に加担している。そして国王は、停滞する国政のため、ひいては国のためにセラフィを犠牲にしようとしているのだ。

壮絶な覚悟である。セラフィの暗殺にそれほど重大な意味がこめられているとは、思いもよらなかった。

だが、それでいいのか。国のために実の娘であるセラフィを犠牲にして。それで国王は本当に満足なのか。

「みにくい後継者争いを終結させるためには、どちらかが倒れるしかない。だから国王はご決断されたのだ。セラフィーナ様のお命を奪い、エドワーズ様を正式な後継者として迎え入れる。そうすれば、国は――」

「ちょ！　ちょっと、待ってくれ」

神妙に言葉を続けるセオドラが悠真を見やる。シャーロットとシリルも顔をあげて、一同の視線が悠真に突き刺さる。

胸の心臓がはち切れんばかりに暴れはじめる。悠真は深呼吸をして気持ちを落ち着かせる。

「後継者争いを止めたいっていうのはわかるけどさ。その、他にも方法があるんじゃないのか。セラフィの命を奪うだなんて、そんな物騒な方法じゃなくても――」

「どんな方法だ」

「えっ？」

「どんな方法をとればみなが満足する結果になるのだ。言ってみろ」

セオドラが悠真をまっすぐに見下ろす。その目が氷のように冷たい。

「そ、それは」

「王子派の人間も、王女派の人間も、ひとりの犠牲も出さずにすべてが丸くおさまる方法があればと思っている。だが相対する存在がいる以上、どちらかが倒れるまで権力争いが収拾することはない」

「そんな、だからって、命を奪わなくても」

「セラフィーナ様がご健在とあれば、屈服した王女派の人間たちは王妃の専横のもとで不満をくすぶり続けるだろう。不満はやがて乱となり、戦争へと凄惨さを強めていく。そうなってはいけないのだ」

セオドラが悠真に近づき、わきをすっと通りすぎていく。地面に落ちた仮面を拾い、光沢のある銀色の表面を見つめる。

「とはいえ、そこのシリルが王宮を派手に荒らしてしまったから、王妃を糾弾する声はしばらく止まないだろう。だが、それも時間の問題だ。セラフィーナ様がお亡くなりになられたとわかれば、王女派の人間たちはやがてあきらめ、王妃に屈服するだろう。王宮はひとつに統一されるのだ」

セオドラは仮面を装着し、茫然とするシリルを見やった。

「シリル！　一旦引くぞ」

「ええっ！？　ナンデだ。ここでコイツらをまとめてシマツしちまえばいいじゃねえか」

「時間をかけすぎたせいで人が集まってきてしまった。ここでは人目についてしまう」

騒ぎを聞きつけたのか、公園のまわりには人が集まりはじめている。シリルは「はあ」とため息をもらし、右手で髪をくしゃっとつかむ。

「アーア。どっかのダレカさんがくちゃくちゃくちゃくちゃ、くっちゃべってるせいで、メンドウなことになっちまってるじゃないのよ。ダカラターゲットには情をうつすなとイってやったのに」

「だまれ。一度引いて態勢を立て直す。貴様はだまって私についてこい」

「ハイハイ。リョウカイしましたヨ～」

セオドラとシリルは師獣にまたがり、手づなを手荒く引っ張る。二頭の師獣は大きな翼を広げて宙を浮き、夜空へと飛び立っていく。

夜空に溶けこんでいく師獣の影を、悠真はただながめているしかなかった。

「セラフィーナ様！」

シャーロットの悲鳴のような声が聞こえて、悠真はあわててふり返る。シャーロットは剣を鞘（さや）に収め、ベンチの陰に隠れているセラフィのもとへと駆けていた。

「セラフィーナ様、ご無事ですか。お怪我（けが）はございませんか」

シャーロットはセラフィの肩をつかみ、セラフィの顔と身体をのぞきこむ。大げさに心配するシャーロットを見かねてセラフィが苦笑した。

「うん。あたしはだいじょうぶだよ。シャロこそだいじょうぶ？」

「は。私は大事ありません。セラフィーナ様に見守っていただけたので、斬り傷ひとつ負わずにすみました」

「そっか。よかった」

セラフィは首を少しかしげて、いつもの笑顔を向けている。王宮ではじめて出会ったときに見た、無垢な笑顔。彼女が心の底から笑っているときの笑顔は、小学生のように無邪気だった。

彼女の表情には少しの翳（かげ）りも感じさせない。マーカスに裏切られ

たときは茫然自失していたのに、どうしてなのだろうか。衝撃の連続で感覚が麻痺(まひ)してしまったのか。

――でも、セラフィがしっかりしてくれてることに越したことはないか。

悠真は腰に手をあてて、遠くからセラフィをながめていたが、

「あ――」

セラフィの頬にひと筋の涙が伝った。

「おかしいな。シャロもユウマも怪我しないですんだのに、どうして泣いてるんだろ」

セラフィは目から流れ落ちる涙をおさえようと、両手で目もとをごしごしと拭う。だが、涙は涙腺から滝のようにあふれ出し、彼女の頬を伝って地面にこぼれ落ちる。

「どうして。おさえてるのに、全然止まらないや。ね、おかしいよね、シャロ――」

「セラフィーナ様！」

シャーロットは涙で声を枯らしながら、セラフィを強く抱きしめる。その肩は小刻みにふるえている。

セラフィは目を大きく見開いて身体をかたまらせる。目もとをおさえていた手がだらりと下がり、上体をシャーロットにあずける。流れ落ちる涙がシャーロットの細い肩を濡らす。

――セラフィ。

セラフィはシャーロットに抱きついて、わんわんと声を出して泣いた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8480t/

天空の刻印師

2011年10月5日23時45分発行